

文明九年九月七日

七二四

祐躬兩年
進上ノ例
ニ萬正ヲ
云フ

甘露寺親
長勸修寺
見テニ意
ヲ徴ス

社司造營
用脚進上
ノ例ナシ
ヲ祐躬先
例進ス

廿日、午後參内、被召御前、暫有御雜談、以昨日申入祐香祐躬相論事、予所存爲
何様哉之由有仰、迷是非之由言上了、仰云、祐躬就望職、造營料万疋兩年之内
云々、可進云々、祐香被召難治之間、万疋可進之由申之、有餘力者、何此間當職中、
強如形造營事者不申沙汰哉、日供神用闕乏之由難申、今又万疋可進之由申
之候、不相應也、祐躬事、已前神躰相論之時、可申神躰之子細之由被仰之處、其
後于今不申是非、緩怠也、被補職事、雖被如何思食、造營事申之間難默止、此等
子細勸修寺大納言、予兩人可申意見云々、即召寄勸修寺大納言、仰之趣申云、
已前神躰事者、無左右難決事也、只今先造營事、可有御沙汰歟、以何用脚可致
其沙汰哉之由、各又可御尋、依其實否可及御沙汰歟、予同此儀了、即奏聞、此
儀尤有其謂、可尋云々、即仰勸修寺大納言了、可仰政顯之由仰了、
九月五日、晴、參内、鴨社祐香三位與祐躬縣主相論事、勸例奏聞、此上者祐躬可
被補當職歟之由有仰、可尋勸修寺大納言之由有仰、次退出、有他出事、依仰也、
略○中入夜參内、又仰之趣仰勸大條々有申旨、
七日、晴、參内、番也、祐香三位與祐躬縣主相論職事、爲社司造營用脚進上事無
例之由、祐香三位言上之處、祐躬被補當職者造營用脚万勸例康安已來度々

社司用脚
進上ノ例
ナクシ
シ難シ
補

社務職ハ
改替スベ
カラズ

祐躬ノ補
任ヲ仰セ
出サル

祐躬請文
ヲ進ム

社用進上之例注進之、先是此事申出之時、勅問勸修寺大納言并予等勸修寺
大納言、社司進用脚事無例之上者、難被仰付祐躬、若猶被仰付者、祐香如祐躬
申狀可進之由申上者、不改職、可被仰付歟、不然者、社司造營用脚進歟否事、可
被尋例之由、先度言上、予所存不申是非、可被任叡慮之由申入了、有子細依有
之故也、惜然者可尋例之由有仰之處、注進今日奏聞、又被尋仰勸修寺之處、職
事改動不可然之由申之、仰言、此間當職神事已下大儀之由言上之上者、非分
課役御沙汰進事、定就當職改替、難治言上歟、今望申者、定新補之間、可沙汰歟
之由在叡慮、只可爲叡慮之由言上、然者改職可補祐躬縣主云々、
今日御衰日之間、明日可宣下之由、仰政顯了、
十一日、晴、祐躬造營用脚不可無沙汰之由、進請文、依仰也、進上御所了、慥進上
之由、有女房奉書、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲九 十三

下加え乃さき此紙きせけ見申

右此表さい老當社の御事、さんぬる文明二年六月十四日、御えんまやう
いらひ、松のうき(さき)のうらひ、御をしろのうらひをきてく日んまやう申され、

文明九年九月七日

七二五

文明九年九月七日

七二六

花園天皇
社殿御造
營アリシ
モ遷宮ナ
シ

祐躬ヲ補
務職ニシ
シ遷宮ヲ
行ハシム

なきりことくふまし／＼て、あまつはへく日ひの御をしろき、一ううにか
りと此はへ御さあく、日つりふあらひりきえりふて御さ候、むかしよ
いまふり、親御なきうけまはりをよはさ海御ありさま、てんりの御
めまろ親魚からず候ところよ、かさしけあくを花うの、院の御時此御
よくく日んとまて、ひとへは神聖よ茂おほしめすふよるう、く日ふなる
御ようきやく茂に事られ、まやう御てん、并か日ひの御社ともふきてお
れ、といるとも、御せんくうの御さふをよはさるふよて、希る宮とあり
候て年月をおくり、をちあえれさせ給ひ候へき事、且はいせんの御よう
やくをいさばらふなされ、且はいせんの御ちよくく日んゑんいん候へき
事、上の御堂め社乃堂めまろるへうらす候、このよしむろまち殿へ申入候
ところよ、いまのまふん御ようきやくなきあいさ、いり、せら海へきあ
あいさ、まよせんまやむまよく茂をけえよおほをつけられ、ういふんまう
けんをめぐらし、万正あまりの入めざるへきあいさ、ことし、まやう祢んの
あいさよ御せんくうをあし申候て、神事さいてんをとりおこなひ、てん
の御ささう茂をつえらふはうまつり、いよく、むしろのこうまうをいさ

すへきものあり、仍状如件、

文明九年七月日

〔京都御所東山御文庫記録〕 十乙三三

(端裏書)
祐躬縣主

鴨社前禰宜祐躬謹言上、

右當社御遷宮要脚事、被仰付社務職者、以私領并社傳領之内万正餘、定致其
沙汰、造營奉行、仁渡之、可召進彼請取者也、就被尋下、謹言上如件、

文明九年八月日

(端裏書)
祐躬縣主

鴨社前禰宜祐躬謹言上、

副進 例文一紙

右當社御遷宮事、以社務領并私領等内、致其沙汰否事、就被尋下、檢先例、去正
安三年、御祖社御遷宮、同四年、同社正殿御遷宮、要脚祐治致沙汰例文、備于次
今度依一亂御回祿以後、本社兩社河合社等御造營之次第、無先例以雜木以

文明九年九月七日

七二七

祐躬申狀

社務ニ補
セラルレ
バ造營費
万正ヲ獻
ゼン

祐躬勅
ヲ檢注ス

遷宮ヲ社
務領私領
スヨリ沙汰
先例

本社造立
ノトキ先
例ヲ問ハ
ズ

假殿ト雖
モ柚用木
ヲ以テ造
ルヲ社例
トス
河合社社
殿ナシ

中社末社
以下ノ諸
殿ナシ
祐香勘例

文明九年九月七日

七二八

下被造立之、雖被寄公武御要脚、猶有不足分之間、以諸家奉加物、彼三社於被
造立之條、是又不及先例御沙汰者也、凡於先例者、雖為假殿、以御柚用木以下
被造進之條、社例也、爰御遷宮事、被付御要脚、被遂其節之段、勿論也、然仁三社
乍被造立、徒仁不及御遷宮沙汰、送年月可破損之條、且花崗院御願被延引、且
松崎郷仁御座本社御式、御回祿之時、節為俄事間、破損小社仁奉入之、剩於河
合社者、無御社形之間、于今送數年一向如無御座、訖往古以來未承及題目也、
神虛尤難計者哉、所詮祐躬所申請、任先例不日被補禰宜職、來年中仁致彼要
脚沙汰、遂遷宮之節、彌奉祈天下安全矣、仍粗謹言上如件、

文明九年八月日

(宋書)
祐香三位

鴨社禰宜三位祐香謹言上、

右當社御回祿以後、公武種々及御沙汰、既三字雖有造立之、中社末社幣殿祝
言屋以下之用殿、依無具足、于今三社徒仁御坐之條、無勿躰之旨、以前度々言
上事舊訖、而祐躬被仰付禰宜職者、以万疋餘之要脚、可令造進之由、言上之條、

言語道斷次第也、於社務傳領者、亂中有名無實之間、神用猶以雖及闕乏、祐香
以種々儀、日供神事于今無違、越令遂行之條、忠節何事過之、但既祐躬就言上
被尋下之間、神用以下雖及迷惑、涯分廻計略榮作等之儀、可致其沙汰者也、仍
就被尋下、謹言上如件、

文明九年八月日

(宋書)
祐香三位二答狀

鴨社禰宜三位祐香謹重言上、

右子細者、今度就祐躬掠訴、造替之儀、被仰下之間、涯分廻計略、可成其功之由、
祐香言上之處、社務餘慶在之旨、依祐躬言上、今祐香申上之間、新謀之由、亦
被仰下之條、迷惑仕者也、於社務傳領者、更以非過分、既亂中社務數代傳變者、
就日供神事闕怠、或御改替、或致上表者哉、殊彼祐躬者、天下無為之時、任禰宜
職、令知行數々所之神領、猶直務之神領、於成守護、請令同意守護人、名百姓於
及籠舍致害之間、神領土貢之外、乍取非分之禮物、日供神事等、令闕怠、禰宜職
令上表之上者、結句於亂世餘慶在之由、言上之條、只奉掠公儀者、歟、亦祐言者、

文明九年九月七日

七二九

社務餘慶
亂中社務
ノ更替ハ
日供神事
ニ因ル
祐躬ノ非
法

文明九年九月七日

七三〇

祐言補職
幾何ナラ
ズ神事ヲ
闕スシテ
神用不足
ト號シ幕
府ヨリ五
千疋ヲ得

祐香借錢
ヲ以テ神
事ヲ行フ

今改替セ
ラレバ
一家斷絶
セン

祐香當納
ヲ以テ營
作ヲ遂ゲ
ントス
祐言任貢
公物ヲ抑
留ス

文明六年七月爾被仰付禰宜職、乍致其所務、同七年正月一日神事闕怠、猶日供神事難叶歟、正月十日仁禰宜職辭退之條、前代未聞之次第也、殊神用不足之由、令言上於武家、五千疋申給御訪職上表之後、號未進申出公物訖、如此乍致猛惡、神事闕怠條、無餘慶之段、公私無其隱者哉、而十五日神事及闕怠之間、且存御祈禱之忠節、且存神忠、祐香任禰宜職、日供神事年中、以私力依致無爲之沙汰、于今窮困無極之上、去二月以來、致種々借錢、諸神事令始行之、今彼借錢等、以當所務、且可致返辨處、祐躬及非分之訴訟之條、言語道斷之次第也、然上者、至于所務之時、有改補之御成敗者、於當任者可有餘慶條、爲勿論者歟、至于祐香者、去々年云神用、當年春以來云引違、今被改替者、忽一家斷絶可仕之條、不便之次第也、祐躬就言上以前、祐香不及是非之覺悟、營作之儀、涯分廻計略、可致其沙汰之由、令言上事、併應叡慮者也、此上者、當年之儀爲滿作歟之間、神用錯錢等、雖不致返辨、以當納、先營作之儀、涯分可致其沙汰者也、凡於造營之儀者、就有小料所、相定奉行職、公私令致申沙汰之條、自往古如此、而彼奉行祐言小料所、云年貢云公物、抑留仕之間、種々加成敗之條、祐香更以無緩怠者也、所詮營作之儀、可致其沙汰之上者、被停止祐躬無理之競望之由、被成下

安堵之勅裁、彌神事致無爲之沙汰、可抽御祈禱之忠節矣、仍謹重而言上如件、

文明九年八月 日

祐躬注進

鴨社前禰宜祐躬謹言上

被尋下問事

- 一 祐治子孫事、當時今無之者也、
- 一 正安三、同四遷宮材木御調度等用途事、以私領致其沙汰畢、
- 一 祐治此時不社務職者也、

右注進言上如件、

文明九年九月日

祐香狀

鴨社禰宜三位祐香重謹言上

被尋下祐躬所進例文有無否事

右遷宮舊記等依一亂預置遠所之間、急度不令勘進之條、更非緩怠者也、雖然（注）渥令相尋之、重具可致言上、凡於万疋餘之造進者、如令以前言上、既祐躬申上

祐香モ造
營費ヲ出
サントス

文明九年九月七日

七三一

之間、於祐香可致其沙汰之上者、速被停止、横訴者、彌可抽御祈禱之忠節者也、仍重言上如件、

文明九年九月日

九日、節供御祝、

〔御湯との、上乃日記〕

一 九月九日、西癸酉、御いじ井いつものことし、○中略御さつくいつものことし、ふしとのある、

〔實隆公記〕

四 九月九日、癸酉、晴、入夜著束帶參内、御祝祇候人々、源大納言、按察、民部卿、四辻宰相中將、下官、元長、菅在數等也、

今夜爲言國朝臣番代祇候、及曉鐘候御前、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

九月九日、癸酉、天晴、重陽佳節、尤樂多、萬幸々々、對菊

酌酒、寔七百歳之初也、珍重々々、早旦先參賀宰相中將殿、御對面以前、於御前被下菊酒、誠不老仙藥也、祝著々々、小時令出座給、公武構見參之儀、如每朔、予拾遺政資兩人拜領御盃之後、相伴參賀小河殿、准后則御出座、公武各構見參儀同前、○中略、義政、夫人ト鹿苑寺ニ遊ブ退出之次、賀日野侍從亭、先之被賀來云々、次參内、以勾當内侍内々申入祝詞、於典侍殿局有盃酌、頃之歸家、人々

邦高親王御參内祇候ノ人々

廣橋兼顯等小河第ニ參賀ス

歌題ヲ頌

詠草ヲ獻

義政詠歌

公武多以賀來、以使者各謝之、

勅題ヲ邦高親王及ビ公卿廷臣等ニ賜ヒ、春日社法樂和歌ヲ詠進セシメラル、義政モ亦詠進ス、

〔御湯との、上乃日記〕

一 九月二日、春日の御不うらく此御さ井あそハ

す、ぬしミとのくろ御所々々、むろまちとの御さい、そのなりミあ〜へつ

ク、七、日、あすの御えいさうともゐる、御らんをらる、よ、御とりミさし、○以下闕

八日、御たんさくともゐる、

〔實隆公記〕

四

九月二日、丙寅、晴、今日春日社御法樂御題各被下之了、

八日、壬申、晴、今日禁裏春日社御法樂短册令詠進之者也、

〔慈照院准后御集〕

關初秋日、文明九年九月九日、春日社法樂

もる人も身にやしむらんまた薄き衣のせきの秋のはつかせ

水郷秋夕

所から哀もふかし水無瀬川すみこし里のあきの夕くれ

旅虫

山こゆる麓の野邊にふりはへて鳴やむまやの鈴虫のこゑ

暮秋懷

行秋の名残もかなし霜まよふおはなかもとの草のうらかれ

百日千首續歌ヲ始メラレ、皇子仁勝、邦高親王、其他近臣ヲシテ詠進セシメラル、

〔實隆公記〕

四

九月九日、癸酉、晴、菊花節、幸甚々々、自今日百日日次和歌千

首題也、可令詠進之由、自昨日被仰下、今日詠草則令進上了、御人數御製、宮御方、伏見殿

舊院上臈、勾當内侍、親長卿、教國卿、季經卿、下官、元長等也。

十八日、壬午、晴、未明退出、今日著到和歌詠草進上之了、

十二月十九日、壬子、宿雪降、晝間晴、早旦日次詠草進上之、千首和歌今日滿散、

珍重々々、

〔親長卿記〕

八

九月九日、晴、自今日百日千首續歌有之、予父子爲御人數、御

製、宮御方、伏見殿、舊院上臈、勾當内侍、予、四辻宰相中將、季繼、滋野井前宰相中

將、實隆朝臣、元長等也、

百日日次
千首和歌

人數

滿散

十人各百
首

三首通題

十九日、晴、依召參内、千首御歌少々集書之、

十月廿八日、晴、參内、依召也、百日御歌今日書之、

□□（廿九日カ）晴、及晚參内、亥子也、次千首御續歌予書之、

十一月八日、晴、參内、番也、○中略、御不豫ノコトニカ、終日候御前、百日御歌

書之、或有校合事、

廿八日、晴、參内、今日百日御歌書日也、隨出來書之、

十二月三日、雨下、今日去廿八日御歌之躰少々書之、

十九日、晴、千首御續歌十人各今日續終了、

廿日、雪下、參内、依仰也、昨日千首少々不出來之歌等、今日悉書調了、周備珍重

之由、殊予連々祇候神妙之由有仰、

〔紅塵灰集〕

菊契多秋文明九年九月

仙人乃さたしよむをえうへてゑる菊に千とせ乃秋やちきらん

聊不逢戀

いつまてり年をする木此松なま松なまてつをぬよ色をみるへよ

名所述懷

文明九年九月九日

文明九年九月九日

七三六

立よらま見ちほとふ身をくつとも思ひうむろ和歌のうら波

義尚、著到和歌ヲ始メ、高倉永繼等ヲシテ詠進セシム、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏 九月九日、癸酉、天晴、入夜、自宰相中將殿、大館治部少

輔以廻文、自今日可有著到之御日歌、可詠進由被仰下間、則加奉之字、但今日
事就南都之儀、急參御臺御方間、難祇候間、題ヲ申出、明日參可清書由申入者
也、題立春云々、件廻文如此、爲知人數寫之續加者也、

題立春
廻文

(廣橋兼顯)
右大辨

(目野政安)
藤侍從

上野刑部少輔

(貞勢)
藤宰相

星野宮内少輔

伊勢七郎

(貞勢)
伊勢次郎

安東右馬助

伊勢七郎次郎

小串次郎

併和與次郎

安東平五郎

布施新三郎

夏阿彌

松阿彌

木阿彌

仙阿彌

大館治部少輔

追加

杉原伊賀守

(長尾)
同安藝守

大館重信
觸書

今日より御著到御歌御座候、をのく御人數より可有御參之由、被仰出候、
此分ふれ可申由候、恐々謹言、

九月九日

大館治部少輔
重信判

廣橋兼顯
著到和歌
清書

十二日、丙子、晴、未剋許參宰相中將殿、著到和歌爲清書也、去十日北山之大飲
以來、餘醉之間、至昨日不參、仍自重陽日迄今日四首書之頃、祇候御前、
十三日、丁丑、自晚頭雨降、入夜雷鳴、夜前祇候番、聊虫所勞之間、宰相中將殿御
著到不參、内々申入事之由者也、

十四日、戊寅、晴、秉燭程參宰相中將殿、御著到和歌書之、題殘雪也、有様注裏、頃
之祇候、歌道事等條々御雜談、武邊人々詠歌相違事等少々申入直與者也、
十六日、庚辰、晴、及晚參宰相中將殿、御日歌書寫之故也、昨日終日祇候室町殿、
仍不參之者也、頃之歸家、

題殘雪
武人ノ詠
歌ノ誤ヲ
正ス

十八日、壬午、晴、及晚參宰相中將殿、御著到和歌書之、頃之祇候、及深更歸家、
十九日、癸未、晴、宰相中將殿御日歌今日又不參、

廿日、甲申、晴、入夜時々雨洒、及晚參宰相中將殿、著到和歌書之、昨日今日兩
日分清書、頃之祇候、明日御詠以下御談合、存分少々令言上之、及深更歸家、
廿一日、乙酉、雨降、宰相中將殿著到和歌、依作善之儀不參、題歸鴈也、
廿七日、辛卯、晴、退出之次、參宰相中將殿、日歌書之、

題歸鴈

文明九年九月九日

七三七

廿八日、壬辰晴、略○中頃之直參宰相中將殿書著到和歌、數刻有御雜談等、終日祇候、入夜歸家、于時半更歟、

廿九日、癸巳晴、略○中退出之次、參宰相中將殿書著到之和歌、小時歸家、

十月二日、丙申晴陰、秉燭以前參宰相中將殿書日歌、略○中戌刻許歸參禁裏、

九日、癸卯晴、午天參宰相中將殿書御著到和歌、頃之祇候、秉燭程歸家、

十二日、丙午、自夜雨降、自日出程屬晴、午天歸宅之次、參宰相中將殿書著到和歌、頃之祇候之後歸家、

十六日、庚戌晴、霽時々下、晚頭參宰相中將殿書著到和歌、頃之祇候、入夜歸家、

御繪三卷申出令隨身歸宅、

廿二日、丙辰晴、略○中直參宰相中將殿清書日歌之後、小時歸家、

廿四日、戊午晴、午天參小河殿宰相中將殿自去廿二日令渡御之間、和歌之著

到書之、昨日依餘醉不參、仍兩日分書之、

廿五日、己未、雨降、略○中先之參宰相中將殿御座方、清書著到和歌、

廿六日、庚申晴、及晚參小河殿、於宰相中將殿御方、清書日歌、次於春日局有夕

飯頃之歸家、于時子剋許也、庚申之間、終夜不寢、鷄鳴以後休息、

廿七日、辛酉晴、秉燭程參小河殿於宰相中將殿御座方、清書著到、

廿八日、壬戌、天晴、參宰相中將殿御方、清書日歌、頃之祇候之後退出、于時半更

歟、歸家休息、

卅日、甲子、晴、雪花聊飛來、午天參宰相中將殿著到和歌書之、

十一月二日、丙寅晴、秉燭以後參宰相中將殿書和歌著到頃之祇候、四時分歸

參禁裏宿侍、

八日、壬申晴、及晚參小河殿、參宰相中將殿御座方、著到和歌書之、次參御臺御

方、小時歸家、

九日、癸酉、雨降、秉燭程參小河殿、參宰相中將殿御座方、著到和歌書之、於春日

局有御盃、

十日、甲戌晴、秉燭程參小河殿、參宰相中將殿御座方、著到和歌清書、頃之祇候

之後歸家、

十二月七日、庚子、自夜雪降、略○中自宰相中將殿同有召、仍自禁裏直參宰相中

將殿、略○中著到和歌書之、秉燭之後歸家、典侍殿御入、今夜御逗留、

十日、甲戌幕府、禁制ヲ東寺ニ掲グ、

文明九年九月十日

七四〇

〔東寺百合文書〕

○ほ一之三十二
○山城

禁制

東寺

一軍勢甲乙人并足輕亂入狼藉事、

一材^(伐方)取境內竹木事、

一苜取寺邊作毛事、

右條々、堅被制禁之訖、若雖爲一事、有違犯之輩者、可被處罪科之由、所被仰下也、仍下知如件、

文明九年九月十日

和泉前司清原真人^(清原)〔花押〕

右兵衛尉藤原朝臣〔花押〕

義政夫人日野氏、北山鹿苑寺ニ遊ブ、義政モ亦遊ブ、

〔兼顯卿記〕

庫所藏

九月九日、癸酉、天晴、重陽佳節、尤樂多、萬幸々々、對菊

酌酒、寔七百歲之初也、珍重々々、^{○中略、公武、幕府ニ參賀スルコトニカ、ル、九日ノ條ニ收ム、}同參賀御臺

御方處、以春日局被仰云、明日爲御遊覽、可有御出北山鹿苑寺、明旦必々可參

會、由被仰下間、畏奉存旨申入御返事者也、雖爲青侍雜色以下、每物不具、被仰

義政内々
同行ス

日野苗子
同政資等
ニ從フ

苗子石不
動ニ參詣
ス

五首和歌

下之旨、面目之至也、仍雜色以下、色々仰含者也、准后同可有渡御云々、^(密下同)蜜々之

儀也、可有乘御女房車分也、^{○中入夜又參御臺御方、^{○中略、東北院内書ヲ請}}

二收ム、條明日可參北山由被仰下、祝著之由、令言上、小時歸宅、於殿中參會、布

施^(英基)彈正大夫、明日御出御車以下事、條々有談合之旨、^{○中相語之、}

十日、甲戌、天晴、早且詣鹿苑寺、依室町殿以下、渡御參會者也、小時北小路三位

尼、侍從政資等參會、今日一獻拾遺申沙汰也、頃之渡御、爲蜜々儀、同車女房之

車、予侍從於中門邊、蹲居、出車三兩也、一車室町殿御臺女房少々、二車比丘尼

御所々々以下、三車女房也、於金堂下有御酒、先令參詣石不動給、藤宰相予拾

遺^{○以下}闕ク、

十三日、^丁和歌御會、

〔實隆公記〕^四 九月十三日、^{丁丑}陰、自今日當番也、午剋著束帶參内、自晚雨

降風吹時々、雷鳴、五首和歌各詠進之了、

〔親長卿記〕^八 九月九日、晴、^(當番)同前、各有五首和歌御會、九月十三夜分也、

十五日、^{己卯}義政、松茸ヲ獻ズ、仁和寺、大聖寺等ニ頒^(當番)予賜フ、

〔御湯との、上乃日記〕^一 九月十五日、むろまぢ殿よりいつも此大をり

文明九年九月十三日 十五日

七四一

内侍所ニ
獻ゼラル

大聖寺宮
柿梨ヲ獻

杯臺ヲ中
原賢親ニ
賜フ

細川政國
等從フ
義政赴カ

文明九年九月十九日 二十日

七四二

の松ゐる、ないし所へ御ふさよゐる、その外御むろへをり、大しやう寺殿へ御ふさよ入るゐらさるゝ、女えうさちの御くをりさるゝ、大しやう寺とのより御ふさよた、ありのゐる、

〔御湯との、上乃日記〕

一 九月四日、けさ中へくさるとて、御いとゐこ

い申、御さくつまのさいいあり宮けよとてさふ、

十九日、癸未義政夫人日野氏、岩倉ノ山莊ニ遊ブ、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

九月十九日、癸未、晴、早朝御臺御方渡御岩藏御山莊、

聯輝軒、日野拾遺等參會、伊勢守（貞宗、貞隆）父子、細河右馬頭兩人御供云々、女中少々不

多御數云々、兼日准后可有渡御由有御沙汰、雖然無其儀、仍予不參、秉燭程還

御、

二十日、甲申法勝寺ニ、寺領加賀長崎保ヲ還付ス、

〔親長卿記〕

三十三

當寺領加賀國長前保、（當）尙知行云々、全寺家之領知、可專御祈禱者、依天氣執達

如件、

文明九年九月廿日

（甘藷寺法長）
左少辨判

法勝寺禪衆等中

〔親長卿記〕

八

九月廿日、晴、法勝寺□衆等申、加賀國長崎保勅裁遣之、元長

書之、

二十二日、丙戌畠山義就、兵ヲ收メテ河内ニ下ル、幕府、兵ヲ出シテ其黨ヲ逐フ、

和泉半國守護細川持久ノ部將和田助幸、和泉堺南莊ニ陣シテ、義就ニ備フ、

〔親長卿記〕

八

九月廿二日、晴、參内番也、今日敵陣右衛門佐義就罷下河内

國了、仍西岡已下伏見深草等自此方遣一勢云々、承伏之由有風聞、

〔實際公記〕

四

九月廿二日、丙戌、陰、今日畠山右衛門佐義就下國云々、敵陣

騷動、衆人見物云々、

〔長興宿禰記〕

上

九月廿二日、是日在敵陣畠山右衛門佐義就沒落、下向河

内國云々、

廿四日、今日聞、西岡住人諸自御方進發入務、勝龍寺追落云々、依右衛門佐下

國也、是日參賀室町殿、義就沒落珍重由、人々申上之、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

九月廿一日、乙酉、雨降、敵陣畠山右衛門佐昨日夜下

國之由有共聞、爲事實者頗大慶歎、大内相續可屬御方由、自兼有御沙汰、然者

文明九年九月二十二日

七四三

東軍兵ヲ
出シテ西
岡伏見深
草等ノ西
兵ヲ討ツ

東軍勝龍
寺城ノ敵
ヲ破ル

大内政弘
東軍ニ屬
セントス

公卿諸大名參賀

洛中先靜謐之儀勿論歟、珍重々々、廿六日、庚寅晴、早朝參宰相中將殿、敵陣畠山右衛門佐義就下國之間、有御禮、仍參賀、公武各進上御太刀、但勸修寺大納言、予兩人之外無人、日野侍從依虫所勞不參、可得其意、由有使者、次參賀小河殿、則御出座、諸大名進上御馬御太刀、糸、自餘金劍也、於宰相中將殿、諸大名糸卷計也、

〔御湯との、上乃日記〕 一 九月廿日、□□□ゑもんのすけうちへ□□

□よしきこゆる、

東寺前ヲ通過ス

〔歷代殘闕日記〕 八十四 見開雜記 九月廿二日、畠山右衛門佐殿、河内へ下國、東寺前也

〔大乘院日記目錄〕 三 九月廿一日、畠山右衛門佐義就入部河内國了、

〔大乘院寺社雜事記〕 四十六 八月六日、雨下、

一自木津仁木殿陣音信、畠山右衛門佐當國用、可出陣之由必定々々云々、當國面々可迷惑條勿論也、近來事外任雅意故歟、

十四日、

十市遠清等義就ニ屬ス

一略○中畠山右衛門佐和州河州之間可進發之由、近日必定云々、筒井成身院迷惑事也、和州衆徒國民等十六七人、同心畠山右衛門佐方可與力云々、十

義就ハ當時ノ名將

市其隨一云々、抑右衛門佐ハ當時名大將也、可敵帶者更以不覺事也、又左衛門佐進退可爲如何哉、

廿七日、

一略○明日右衛門佐息 修羅 母儀、河内國之野崎ニ可下向云々、實說歟如何、

九月三日、

一定寬參申、世上様巨細相語者也、右衛門佐於陣者、京都事大事之間、自今出川殿被仰持是院被留候、大内又可參公方支度在之、旁以出陣難成歟、但於于今者無出陣者、可爲難義之間、定而有出陣歟云々、於河内國者、更以不驚事也云々、凡此申狀如何、大和衆以下又合力輩有之、不審之者也、

九日、

一世上事色々及其沙汰、或仁申、自右衛門佐方、越智、古市ニ被尋之、當國歟、河州歟、兩國之内、先以可入何國哉、兩人之可任意旨申給之云々、實說歟如何、今度岸田、越智ニ下向云々、此間在京也、若此事歟如何、

十日、

一世上事、與胤ニ相尋、下向實說之旨申之、筒井方者也、敵方者也、定而可付才

修羅ノ母河内野崎ノ下ノ説

義就ハ當時ノ名將

義就ハ當時ノ名將

義就ハ當時ノ名將

文明九年九月二十二日

七四六

學之間實否ハ可存知者也、

十二日、

一夜前右衛門佐女中^{并次郎}等越智ニ下向奈良融之古市送之云々、

十六日、

一建仁寺悅主^{首方}首來、○中京都西方様巨細相語、左衛門佐下向事爲必定者、土

岐ハ可下向條勿論云々、廿一日歟、廿七日歟云々、

廿二日、^地振、^至土

一世上物念以外也、筒井、箸尾當國之組衆之内、十市以下心替子細共在之云

廿三日、雨下、

一畠山右衛門佐義就、廿一日京都進發、三百五十騎并甲二千餘、東方陣見物

之、東方御勢一人而不向出云々、希有事也、差河内國拔^使云々、大和、河内兩國

勢共狩催之云々、河内國若江城ハ左衛門佐政長之方遊佐河内守持之敵

城也、紀州勢共數百同心云々、

大和國越智^郡疆正父子、古市兄弟、高山、各右衛門佐方帳本也、

義就妻子
越智ニ下

義就下國
セバ土岐
成頼等モ

地震

東軍義就
ノ退京ヲ
見物ス
大和河内
ノ兵ヲ募
ル
遊佐河内
守若
江守河内
守若

越智家榮
古市胤榮
等ハ義就
方ハ義就
筒井順永
箸尾爲國
寶來祐尊
等ハ政長
方
義就牧ニ
著ス

山名政豐
西岡ヲ奪
ハントス
赤松政則
下京ヲ燒
カントス
幕府之ヲ
止ム

妙椿尾張
近江美濃
洛セシム

義就ノ陣
立

同國筒井、箸尾、寶來、各左衛門佐方帳本也、自他與力大小不知其數者也、就
中兩方荷衆、十市、龍田、秋篠、片岡以下、大小又不知其數者也、當國ハ本朝無
双神國也、五ヶ關事以來、各爲武家披官人者也、末世神慮難得其意、

廿六日、

一袖留木法眼一昨日注進□□□來、去廿二日右衛門佐牧著陣、其後未聞

候、南方邊之儀如何可成行候哉、上意者嚴密之御下知儀候云々、西岡牢人

罷出放火、又山名悉以出陣、西岡可押領分候哉云々、山崎之赤松勢共下京

可放火之由申之、爲上意不可然之由御支云々、仍下京ハ未敵陣云々、江州

牢人可出帳之由申入云々、天下無爲之御禮可有之、可得御意云々、大内參

申可下國、土岐勢罷上之間、土岐可下國云々、此注進共大方可然事也、但早

々無爲御禮までハ如何無心元者也、

一自持是院法印方十八日書狀今日到來、路次難義故也、月別進之□□三乃

近江三ヶ國勢、就右衛門佐入國之儀、上置之由申云々、事實也、

〔尋尊大僧正記〕

八 十月二日、雨下、

一 去月廿一日、畠山右衛門佐義就河内國入部、先陣遊佐中務、^馬上、^五騎、次齋藤

文明九年九月二十二日

七四七

文明九年九月二十二日

七四八

新左衛門三騎 十次甲斐庄馬上 十次大將馬上 十餘人橋 百八十餘帖 十次大田平馬 九騎上 次淀小橋七騎 次御御厨屋 クリヤ後陣 譽田馬 十二騎

合馬上二百餘騎、具足數二千餘人歟云々略○中

一就右衛門佐下向京都留守以下、用土岐并今出川殿御下知、持是院勢上之、
三乃尾帳（應）、近江三ヶ國勢三百騎上置之云々、

一大和國衆筒井、箸尾ハ、一向左衛門督方奉公合力者也、越智、古市、高山ハ、一向右衛門佐方奉公給分衆也、其餘十市以下ハ、□衆也、所詮此亂ハ、當國者之安否也、各蒙寺社兩門罰故歟如何、不便事也、

十九日、雨下、

一東大寺別當書狀到來、○中略

政長無勢

同書狀、京都事、畠山右衛門督以外無勢、可出陣様無之、

〔歷代殘闕日記〕

七十八 重胤記 九月廿日、

一日野殿より本庄左衛門大夫、勢多九郎（兩）勅使也、畠山右衛門佐下國之由候、左様之儀ニ日野法界寺事、とあさよりも亂入候共、七郷へ堅可被仰之由候、心得申候由候也、

日野政賢
法界寺ヲ
衛ラシム

和田助幸
界在陣

〔東寺長者補任〕

五 文明九年九月廿二日、畠山右衛門佐殿河内國在陣、

〔皇年代私記〕

文明九九廿二、畠山右衛門佐義就、没落河内國、○興福寺略年

節、異本年代記、和漢合符等同シ、

〔和田文書〕

三

（包紙）（助幸）
和田次郎左衛門尉殿 持久

就畠山右衛門佐義就下國、早速境（境）南庄令著陣、于今在陣之由注進到來、尤神妙、彌被致粉骨者可喜入候、恐々謹言、

拾月九日

（辨）
持久（花押）

和田次郎左衛門尉殿

○義就、政長ノ部將遊佐長直ト河内若江ニ戰ヒ、轉ジテ堺ヲ取ラント
レ、天王寺城ヲ攻ムルコト、二十七日ノ條ニ見ユ、

義政、夫人日野氏ヲシテ、十度飲ヲ興行セシム、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏 九月廿一日、乙酉、雨降、○中直參御臺御方、頃之歸宅、

略○中 御臺御方十度飲御酒、明日爲准后御沙汰可有御張行、必々可早參由、於御前被仰下間、畏奉存由申入者也、

義政沙汰

文明九年九月二十二日

七四九

文明九年九月二十二日

七五〇

廿二日丙戌晴午天參祇御臺御方今日十度飲御酒准后御沙汰也仍自昨日
依仰參候者也聯輝軒予伊勢守等祇候如先日結城杉原以下作事奉行輩於
簀(子殿方)發微聲予事外沈醉之間十度飲以後早出重而有召雖然不參休息之外無
他

廿三日丁亥晴終日餘醉之外無他自惠聖院有書狀十度飲御酒申沙汰事來
廿七日可然由被仰申合伊勢守可申沙汰由也令存知由返答今度頭役伊勢
守予兩人之故也

○コノ後十度飲ヲ行フコト便宜左ニ合致ス、

〔兼顯卿記〕

庫○岩崎文

十月四日戊戌晴於御臺御方十度飲御酒申沙汰之

仍四時分祇候小時准后有渡御予伊勢守兩人申沙汰也予土器物五柳三荷
進上伊勢守土器五臺物二也小指押物五柳三荷進上之於常御所有之如前之
御人數聯輝軒光慶院兩人依所勞不參間御佐子春日局兩人被召加者也申
剋許十度飲事畢尙有御酒兩人共以拜領御盃御酌等杉原伊賀守於簀子申
早歌予依候御酌時宜尤快然也祝著々々戊刻許歸家沈醉休息
十三日丁未晴早旦自御臺御方有使者福阿今日可有十度飲之御酒七時分

杉原盛賢
早歌ヲ申
ス

可祇候之由也畏奉存由申入者也○中直參御臺御方則十度飲御酒被始之
及晚更歸家沈醉之外無他聯輝軒惠聖院兩人頭役也伊勢守依所勞不參自
餘皆參

廿二日丙辰晴自權大納言局有書狀今日八時分可有十度飲御酒可祇候由
被仰下云々畏奉存由返事○中頃之未刻參御臺御方小時准后渡御聯輝軒
予伊勢守以下御人數如先々權局依所勞不參之間周全藏主被召加之入夜
事終尙有御酒及半更退出

十一月廿二日丙戌晴今日十度飲御酒巡役上臈局權大納言局兩人申沙汰
也兼日被相觸問番宿侍事町黃門可參約束之間相博者也午天參御臺御方
先條々披露於常御所御臺御方直被聞食者也每度之儀也人々雜訴以下事
也未剋許一獻始行今度新造之御座敷爲其席入夜事終其後尙有御酒及曉
天歸家沈醉之外無他伴巡役至今日十人悉申沙汰也每事無爲珍重々々伺
事目六委注公務

巡役申沙
汰

二十三日丁亥賀茂社人森貞久ノ奉請ニ依リ再ビ其所領ヲ安堵セシム、

〔親長卿記〕

八

九月廿三日晴貞久申去年被召返安堵勅裁可被返下云々

文明九年九月二十三日

七五一

勅許、

二十四日、子成青蓮院准后尊應、御加持ノ爲ニ參内ス、

〔御湯との、上乃日記〕一 九月廿四日、(宮中御座)玄やうまん院御うちみ御百いり、

宮の御うさ、二宮の御うさのも御申むけり、御座いらせられ、御日つし、御座いらせらるゝ、

西將一色義直、三河守護代東條國氏ヲ攻ム、國氏、大和ニ遁ル、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 九月廿四日、

一三川國守護代東條沒落、今日付轉害、男女三百人計荷物數十荷云々、(讃州)

披官人也、一色打□□(持走)院合力故也、於于今者讃州失面目條勿論也、申出

御判打取云々、西方之一色也、自東御判以外事云々、東方一色申沙汰歟云

々、

〔尋尊大僧正記〕八 十月十九日、雨下、

一東大寺別當書狀到來、中略

同書狀京都事、中御陣ハ一色と讃州之物云、今日明日様ニ申候、御陣上

下迷惑無極云々、

國氏大和
轉害ニ著

一色義直
細川成之
ト争フ

十二月十三日、

一丸四郎左衛門秀永、自京都罷下、御陣様堀以下如元也、剩一色之陣新造堀、

近日致其沙汰、讃州ト物念故云々、

〔宗長手記〕上 應仁年中、三河國守護代東條近江守國氏等鉾楯、上略

○義直、國氏ヲ攻メテ之ヲ破ルコト、八年九月十二日ノ條ニ見ユ、

阿蘇惟忠、太刀ヲ肥後男成社ニ寄進シ、戰勝ヲ祈ラシム、

〔阿蘇文書〕二十

今度爲出陣祈禱、九州肥後國野部男成御宮ニ、太刀一腰、小劔謹令拜進候、仍

彼太刀之事、未代可爲御財物者也、仍寄進狀如件、

文明九年 丁酉 九月廿四日 阿蘇大宮司宇治惟忠(花押)

今度爲出陣祈禱、御ひさうの御はらし、男成之御宮ニ御拜進、日出候、上意
過分おとこなりに可申候、恐惶謹言、

九月廿三日

惟□(花押)

進上 白石殿

文明九年九月二十四日

文明九年九月二十六日

七五四

二十六日、庚寅幕府、西軍退散ニ由リ、東寺等ニ所領ヲ還付ス、

〔東寺百合文書〕樂一之八
山城

東寺領山城國久世上下庄、上野、拜師、植松庄、東西九條院町柳原當寺境內并巷所、八條以南、九條以北、所々屋地、別紙、在散在田畠等事、敵退散之上者、爲守護使不入之地、任先例檢斷以下、致其沙汰、可被全寺務之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明九年九月廿六日

(讀與秀)
和泉守(花押)
(松田敦秀)
主計允(花押)

當寺雜掌

〔東寺百合文書〕を一之五
山城

東寺領山城國久世上下庄、上野、拜師、植松、東西九條、號女御時院町柳原散在名、田畠并境內所々檢斷等事、一圓被渡付之上者、彼代官可入部云々、早任被仰下之旨、年貢以下如先々可致其沙汰、由候也、仍執達如件、

文明九年十二月十九日

當所名主沙汰人等中

(附書)田公
豐藏(花押)

守護代田公豐職

遵行狀

當寺領所々一圓被成遵行畢、早可被全寺務候者也、仍狀如件、

文明九年

十二月十九日

(附書)垣屋四郎次郎
宗續(花押)

東寺御雜掌

〔法金剛院文書〕二
山城

亭子院領山城國九條院田內有弘名壹町事、敵退散之上者、任當知行之旨、可被全寺家領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明九年十月二日

(飯尾元連)
大和守(花押)
(飯尾爲信)
加賀守(花押)

亭子院領

當院雜掌

〔圓滿院文書〕江〇近

花頂門跡領山城國山科野村鄉內六段田事、就敵退散、代官可入部云々、早年貢諸公事以下、如先々可致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明九年

十一月四日

爲信(花押)
元連(花押)

圓滿院領

文明九年九月二十六日

七五五

文明九年九月二十六日

當所名主沙汰入中

七五六

石清水八幡宮領

〔伺事記録〕

爲自然寫置之

一八幡宮壇法印雜掌申、山城國田邊郷□新免分轉讀田事、敵退散之上者、早任當知行之旨、年貢諸公事以下、如先々可致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明九

十一月十五日

爲信

元連

當所名主沙汰入中

同、

雜掌支狀壹通可渡進之由候也、恐々、

月 日

殿

○幕府、亭子院、圓滿院、石清水八幡宮等ノ所領ヲ還付スルコト、茲ニ類收ス、又禁裏番衆等、山城ニアル所領安堵ヲ幕府ニ請フコト、本月三十日ノ條ニ、幕府、廷臣ノ所領山城ニアルモノヲ安堵セシムルコト、十月

八日ノ條ニ見ユ、

二十七日、卯、辛幕府、少納言高辻長直ノ北野社領加賀富墓莊ノ地ヲ妨碍スルヲ禁ズ、

〔古文書〕

○二十三内閣記録課所藏

北野宮寺領加賀國富墓事、高辻少納言長直朝臣雖申子細、於當庄爲根本社領、本役百斛社納之條分明也、然者應永卅年治長知行分、彼庄一圓被寄附宮寺訖、爰永享四年高辻庶流斷絶之時、有其沙汰訪意見、雖被返付之、如彼意見狀者對社家不及糺決者歟、殊件御判號紛失、捧案文之旨胸臆至也、縱雖帶數多之證文、既應永卅年寄附之段、炳焉之上者、爭以神領可返人給哉、云彼云是、長直朝臣所申不能許容、所詮社家彌全領知、可專神用、至奉行職者、松梅院禪椿相續不可有相違之狀如件、

文明九年九月廿七日

准三宮源朝臣御判

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

六月廿五日、辛酉、晴、長直朝臣入來、○中加州知行等事條々有談合之儀、入夜歸、

文明九年九月二十七日

七五七

本役百斛

奉行職松梅院禪椿

七月四日、己巳、晴、長直朝臣入來、賀州知行分事、條々有談合之旨、
十六日、辛巳、晴、○中略長直朝臣入來、賀州知行分事、條々談合支證物等持來、盡
寫事所望之間、仰青侍寫與者也、

十八日、癸未、晴、陰、入夜月明々、午天參御臺御方處、御座准后御方、程也、終日女
房數輩祇候之間、雜談、秉燭程御臺御方、自准后御方還御之間、參御前、供御御
中酒之御盃被下之、數刻有御雜談、少納言長直朝臣賀州知行分松梅院相論
之事等、御尋之間、存分令言上、

九月廿五日、己丑、陰、御臺御方被仰下云、管少納言長直朝臣知行分加賀國富
墓庄事、永享四年普光院御判正文、紛失候間、紛失狀之事被仰出處、舊院之勅
裁一通之外、無他所見、於勅裁者難被用間、永享之度御成敗無正躰上者、社家
理運不能左右間、可被付松梅院、爲公家被仰出事之間、一端此由可參申由、被
仰下者也、但禁裏御衰日之間、明日可申入者也、

廿七日、辛卯、晴、晚頭參内、夜前被申長直朝臣知行之事、御臺御返事之趣、奏聞
之處、此上者不可被申是非、沙汰之外也、相待時、剋、可堪忍由、可仰長直朝臣由
勅答也、尤不便々々、勸大同祇候、兩人令奏聞者也、○中略、畠山義就追討ノ勅
ヲ大和紀伊ノ諸寺ニ下サ

義政夫人
日野氏口

勅裁ハ其
功ナシ

ル、コトニカ、ル、本、月三十日ノ條ニ收ム、但少納言長直朝臣知行富墓紛失狀勅裁、被成反古上
之間、勅答定而可爲不許歟、珍事也、○下略

○高辻治長、富墓莊ヲ北野宮寺ニ寄進スルコト、應永三十年八月十二
日ノ條ニ、幕府、富墓莊本役ヲ北野宮寺ニ還付スルコト、明應六年三月
十日ノ條ニ見ユ、

畠山義就、同政長ノ部將遊佐長直ト若江ニ戰ヒ、轉ジテ堺ヲ取ラントシ、
天王寺城ヲ攻ム、和田助直奮戰シテ之ヲ却ク、細川政國、同持久、書ヲ助直
ニ與ヘテ、其功ヲ褒ス、

〔和田文書〕 三

〔包紙〕 文明九年、天王寺、南口、ハ、方、カ、イ、ノ、庄、東、南、口、ハ、佐、殿、發、門、佐、北、殿、ハ、當、國、守、護、

和田左近將監殿 持久

去月廿七日、於天王寺合戰之時、致忠節、殊親類被疵之由、注進到來、尤神妙候、
彌被致粉骨候者、可悅入候、恐々謹言、

十月三日

持久〔花押〕

和田左近將監殿

文明九年九月二十七日

七五九

義就天王
寺町氏
ノ城ヲ攻
ム
北口ハ譽
田口ハ甲
斐莊

〔包紙〕
か天
い王
の寺
北の
方ハ
城ハ
こ城
んへ
た右
文衛
明門
九佐
年殿
細發
川向
殿東
之ハ
御右
衛門
馬佐
頭殿
自身
衛南
ハ

和田左近將監殿 政國

去月廿七日、御敵等天王寺令發向、既及難儀處、馳合被致粉骨、殊身類被疵之、〔意〕
由候、尤以神妙候、彌尙可被抽戰功候、自阿州〔我久〕可被申候、恐々謹言、

十月四日

政國〔花押〕

和田左近將監殿

〔大乘院寺社雜事記〕

四十六 九月廿七日、

一於河內國合戰有之、至烏山之西并山田邊燒之、歟煙共見畢、如何様若江邊
歟云々、若江ハ東方游佐之陣也、假令三條之トヨリハ西方衛門佐陣野崎
也、生馬鬼取之トヨリハ若江東方遊佐之陣也、信貴龜瀨之トヨリハ古市
郡之譽田興照寺陣也、橫大路之トヨリハ山田庄太子也、此等之間ハ假令
或二里三里ニ不可過之、今日燒□□□□トヨリ并橫大路之トヨリ歟、然
者若江エ右衛門佐手押寄、山田邊エ越智勢寄歟如何、筒井出陣之間、爲留
守安樂坊下向之由口遊、又古市出陣□□歟之由口遊、每事不信用、

東西兩軍ノ陣所
義就河内野崎ニ陣
ス長直若江ニ陣ス

文二四中

廿八日、

一今日右衛門佐勢、自河内攝州河邊郡ニ發向、和泉堺ヲ可取支度仍遊佐手
若江ヨリ打出合戰云々、

廿九日、

一昨日より河内合戰、天王寺□□泉堺以下悉以右衛門佐打取、在々所々合
□□□□□□□□入于往生院□□

義就ノ兵攝津河邊郡ニ發向
ス長直若江ヲ出デ戰
フ義就天王寺堺ノ諸城ヲ陷ル

〔尋尊大僧正記〕

ハ 十月二日、雨下、

一略○中畠山左衛門督政長者在京都公方御陣、手物遊佐河内守長直在若江
城仍連々合戰、譽田城、往生院城、客坊城、合四ヶ所之内、客坊城ハ去月廿七
日責落之畢、大和國越智古市、筒井以下一國面々兩方ニ相語之間、悉以去
月末進發河内國畢、十市以下兩方ニ勢相分輩濟々又有之、所詮悉以出陣
也、

長直客坊城ヲ陷ル
大和勢河内ニ出陣ス

三日、

一右衛門佐朔日矢生ニ入部、大和衆以下不知之、若江ト譽田ト之間也、敵方
中也云々、一國大略打取之、

義就矢生ニ入ル

文明九年九月二十七日

七六一

野崎ニ戰
義就敗退

文明九年九月二十七日

七六二

〔長興宿禰記〕

上

九月廿八日、後聞、今日於河内國野崎、畠山右衛門佐與同左衛門督政長朝臣方合戰、左金吾手打勝、右衛門佐方引退、發向攝津國欠郡、於木村合戰、責天王寺陣云々、

○義就兵ヲ收メテ河内ニ下ルコト、二十二日ノ條ニ、河内譽田城ヲ攻メ、守將和田美作守以下三十餘人ヲ斬リ、其首級ヲ畠山政長ニ送ルコト、十月七日ノ條ニ見ユ、

石見三隅長信父子、益田貞兼ト、大濱ニ於テ和解シ、尋テ、盟書ヲ遺ル、

〔益田家什書〕

七五十

今度於大濱益田殿、三隅御和與之事申含候、千秋万歳目出候、然間大小御用ニ立、被立可被申候、殊庄内之事、爲上意御知行之上者、自然守護又自何方、雖被及弓箭候、自身馳參御用立可被申候、万一長信(三隅)、貞信(同上)雖違偏之儀候、堅可加意見候、若此條虛言候者、

日本國大小神祇、伊勢天照大神宮熊野三所、當國一宮、二宮、三宮、殊八幡大菩薩、可蒙御罰者也、

三浦若狹守(朱書)裏ニ在判

三隅益田
兩家ノ老
臣申定

文明九年丁酉九月廿七日

長盛判

三浦民部丞

盛定判

三浦三郎右衛門尉

盛種判

三浦河内守

忠種判

多根下總守殿
糸賀河内守殿
小原豊前守殿

小坂肥前守

信堅判

三隅刑部大輔

信元判

永安周防守

兼光判

三隅彌四郎

信光判

文明九年九月二十七日

七六三

文明九年九月二十七日

七六四

三隅右馬助

信重判

長信父子
ノ誓書

今度其方御宿老、此方之老者共、以參會諸篇申定候、千秋萬歲候、然間立御用、被立可申、此儀於已後、更不可有相違事、

一 庄内事、任御判之旨、御知行之上者、自然守護方并本主、又者何方よりも雖被及御弓箭候、自身馳參立御用可申事、

一 万一就其方、此方儀邪說以下出來候者、預御尋又尋可申候事、

一 於家中自然六借敷子細出來候者、取分無御等閑申合可致了簡事、若此條僞申候者、

日本國大小神祇、別而伊勢天照太神宮、熊野三所大權現、王城鎮守八幡大井、賀茂春日、稻荷、祇園、北野、日吉、并住吉、當國一宮、二宮御神、本大明神、殊當社八幡大菩薩、春日大歲大明神、惣而可罷蒙諸神祇等御爵候、仍起請文如件、

文明九年十二月廿二日

長信判

貞信判 (朱筆裏在判)

○貞兼、石見長野莊及比上黒谷、美濃地ヲ所領シ、幕府、三隅貞信等ヲシテ、之ヲ援ケシムルコト、六年十二月十一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、辰、壬伊勢國司北畠政郷及比大和紀伊ノ諸寺ニ勅シテ、畠山政長ニ屬シ、同義就ヲ討タシム、義政モ亦、内書ヲ下ス、

〔高野山文書〕三

源義就依令没落、南方蜂起云々、不移時日可被追討、早屬(備出)左衛門督政長朝臣手、抽軍忠者、可爲神妙、若於敵同意之輩者、可被處嚴科者、綸命如此、悉之以狀、

九月廿八日

右大辨(花押)

金剛峯寺衆徒中

〔御湯との、上乃日記〕一

九月廿八日、むろまち殿より兩てんそう御つり井ふき、ゑもん乃をけさいちをへぶちよくさ井、南とハしめてふしゑささるへきよし、御申あり、とり御申のうへハ、ゑさ井あきとをり御申あり、ちよくさ井ハ、頭辨うたいたすへぶよし御申をらふ、そさけ山身よあて、も申あいるよし御申、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

九月廿七日、辛卯晴、自室町殿爲御使布施彈正大夫

文明九年九月二十八日

七六五

高野山衆
徒ヲシテ
義就ヲ討
タシム

幕府義就
追討ノ繪
旨ヲ請フ

政長急ニ
御沙汰ヲ
下サレテ
コトヲ請

政長給旨
御下賜ノ
盡力ヲ廣
橋兼顯ニ
依頼ス

繪旨ヲ東
大興福妙
樂粉河吉
野高野大
傳法院ニ
下ス

政長勅裁
禮下賜ノ
御
政卿請書
ヲ獻ズ

文明九年九月二十八日

七六六

入來、畠山右衛門佐義就依沒落南方、可被成勅裁於所々、左衛門督申請之間、御執奏也、急可申沙汰由也、留守之間不及御返事、所々注文一紙被下、明日可奏聞也、○下

廿八日、壬辰、晴、午天參内、自室町殿御執奏所々、勅裁事奏聞處、勅許不可有相違由被仰下也、條々以次奏事、○中參内以前先參小河殿、條々披露、

早旦爲左衛門督政長朝臣使、前官務長興宿禰入來、繪旨事勅許無相違様申沙汰憑入由也、於心中更不可有疎略、但彼問事、内々相語者也、先御執奏以前、内々可申入禁裏條、可然由令入魂間、以民部卿、長興宿禰、左衛門督、於身別而申請由奏聞之處、時宜可然由歸來相談間、珍重之由返答、

廿九日、癸巳、晴、早旦招師富朝臣、畠山申請繪旨文言等談合、朝飯以後則參内、備勅裁案文於叙覽、依仰少々直付、○中歸家、書勅裁外無他事、南都兩寺、伊勢國司、金峯山、多武峯、金剛峯寺、大傳法院、粉河寺等衆徒中也、案文以下記文案、數通之間、入夜書出遣布施彈正大夫許、自畠山度々以長興宿禰催促之間、就本儀遣布施許、可有催促返答、(由飛カ)

卅日、甲午、晴、○中留守之間、自畠山左衛門督許有使者、同名又二郎召出、勅裁

之事勅許畏存由、且先可被奏聞、籠居以後未出仕、來月十日比可被出仕間、必々一段可參申由、懇申送云々、

十月十二日、丙午、自夜雨降、自日出程屬晴、畠山左衛門督有使者、先日勅裁伊勢國司御請持送、早可奏達返答、

〔實隆公記〕四 九月廿八日、壬辰、天顏快晴、○中抑就義就沒落之事、自武家被申請繪旨、東大興福、金峯山、多武峯、此等ニ被成下之、頭右大辨奉之、政長朝臣同申請之、

〔長興宿禰記〕上 九月卅日、今日任左衛門督申請、南都諸寺、紀州高野、粉川寺、伊勢國司被下勅裁、可退治右衛門督義就之由宣也、准后御内書同各被下之云々、

○義就兵ヲ收メテ河内ニ下ルコト、二十二日ノ條ニ見ユ、

三十日、甲午和漢聯句御會、

〔御湯との、上乃日記〕一 九月卅日、御く日ん！ゆうともゐる、なふの名こりよとて、御日くんあり、あゆさとす、(ラカ)大つう院なともめず、

〔實隆公記〕四 九月卅日、甲午、晴、今日猶候番、今日晝和漢五十句有之、承英、

文明九年九月三十日

七六七

文明九年九月三十日

七六八

元修等祗候、伏見殿御參、及二更一度終、懷持若宮御方被遊之了、
禁裏番衆等、山城ニ在ル知行ノ安堵ヲ幕府ニ請フ、

〔御湯との、上乃日記〕 一 九月卅日、なうこく此ち行ともふ侍まで、そん
しむさち、不う所の事、むろまちとのへ御申ゐるへ、よよし申さふ、く、
しゆう寺ふて御申、

一 乘院教玄、山城守護山名政豐ノ寺領同國西院莊ヲ押妨スルヲ、幕府ニ
訴フ、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文
庫所藏

九月卅日、甲午晴、早旦南都雜掌入來就西院庄守護
押妨事、自一乘院御書并御師々淳書狀持來、條々有談旨、

十月十一日、乙巳晴、南都雜掌入來、西院庄事等條々談、

○教玄訴訟ノ日ヲ詳ニセズ、姑ク本文ニ據リテ掲書ス、

攝津守護代藥師寺元長、其所領備中國分ニ赴ク、

〔大乘院寺社雜事記〕

四六十一 九月七日、

一 熟一檢控來、自西國上洛云々、藥師寺與一ハ爲備中領知々行、發向備中云
々、

十月 大未朔

一日、御祝、

〔御湯との、上乃日記〕

一 十月一日、御いじ井いづものこと、

二日、申、丙太田道灌、出デ、上野荒卷ニ陣ス、長尾景春、同爲景等來リ攻ム、
道灌、之ヲ鹽賣原ニ禦グ、尋デ、景春等退ク、

〔太田道灌狀〕

○肥前

略○上

一 於白井徒被送日數、諸勢及難義候上、東上野打出、少々敵境領掠取堪忍候
者、定自瀧御陣被分御勢候歟、不然者御發向候歟、可爲兩篇旨候之間、切所
へ引上廻行、守時節差懸候者、縱雖御方無勢候、於勝利者可爲必定旨存、九
月廿七日、白井お被立候、御自身御出御留候し、共、軍勢既致闕落候者、不
可有其曲旨存詰而、片貝へ出陣候、十月二日、道灌荒卷に上并引田邊陣場
等見廻、其心當候之處、如案結城、兩那須、佐々木、瀨、其外彼口諸勢申請、景
春并同名六郎多勢以寄來候、兼而覺悟前候之間、鹽賣原へ打上、引田切所
ヲ當前陣取、被出天子御旗候者、其時可及合戰旨存候處、聊爾趣異見被申

文明九年十月一日二日

七六九

上等杉顯定
上野ニ出
誘フ成氏ヲ

結城那須
佐々木横
瀨等景春
ヲ援ク
道灌引田
ヲ前ニシ

禦ガント
ス
道灌長尾
忠景ノ兵
ヲ迎ヘン
トシ戦機
ヲ逸ス

文明九年十月二日

七七〇

方共候歟、無其儀候之處、十一月十四日、御敵令退散候、細井邊用水堀候、於其前後追懸可致合戦旨存候處、忠景陣所隔候之間、打著ヲ相待候故押延候、於于今無念ニ候、下野邊勢者、其儘直致歸國候、略中

(宗書)文明十一
十一月廿八日

道灌判

謹上 高瀬民部少輔殿

(宗書)山内家人式部丞

〔鎌倉大草子〕

○上略、成氏、上野瀧ニ出陣スルコト、十月、小長尾景春、同六郎爲トニカ、ル、七月、是月、ノ條ニ收ム、

景公方より加勢ありて、荒巻と云所へ陣を取、道灌鹽賣原へ陣を取、切所を前み當て待懸たるみ、敵陣を引退て飯陣に、略下

○道灌、上杉顯定、同定正ヲ上野那波ニ迎ヘテ、景春ヲ武藏用土原ニ撃チ、景春敗レテ鉢形城ニ入ルコト、五月十三日ノ條ニ、成氏、兵ヲ率キテ上野瀧ニ出テ、景春ヲ援クルコト、七月、是月ノ條ニ、成氏、陣ヲ觀音寺原ニ移スコト、十二月二十三日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔上野國志〕

勢十一郡

片貝村

略

中 下細井村

略

中 上細井

村 此村南半里許鎌倉坂アリ、略中 引田村

略

中

略

中

略

片貝
細井
荒牧
引田

政弘降參
ノ子細奏
上ノ後四
品聘許

政弘伊勢
貞宗ヲシ
テ安堵ノ
禮ヲ通ゼ
シム

三日、丁酉是ヨリ先、大内政弘ヲ從四位下ニ敍シ、左京大夫ニ任ズ、是日、幕府、政弘ヲシテ、周防長門豐前筑前四箇國ノ守護職竝ニ石見安藝ノ所領ヲ安堵セシム、政弘、西陣ニアリテ、使ヲ幕府ニ遣リ、之ヲ謝ス、

〔黒岡帶刀所藏文書〕

御判 (書入)
「是を袖判と
いふ也」

周防長門、豐前、筑前、四ヶ國守護職、石見國仁戸郡、安藝國東西條并本新當知行之地所々等之事、大内左京大夫政弘領掌不可有相違之狀如件、

文明九年十月三日

〔長興宿禰記〕

上

十一月六日、曉天地震、今日聞、去三日大内左京大夫御免、九州三ヶ國安堵御判、自室町殿被下之、御禮申上、不及出仕、自敵陣以勢州貞宗申入云々、

〔御湯との、上乃日記〕

一

九月廿六日、むろまちとのより頭辨御つゝ井りて、おうちり四不んのことを御志ん三そうあり、かうさんの姿きこゆるハカリふて、こゝろへ志こうもなれふ、いゝのやう茂まけ御申あるふ、その志と井をりさねて御申ありてのうへいとて、志さひなきよ返事御申、

文明九年十月三日

七七一

敍位ノコ
ト執奏

幕府毎事
朝廷ノ命
ヲ奉ゼザ
ルヲ以テ
許サレズ

勅許

〔親長卿記〕

八

十一月十一日、晴、○中自去九月比、大内左京大夫政弘去月

任左京大夫

夫、敍四、可參御方之由、頻申之、有御口問、今夜已俄引退、○下

〔兼顯卿記〕

○岩崎文
庫所藏

九月廿四日、戊子、晴、時々雨、酒、○中以次伊勢守申

送云、先度内々申談、大内左京大夫四品事、御執奏候、可然様可申沙汰、由、被仰
出云々、畏奉存由返答、參御方故也、尤珍重也、

廿五日、己丑、陰、○中大内四品事、爲申入、次參内、以民部卿申入處、自公家御申

事、每事御無沙汰上者、是非勅答可被仰出事、不及御覺語、由、被仰下之間、重而

種々申入之間、重而有御執奏、有勅許之由、御返事也、

廿六日、庚寅、晴、大内四品事、昨日勅答之旨、以伊勢（真威）左京亮、申遣伊勢守許、則左

京亮入來、重而御執奏之通可申入、由、被仰下之間、則參内申入之處、此上者勅

許之由、被仰下之者也、

十月二日、丙申、晴、陰、秉燭以前參宰相中將殿、○中於御前被下御酒、伊勢守參

會世上之儀委細令申旨有之、大内進退等可然事也、戊剋許歸參禁裏、

〔尋尊大僧正記〕

八

十月二日、雨下、

一大内從四位下左京大夫政弘、公方御陣ニ可參向之由、風說在之、未一定事

政弘東陣
ノニ風說

西軍政弘
ヲ從四位
下ニ敍ス

歟、此間數年沙汰如此也、就右衛門佐下國、此事又興成、了、細川與和談之由、
同及其沙汰者也、又一說ハ不可有此儀事也、今出川殿土岐、大内、畠山右衛
門佐、同大夫、左衛門佐者、不替相一味同心云々、（義統）東公方
奉背之、
十九日、雨下、

一東大寺別當書狀到來、○中大内參上事、雜說之云々、

〔大乘院日記目錄〕

三

文明六年十一月十三日、大内周防助政弘、敍從四位

下、任左京大夫、廿九

〔大乘院寺社雜事記〕

六十

文明七年八月十四日、

一大内從四位下左京大夫政弘、卅、氏ハ多々羅朝臣也、百濟國聖明王末也云
々、先祖來日本國之時、著岸多々濱之故、則未流稱多々良氏、大内郡ニ住、
故號大内也、代々爲周防助、建武以來、補長門周防兩國之守護、依尊氏將軍
之命也、義弘來爲左京大夫云々、（以義弘）

○義視、政弘ヲ左京大夫ニ推舉スルコト、元年七月九日、條ニ見ユ、

三條西實隆、清水次郎左衛門尉ノ約ニ背キ、近江坂本葺課役ヲ以テ、其償
錢ニ充ツルヲ肯ゼザルヲ、幕府ニ訴フ、

〔親元日記別録〕

中

飯加州 一三條頭中將家雜掌(文明) 九十三

萃課役事、坂本、清水次郎左衛門尉去寛正二年彼者父時、元三要脚百六十
五貫文雖致祕計之、三四ヶ年中、以課役可引取候處、一向不存知、捧契約狀、
號證文于今違亂云々、

合一布霜臺 十月廿六日、

五日、己亥子御祝、御餅ヲ義政、義尙等ニ賜フ、

〔御湯との、上乃日記〕

一 十月五日、御おのこ、御さう月いつものふとし、

ふよひの御物、むろまち、宰相中將殿より御申、御つうい頭辨、あふとこれと
より申さふ、ふと、いつものことし、せん不をう寺うま井の比をゐいらす
る、さんてう申いさせ、(宰相)□□中將とのより宮の御うさへ御不うつあのおも
しろきゐる、

〔親長卿記〕

八 十月五日晴、入夜參内、亥子也、

〔實隆公記〕

四 十月五日、己亥、晴、入夜參内、嚴重拜領之、

〔兼顯卿記〕

庫○岩崎文 十月五日、己亥、晴、餘醉之外無他、午天自御臺御方依

義尙皇子
ヲニ御實綱
ヲ獻ズ

上ノ亥子

廣橋兼顯
勸修寺教
秀ト共ニ
御餅ヲ義
尙ニ執次
ガ

中ノ亥子

下ノ亥子

祇候ノ人

召參處、勸修寺大納言今日禁裏御食切持參事伺申間、予可持參分被仰付者
也、可令存知由被仰下之間、畏奉存由申入者也、此外諸事如故贈内府申沙汰、
予一身申沙汰可然由雖申入、雜所以下條事多間、於若年身、一身申沙汰可爲
難治歎之間、兩人相共可申沙汰由被仰付了、同可存知其旨由被仰下之間、御
懇之上意殊畏存由得其意、可被申入由令言上者也、申次民部卿局也、仍晚頭
參内、申出御食切、直先參宰相中將殿、

○十七日、二十九日ノ條、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯との、上乃日記〕

一 十月十七日、御いのことし、あふと
より此御つう井□□□□

廿九日、御いのことし、あふとより此御つう井あふし、

〔實隆公記〕

四 十月十七日、辛亥、晴、爲亥子御祝、入夜參内、祇候輩、大略如先

度、兵部卿同候、

廿九日、癸亥、晴、入夜御祝、祇候輩、源大納言、按察、兵部卿、民部卿、右宰相中將、四
辻宰相中將、下官、言國朝臣、元長、菅在數等也、

〔親長卿記〕

八 十一月八日晴、及晚參内、亥子也、

ヲ攻メテ之ヲ陷ル、

〔長興宿禰記〕

上 十月七日、於河内國合戰、右衛門佐打勝、譽田古市等被追

落、左金吾方和田美作守□□輩打死云々、

十一日、去七日打死首和田美作以下卅七、自敵陣出之、左金吾方請取之云々、

〔大乘院日記目錄〕

三 十月七日、譽田城責落、

嶽山城陷

八日、嶽山城沒落、

〔尋尊大僧正記〕

八 十月五日、

長田家則

一 筑前守書狀到來、陣替也、今明日之間、可有合戰云々、自矢生至藤、井寺歟云々、

八日、

一 昨日夕譽田城責落之、大將和田美作守、同五郎伯父福恩寺自害、恩智タシ

ケ沒落云々、宇治郡杉野、宇野、坂部、野原同自害云々、

二百餘人沒落、三十餘人自害了、若江城不及合力遊佐所存不審々々云

々、筒井ハ自教興寺被追返云々、東方之大和衆以外迷惑事也、如何可成、不

便事也、

九日、

遊佐長直
政長ノ軍
ヲ援ケズ
筒井順尊
擊退セラ

一 嶽山城沒落、責手大和吐田勢云々、昨日事云々、

○ 義就、河内ニ下リ、幕府、其黨ヲ逐フコト、本年九月二十二日ノ條ニ、政

長ノ部將遊佐長直ト河内若江ニ戰ヒ、轉ジテ堺ヲ取ラントスルコト、

同二十七日ノ條ニ、義就、長直ヲ若江城ニ攻メ、天王寺城及ビ山城、木津

城ヲ降スコト、本月九日ノ條ニ見ユ、

八日、壬寅攝津住吉社怪異ヲ奏ス、

〔御湯との、上乃日記〕

一 十月八日、すみよしより、天下の事よつきて、ち

うしん申、

〔兼顯卿記〕

○ 岩崎文庫所藏

十月八日、壬寅晴、勸修寺大納言來臨、住吉社注進持

來自第三神殿、光物飛行虛空、其外種々怪異事等有之、此義御敵沒落之先、光カ

也、珍重由注進、仍只今披露云々、尤可然事也、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲九十六 勅封第九拾五番ノ一

住吉社注進 文明九九年

去廿七日曉、從當社第三神殿、光物出現、而飛虛空去、參詣之諸人數多見之、訖

同廿九日、晴天、如白木綿物、自己刻至申頭、頻降下所候、如此則於神前勸申候

文明九年十月八日

白木綿ノ
如キモノ
降ル

住吉社注

西軍沒落
ノ前兆

文明九年十月八日

七八〇

處天下御吉事特ニ凶徒等御退治之瑞想云々、依之注進申候、仍一社一同致御祈禱候、卷數進申候、彌御祈禱事一段可抽精誠候、此旨可預御披露候、恐惶謹言、

九月廿日

國昭判

勸修寺殿 御奉行所

幕府、近衛政家等廷臣ノ所領山城ニ在ルモノヲ安堵セシム、

〔兼顯卿記〕○岩崎文 庫所藏 十月八日、壬寅晴、早旦進藤三郎左衛門尉入來、陽明

家領當國所々奉書、先且奉行書出之間持來、目六注別記、見無シ、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十月八日（久我通世）、こゝろあやうらくよて、出しろのち行

の不□□し所此事、むろまちとのへ御申あるへきよし申さふ、御宮けよ

をもし一おしきまいらふ、

〔兼顯卿記〕○岩崎文 庫所藏 十月一日、乙未、自夜雨降、小春朔、每事中心多樂也、尤

幸甚々々、○中（舟橋） 清三位宗賢卿、當國知行奉書事等來談、存分令入魂、師富朝臣

同入來、

三日、丁酉晴、秉燭之後、左衛門佐（薄）以量入來、知行分事有相談、

舟橋宗賢

薄以量

轉法輪三條公致

菊亭持季

往生院若江兩城陷

東軍沒落

大内氏ノ邊ニ寄來

ル

河内義就スノ手ニ歸

十一月廿一日、乙酉晴、内府光臨、家領事被相談旨、○以下
廿四日、戊子晴、菊庭有使、家領事談合、鯉一被送之芳志也、
○西軍退散ニ依リ、幕府、諸寺ニ所領ヲ還付スルコト、九月二十六日ノ條ニ見ユ、

九日、（癸卯）畠山義就、遊佐長直ヲ河内若江城ニ攻メテ之ヲ陷レ、尋デ、天王寺城竝ニ山城、木津城ヲ降ス、仍リテ河内大和ノ東軍、風ヲ望ンデ潰ユ、大内政弘ノ部將杉弘相モ亦、兵ヲ奈良ニ出ス、

〔大乘院日記目錄〕三 十月九日、往生院城責落、若江城沒落、遊佐河内守長直沒落、和州平郡嶋沒落、

十三日、寶來、水津筒井以下自燒、成身院沒落、大内勢寄來、般若寺邊、古市馳上無爲了、

〔尋尊大僧正記〕八 十月九日、

一 往生院城責落之、

一 若江城沒落、遊佐河内守長直、自天王寺令乘船沒落了、河内國一國、於于今者悉以右衛門佐方如所存成下了、珍重事也、

文明九年十月九日

七八一

一自信貴山越被責和州平郡嶋沒落自燒或發向之云々、十日、

一龍田城可有發向之由右衛門佐披官遊佐甲斐庄以下訴申入之先年神南

山合戰父敵在所筒井龍田也云々、龍田遊佐ヲ殺スコト、寛正元年十月十日ノ條ニ見ユ、越智小泉

片岡申入支之依此事今日當國發向無之云々、

十二日、今朝大雨

一寶來法眼ハ沒落筒井一所ニ有之留守者一人相殘計也筒井も可落之由

申處檜原可切腹之由申間先以不及開云々大略一兩日中可沒落云々筒

井勢小勢無申計云々、

一遊佐之内者荒木以下沒落在吉祥院仍當院西山ニ用害畢比與事也、

十三日、

一今曉寶來自燒沒落次水津□□自燒沒落仁木同沒落次成身院順宣法師

沒落次筒井順尊法師自燒沒落了、

大内手者杉次郎（取捨）左衛門甲三百計雜人數千人自水津至般若寺南都安否

也學侶六方集會古市之留守衆方ニ申遣之間中御門以下罷上杉ニ見參

寶來祐尊
沒落

成身院順
宣筒井順
尊沒落ス

杉弘相大
和般若寺
ニ至ル

古市胤榮
兄弟兵ヲ
率井テ奈
真ヲ守ル

箸尾城ノ
ミ殘存ス

引退了南都事無爲又并下狛ニ古市之代官井上九郎馳向テ致成敗之間
無爲ニ事成了、略○次古市胤榮隆胤兄弟自河内之教興寺馳上奈良方御
所甲百餘在之今夜西方院山天滿社ニ取陣榼等給之畏入之由云々於于
今者奈良中安堵不能左右寺住衆ハ吉田通祐竹内光秀見塔院祐賢辻子
圓弘并沙汰衆以下般若寺邊ニ陣取之了古市ハ自教興寺直ニ奈良之三
條口ニ入了路次無殊儀云々今於當國相殘所ハ箸尾城計也但是も自身
ハ沒落歟云々、

十四日、

一古市兄弟參申、略○中今度畠山方勢共大和河内内分一万者可有之由相語
也、

己心寺并法花寺事可致防禦所之由筑前守ニ巨細仰付之得其意云々、

十五日、

一越智彈正忠櫟本正法寺ニ陣取今日春日并八幡社參自觀禪院出立付之
不審條々先今日正十死也次合戰之内死人三十个日之内也次父子共ニ
陣姿小袴風情也初而社參也尤可爲上下事歟本鳥放儀且如何於見所者

更以無大事爲其身且如何、

十一月十九日、

一社頭大般若自今日三ヶ日群參云々、去月十三日大内勢以下亂入、立願三ヶ條内也、大般若七晝夜論云々、

興福寺安
穩ノ祈願

〔長興宿禰記〕

上 十月九日、河内若江城今日沒落、遊佐河内守左金吾以下群勢分散、天王寺御方城同被追落云々

義就ノ兵
和泉堺ニ
打入ル

十五日、今日當國水津城、自右衛門佐方追散、和泉堺同敵勢打入、大和國民筒井以下自放火分散、右衛門佐同意越智出發、打入南都云々、

〔兼顯卿記〕

庫○岩崎文 十一月七日、辛未、晴、入夜時雨降、南都雜掌袖留木大進法眼重藝入來、自寺門注進狀持來、供目代今般河内國令沒落間、敵同意衆

大和ノ衆
徒國民西
軍ニ屬シ
蜂起ス

徒國民等蜂起、雖然於寺社者致御祈禱之精誠、神事法會無退轉可執行由、可披露由也、悉可相尋條々、取亂間、重而可來由仰含了、

九日、癸酉、雨降、南都雜掌袖留木大進法眼入來、南都事條々相談、

〔興福寺年代記〕

第百四代後（文明九年） 同十月六日、今田城落、
土御門院 十二月、筒井沒落、

今田城陷
ル

〔史記抄〕

五 略 上（源朝） 蕉了子謂孟堅之評得矣、天下既已土崩瓦解、雖得百周公、

不能復存其亡也、然賈馬之言欲令後世爲人之子孫而貴有天下者、改其先君之過舉、速於救焚溺也、若能救之速、則土之崩也、可扶瓦之解也、可止矣、賈生太史之論至哉、文明丁酉、小春廿又三日夜參半、就灯下抄（紀）了子時河内叛寇強梁、其賊黨某不勝喜、躍入寺遊賞、寔築之犬也、

河内叛寇
強梁

○義就、長直ト若江ニ戰ヒ、天王寺ヲ攻ムルコト、九月二十七日ノ條ニ、
譽田城ヲ攻メ、守將和田美作守以下三十餘人ヲ斬リ、首級ヲ政長ニ送

ルコト、本月七日ノ條ニ見ユ、

畠山政長、幕府ニ出仕ス、

〔兼顯卿記〕

庫○岩崎文 十月九日、癸卯、晴、畠山左衛門督入來、籠居以後今日出仕間賀來也、重而可罷向者也、

十三日、丁未、晴、畠山左衛門督有使者、美物兩種（鮭三尺、海蛸一折）送之、芳志之由懇謝之、申初先向畠山左金吾許、爲出仕禮、先日來臨之間、罷向賀之者也、則令對面祝著懇被謝、

○政長、籠居ノ日詳ナラズ、

甘露寺元
長勅使ト
シテ參向

十日、甲辰法勝寺大乘會、

〔親長卿記〕

八

十月九日、晴、今日當番相博罷下坂本、有法勝寺大乘會、元長

參向之間、令同道也、

十日、晴、今日有大乘會、兼日之儀、去月遣御教書於綱所了、以講師書狀綱所付

書狀於元長、以件申狀奏聞勅許也、其儀先々記之、仍不及記、次乘船參詣石山、

中御門中納言樂邦、元長、□□□等、同船、及晚歸華、入夜雨下

十二日、自曉天晴、歸京、

十二日、丙午月次和歌御會、

〔伏見宮御記錄〕

亭二

邦高親王御詠類寫

文明九十二年十二月御月次

邦高親王
御歌

邦高

時雨

それともる時雨よかして神無月不毛ささめぬ雲此ころも手
ぬしやらぬ日くさものと哉晴くもりささめなくふるよハ此時雨よ

籬殘菊

色あへく残るハきく此をあ、れや秋より後乃霜此まかり

ませ此うちよむとつ色よて殘き霜のふるえの白きく此をあ

十四日、戊申大和高田某、飯高某ト隙アリ、是日、飯高ヲ攻ム、古市胤榮、越智

家榮ガ約ニ背キテ、高田某ノ舉ヲ抑止セザリシヲ怒リ、隱居セントス、畠

山義就之ヲ諭止ス、

〔大乘院日記目錄〕

三

十月十四日、飯高自害、衆八十三人自滅、

〔尋尊大僧正記〕

七

五月十八日、夕立大雨下

一飯高與高田近日及合戰、私反錢防示相論事也云々、先年より如此自他申

間、越智折中、且申延歟、百貫文飯高ニ遣之、五十貫文ハ高田ニ遣之云々、如

此破テ及合戰上者、越智失面目ヲ、彼百貫文料足可返給候旨、自越智方責

之云々、則飯高方合方面々出陣事、自越智方押之云々、

〔尋尊大僧正記〕

八

十月十四日、

一古市兄弟參申、只今福寺邊ニ陣替、依左右飯高ニ可下向云々、高田與弓矢

之故也、

十五日、

文明九年十月十四日

七八七

私反錢防
示ニ基ク

文明九年十月十四日

七八八

八十三人云々

一昨日自高田方押寄飯高之所、飯高自害、内物并合力輩以下六十餘人被殺了、於子息者、十市北相伴沒落了、去春比より私反錢ニ堺相論事在之、守折如此致其沙汰歟、古市又進馳向故歟云々、自道古市引返了、凡無念次第也、於河内國越智與古市申合子細也、高田沙汰次第以外無念之由、西腹立之間、自越智方色々令申、五條野之内物共、今度被打殺隨一上者、於越智者如此急速ニ可出條、不思寄次第也云々、

十六日、

一就飯高儀、古市ノ西隱居之由聞之、驚入遣泰弘寺主於遣古市方、子細於相尋返事、御使畏入、此飯高與高田弓矢事、今度於河内陣申合越智之間、得其意、自飯高方卒爾之儀無之様ニ、爲古市可申付云々、仍其子細申付了、然者高田方へも、此子細自越智方可申付之處、越智意趣分ニテ高田方へハ不申候歟、俄ニ如此致其沙汰了、仍西失面目之由申、隱居仕候之由云々、言悟道斷次第也、各後解候事也云々、

十七日、

一古市兄弟引籠事、以外寺社大事不可過之、如何可成行哉、

廿日、

一古市西進退事并兩條子細、光秀申入之、使竹千代丸、得御意旨仰了、

廿二日、

一木阿進退事、巨細仰遣筑前守方、古市ニ可申合云々、西與越智間事、畠山儀無等閑儀、近日ニ可成無爲云々、珍重々々、

廿四日、

一古市之西房隱居事、爲教訓自畠山方使者僧以下濟々罷向、被召出之云々、依今度飯高事也、越智同代官遣之、旁以面目儀也云々、

廿六日、

一筑前守來、木阿間事并西方進退事、巨細仰、木阿事ハ以萩別申遣之、西方進退事ハ、定而重而自畠山可申候、可爲無爲云々、

廿八日、

一自畠山使者譽田罷越、古市西進退事、色々令申間、此上者面目至也、任承候可出頭之由、返事昨日來、今日歸國云々、珍重旨仰遣之畢、

十一月朔日、

文明九年十月十四日

七八九

亂榮義就
ノ陣ニ赴
キ謝ス

尋尊義就
ニ物ヲ贈
リ幹旋ヲ
謝ス

文明九年十月十四日

七九〇

一古市西今度儀畏入由爲禮河内ニ下向云々、次以屋形禮榼等遣之、

榼十荷 折二合 マシ(榼) 布三合

以上屋形注文

榼三荷 折一合 同 唐布二合

以上譽田

八夫事十八分仰付吉田、七郷召之、

今度御成敗、每事如御意成下候條、珍重存候、仍御祈禱御卷數并御榼

等、以注文進之候、諸事目出度、連々可申入候也、恐々謹言、

十一月一日

尋尊

畠山殿

雖輕微候、御榼三荷折一合唐布二合被遣候、御賞翫候者、可爲御悅喜
候、於自今以後者、御屋形樣御儀、每事被憑思召候、巨細古市西方へ、尙
々可被申候、每事目出度可被仰出候也、恐々謹言、

十一月一日

清賢判

譽田殿

三日、

一畠山返事到來、古市昨夜歸宅云々、

十日、

一越智來、榼五荷折二合持參、見參盃給之、則金福輪馬一疋 栗毛 退出之時給

之、今度就飯高事、越智與古市西不和、今日面々取合仲人云々、幸來間、於御

前兩人召合、時宜近比可然次第也、同盃給、則直ニ下向云々、

〔歷代殘闕日記〕 八十二 宗典僧正記 同八、申、ヒタカ弓矢事出來候、六月十三日始

リ、八月十一日召行也、

同九、酉、ヒタカノ弓矢事、又四月十一日ニ再發、十月十四日ヒタカ破了、

〔參考〕

〔大和志〕 十五 市郡村里 飯高 關邑

十五日、己酉、義政、青蓮院准后尊應ヲシテ、風雅和歌集ヲ摺寫セシム、

〔兼顯卿記〕 〇岩崎文 庫所藏 十月十五日、己酉、晴、時雨時々酒、自室町殿有御使、阿

彌、風雅集 上下帖 被下之、進青蓮院能々被摺、如不審紙可被直進之由、可申由被

文明九年十月十五日

七九一

家榮尋尊
ヲ訪フ

家榮胤榮
會合

文明九年十月十五日

仰下、畏奉由申入者也、

十六日、庚戌晴、霽時々下、早旦風雅和歌集相副書狀、送遣不動院顯豪僧都許、急可進青蓮院由、令入魂者也、

廿五日、己未、雨降、昨夕自青蓮院先度風雅集到來之間、令持參、以珍鶴喝食進上之於御末、有一盃、御左子局權局以下濟々、祇候、初夜時分歸家、

幕府、延曆寺ノ加賀倉月莊ノ地ヲ違亂スルヲ停メ、攝津之親ヲシテ之ヲ安堵セシム、

〔足水家藏文書〕坤

加賀國倉月庄内近岡村南新保大河縁等事、爲山門掠給奉書、致違亂云々、甚無謂、早任當知行之旨、彌可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明九年十月十五日

(松田家藏)
丹後前司(花押)
(清原家)
和泉前司(花押)

攝津(之親)修理大夫殿

興福寺六方衆、有德錢ヲ奈良ニ課ス、

〔尋尊大僧正記〕八 十月十六日、

有德錢

一昨日六方蜂起、奈良中稱有德錢、數十人ニ料足共懸之、日中以前可持寄旨申付之云々、無緣堂藤松丸ニ三百疋可出之由云々、當門跡御童子之間、可相除旨、沙汰衆方ニ遣奉書了、得其意云々、珍重者也、但蜂起寂中、越智罷上之間、髮頭共東西ニ退散了、以外比興次第也、仍此事不可然旨、内々及其沙汰歎云々、

十八日、

地下懸錢

一昨日今日六方蜂起、地下懸錢事也、

十六日、戊幕府、勸修寺竝ニ實相院ヲシテ、亂前ノ如ク其寺領ヲ安堵セシム、

〔勸修寺文書〕〇二山城

門跡領山城國安祥寺大宅寺新御領本新八幡田、山科内所々并寺邊散在田畠山林等事、至一亂之始、當知行云々、然早可被全雜掌領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明九年十月十六日

(美濃家藏)
美濃守 判
(加賀家藏)
加賀守 判

文明九年十月十六日

七九三

七九二

文明九年十月十七日

七九四

勸修寺門跡雜掌

〔實相院文書〕

○山城

門跡領山城國枇杷庄并宇治下居別所新別所西法花堂等事至一亂之始當知行云云然早可被全雜掌領知之由所被仰下也仍執達如件

文明九年十月十六日

美濃守(花押)
大和守(花押)

實相院門跡雜掌

○幕府、西軍退散ニ依リ、山城ノ諸寺ニ所領ヲ還付スルコト、九月二十
六日ノ條ニ、廷臣等ノ所領山城ニ在ルモノヲ安堵セシムルコト、本月
八日ノ條ニ見ユ、

十七日、^辛大内政弘、越智家榮等、大和ニ在ル興福寺東大寺領等ニ、兵糧米
ヲ課ス、

〔尋尊大僧正記〕

八 十月十七日、

一自上乘院僧正方書狀到來、自越智陣兵糧米二百石分、内山惣山ニ懸之、足
輕十八人付之令譴責云々、珍事、但井山^(正勝寺)も兵糧二百貫文懸之、今度當山法師

家榮兵糧
米ヲ上乘
院ニ徴ス

正勝寺ニ
モ課ス

政弘東大
寺領ニ課
ス

古市方ニ罷出之間、百貫ハ免除、百貫ハ可沙汰之由、堅以山村申付之云々、
各先年越智出頭之時、例分仰之云々、南兩郷ニも申付之云々、
一下狛大内陣、東大寺郷ニ轉害以下兵糧米三百貫懸之云々、
廿六日、

一堯善申、先日越智御返事趣條々、^{○中}

一諸山寺兵糧米事、先例子細之由、内者共申候、得其意旨申付候、さてハ以外
子細候、但既以申懸候事候間、可然様爲御成敗如形儀候ハ可畏入、此事早
々蒙仰事候ハ、可得其意事候あり、何とも畏入之由云々、則於樸本陣、豐
田ニ申合、内山事ハ^(致カ)至討略云々、兵糧米四十貫分出之、又奉行二十貫、合五
十貫分ニ可落居云々、井山事ハ山村申合云々、三輪^(長谷寺)釜口事自堯善房可申
遣云々、

十一月六日、<sup>晝四十刻、
夜六十刻</sup>

一内山年預參申、越智方兵糧米事、五十貫文雖治定、猶以難事行候、可如何哉
云々、尙々豐田ニ可申合之由仰了、越智無等閑儀、但披官共糧米也云々、色
々可申合旨仰了、

三輪長岳
兩寺ニモ
課ス

文明九年十月十七日

七九五

越智家榮、甲斐莊某ト和泉守護職ヲ爭フ、

〔尋尊大僧正記〕^八 十月十七日、

一和泉國守護職事、越智與甲斐庄相双而致所望、則自兩方押而扶ツキ入之云々、畠山成敗一事也云々、越智ハ自先年西方大名并今出川殿御下知一定事也、甲斐庄ハ先年舍兄於彼國打死了、其號立申之云々、

十二月八日、

一紀州勢仕事、自河内以譽田、平兩人、越智方ニ令申之、返事不可叶ハ、爲山城邊之儀者、自身可出陣之由申云々、是泉州事故歟云々、河内與越智不和也、

松平道慶、其買得セル京都ノ屋敷地ヲ安堵センコトヲ、幕府ニ請フ、

〔親元日記別錄〕^中 一松平遠江入道道慶^{飯加州 同月十七日}

所々永代買得屋地安堵御奉書事

一所三條坊門室町與烏丸間、口三丈九尺、奥ハ三丈三尺、

代三貫五百文、賣主鷹司中將伊春、賣券、

一所、綾小路猪熊與五條坊門間東頼、

代百貫文、賣主吉見右馬頭家仲、賣券、

義就ノ意見ニ依リ確定ス

義就家榮ヲシテ兵ヲ紀伊ニ出サシム

代錢三貫五百文、賣主鷹司伊春、代錢百貫文、賣主吉見家仲

奉行甘露寺元長

祭料下行

女房達御銚子ヲ沙汰ス、十度飲

二十日、^寅土御門有宣ニ命ジテ、百怪祭ヲ行ヒ、變異ヲ禳ハシム、

〔御湯との、上乃日記〕^一 十月廿日、こよひより百氣のまつりありのふ所ニテあり、御あま物いつる、ふきやう^(甘露寺元長)左少辨、

〔親長卿記〕^八 十月十七日、晴、參内、仰云、度々有變異外典祭、何事歟可被行哉、予申云、如此之時、百怪祭歟、大略泰山府君祭歟可然、召寄有宣卿可談合云^(土御門)

々、仍召有宣三位、仰々之趣、百怪御祭可然之由申之、祭料三百疋被下行也、自廿日可始行云々、

廿日、晴、^{○中略、安鎮祭ノコトニカ、自今日被行百怪祭、有宣三位勲行、元長奉}行也、御撫物直可申出之由仰了、

紅葉叢覽、

〔御湯との、上乃日記〕^一 十月廿日、もみち御らんり、絲うさうさち御てうしとも申ささ、あんせん寺殿いれりいらさらみ、十とのミをさせられ

く、ミあくくさめしれくゑひともを誂、

二十一日、^乙神祇權大副吉田兼俱ニ命ジテ、安鎮祭ヲ内侍所ニ行ハシメ、其勞ヲ賞シテ正三位ニ敍ス、

安鎮祭

奉行甘露寺元長

假屋ヲ前ニ設ク

五辻富仲撫物ヲ奉ズ

〔御湯との、上乃日記〕

一 十月廿日、あまの事よふより御神事なり、廿一日、さんし此御を井よふよりある、夕さりあんちむのまつりあるへよみて、かりや□□□□らる、夜ニ入ふえしはる、御なて物いける、なつて返るゐる、天氣もよくてめさし、御さる月ゐる、ふ行おれし、
(甘露寺元長)

〔實隆公記〕

四 十月廿一日、乙卯、晴今夜安鎮祭、侍從三位兼俱卿奉行之、儲假屋於内侍所之前、引廻幕、有種々作法、嚴重之儀也、(舊儀於朱雀門)天氣快然、珍重々々、數刻於御前清談、有盃酌、深更退出、

〔親長卿記〕

八 十月十八日、晴有女房奉書、明日於内侍所神前可被行安鎮祭、當日之儀元長可申付之由有仰、申領狀、兼日誰人申沙汰候哉、不審々々、民部卿申定兼俱卿云々、非傳奏之仁、非職事、不可趣□□□□遣使者、明日安鎮祭條々何事候哉、兼日事不存知之間、不審之由命之、無殊事、御撫物事六位藏人可申出事、當日御精進事等申之、六位事申付源富仲了、
(五辻)
十九日、晴、今日自禁裏被下物、參内下姿畏入之由申入了、其次見廻之處、定間四方假屋立之、兼日民部卿申付云々、立明等事申付了、

内侍所鳴動後ノ祭

費用ヲ幕府ニ徵ス獻ゼス

勅感ノ旨サレ

入夜元長參内、當日之儀申沙汰云々、吉田三位兼俱卿勤仕子細不見之、元長退出之處、明日有被仰合事、予可參内云々、

廿日、晴、參内、仰云、昨日安鎮祭事、去春内侍所鳴動之後、○内侍所鳴動ノコト、正月八日ノ條ニ見ユ、

不及清被等風情之間、安鎮祭可然之由、兼俱卿申之、仍用脚事被尋仰之處、五千疋可被下行云々、仍被申武家之處、于今不及其沙汰之間、以別忠可參勤之

由、兼俱卿申之、五百疋先日被下行了、被御覽及之處、誠爲大儀、(召具之云々)、

感之趣被仰遣可然歟、然者銀劍風情歟、香召等可被下歟、可被如何哉、予申云、

爲公家自然勸感事、或被下勅裁、或被成官位歟、御劍等被下事、又依事歟、所詮

可被敍二品歟之由言上、仰云、予申分尤神妙然者、可被敍二品、次勸感之旨可

成遣勅裁云々、退出、案之、兼俱卿從三位也、正三位歟之由令存、二品之由言上、

仍以文付勾當内侍、只今令忘却二品之由申入了、爲從三位之間、可爲正三位

之由申入了、仰云、有先例者二品可然歟、重予申云、今度事非別儀、一段□□無

詮歟、被下一階簡要歟之由言上、重又仰云、予申分可然、早可仰云々、仍令書勅

裁於元長遣了、予又參曇花院殿、其間兼俱卿來云々、

〔公卿補任〕

四十三 文明十二年 非參議從三位卜兼俱 神祇權大副侍從、月日敍

文明九年十月二十二日

八〇〇

從二位、越階、

〔諸家傳〕

十四下

兼俱本兼敏兼名

文明四年十月廿七日從三位卅八歲、權大副

侍從等同

吉田

正三位、同十二年十月廿二日從二位、

三條西實隆ニ御製及ビ物ヲ賜フ、

〔實隆公記〕

四

十月廿一日、乙卯、晴、早旦自禁裏紅葉一枝被付御製被下之、

美物一種爲精進解同拜領之、祝著之至、不知手足之舞蹈者也、入夜爲御禮參

内、

十一月十五日、己卯、今日猶候番、小袖自禁裏被下之、天恩之至、怡悅無比類者也、

○十一月十五日、小袖ヲ賜フコト、便宜合致ス、

二十二日、丙辰義尙、小河第二至ル、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十月廿四日、戊午、晴、午天參小河殿、宰相中將殿自去

廿二日、令渡給、略○中秉燭程歸參殿中、頃之退出、細河右馬頭政國等參會、

廿九日、癸亥、晴、及黃昏降雨、雷鳴兩三聲、頗似夕立如何之、略○中直參宰相中將

殿頃之祗候之後、自小河殿還御、

細川政國
參會

和泉半國守護細川持久、其分國ニ赴ク、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十月廿二日、丙辰、晴、四時分先向細川阿波守宿所、泉

州入國之間、暇乞故也、

○持久、和泉ニ赴クコト、其日ヲ詳ニセズ、姑ク本文ニ據リテ掲書ス、

二十四日、戊午賀茂社々司勝平ノ讓狀ニ任セ、遺領ヲ其寡婦ニ安堵セシム、

〔親長卿記〕

二三

故勝平縣主遺跡事、任讓狀之旨、除田良庄、知行不可有相違之由、被仰下候、可申旨

候也、恐々謹言、

文明九

十月廿四日

親繼

重所望之間如此書遣了、
故勝平縣主遺跡事、任當知行分事、之旨任讓與之旨、除田良庄、知行不可有相違、万一繼

平縣主及違亂者、任請文之旨、可有其沙汰之由、可申旨候、恐々謹言、

十月廿四日

親繼判

故治部少輔

文明九年十月二十四日

八〇一

後家

○繼平ノ勝平遺領播磨安志莊ヲ違亂スルヲ停メ、信平ニ安堵セシムルコト、十一月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十六日、庚申、禁中御樂

〔實隆公記〕

四 十月廿六日、庚申、晴、入夜參内、令守庚申給、源丞相、兵部卿、四

相公羽林、下官、内藏頭、元長等祇候、宵程御樂、狂歌十首詠之、及五更候御前、

宗貞國、對馬、多久頭魂神社別當國吉坊ヲシテ、社領ヲ安堵セシム、

〔主藤文書〕

○對馬

酸豆郡こをさらへ之事、東ハあいの河をかきり、北ハせの河をかきりて、任貞盛御判之旨、所閣之狀如件、

文明九 十月廿六日

貞國(花押)

酸豆 住持國吉御坊

○宗茂與、多久頭魂神社ニ社領ヲ安堵セシムルコト、八年十二月二十五日ノ條ニ見ユ、

二十七日、辛酉、義尚疾ム、

頭風 繪詞

義尚廣橋 兼顯馬 進士九郎 左衛門尉 鯉ヲ料理 ス

〔兼顯卿記〕

庫○岩崎文 所藏

十月廿七日、辛酉、晴、秉燭程參小河殿、於宰相中將殿

御座方、清書著到、○著到和歌ノコト、九條ニ見ユ、御頭風之由被仰、御平臥之間頃之祇候、繪詞等讀進之、及半更歸家、

三十日、甲子、義尚、小河ノ新第ニ宴ス、

〔兼顯卿記〕

庫○岩崎文 所藏

十月卅日、甲子、晴、雪花聊飛來、午天參宰相中將殿、○

略 於新造有御酒、予御馬、青黒、拜領之、則被引下由、直有仰、面目之至、祝著多端也、則進上金劔、畏申者也、將亦於御前、進士九郎左衛門尉切鯉、則有御賞翫、予精進也、雖然、依仰賞翫之、以御酌被下新盃、予盃被聞食之、過分之至、再三辭申、雖然、押而被聞食間、目上重疊、面目尤祝著也、可謂家餘慶、自愛々々、又被下御服於進士、御盃同被拜領之、仍進上御太刀、依召參切之故也、及半更歸家、十一月一日、乙丑、天晴、中冬告朔、每事中心多樂也、尤珍重々々、幸甚々々、昨日拜領御馬、終日自愛之、每事珍重々々、

二條持通、父持基ノ三十三回忌ニ依リ、懺法講ヲ山城長谷ニ行フ、

〔親長卿記〕

ハ

十月卅日、晴、元長今朝長谷大閤旅店、先日有御音信、可有懺

法講、爲笛所作可參歟、由有仰、申領狀之故也、四辻宰相中將樂人等同道、

文明九年十月三十日

文明九年十月是月

八〇四

十一月一日晴午剋許元長歸宅後福照院前關白三十三回云々當日明後日云々、○持基ノ薨去ハ文安二年十一月三日ノ條ニ見ユ、

是月伊勢大神宮神主等、神宮ヲ造替センコトヲ朝廷竝ニ幕府ニ請フ、

〔内宮引付〕

一皇太神宮神主

注進可早被經次第御沙汰兩通上奏、當宮造替遷宮事、任式年去寬正五年、雖被遂行

山口祭神事、其後不及御沙汰間、遷宮馳過式年、御殿表葺令朽損、雨露依

侵入、御裝束等令濕損、御幌朽落給條、有神慮恐者哉、嚴密蒙御成敗、被遂

行御事、始以下次第神事、被急遷御者、爲御祈禱專一仔細事、

右當宮造替遷宮事、任式年去寬正五年、雖被遂行山口祭神事、其後次第神

事不及御沙汰、仍遷宮馳過式年、御殿表葺令朽損、御裝束御神寶等令損失

之條、神慮難測者哉、爰去九月神嘗祭時、任例禰宜等令參昇、奉開御戶之處、

御幌朽落、其形不御坐、群參貴賤殿內拜見有恐者哉、此儀兼廻思慮、用意假

御幌、自外飭奉覆、藏殿內之後、遂昇殿、禰宜等之奉備織御衣、宮司之所進荷

前等令奉納、致御祈禱畢、然早被遂行御事、如神事被急出入以下之次第神

寬正五年山口祭ヲ行フ遷宮式年ヲ過ゾ

表葺朽損シ裝束神寶損失ス

御幌朽チ落ツ

假殿遷宮ヲ急ギ次第造替スベシ

寬正三年假殿遷宮ヲ請フ

神嘗祭ニ股舎ヲ汚ス

事矣、就中假殿遷宮事、造替遷宮者、雖被急出入、袖作山引河下次次第神事、可經年序者也、先被遂假殿遷御節、清正殿、被奉直種々之違例之事、被急造替遷宮者、令然神慮、御祈禱可有感應者也、仍嚴密蒙御成敗、爲抽御祈禱忠勤言上如件、以解

文明九年十月日

大內人正六位上荒木田神主定治

禰宜從三位荒木田神主氏經

四上

經興 十八署

一皇太神宮神主

注進可早被經次第御沙汰兩通上奏、不日被遂行當宮假殿遷宮、清正殿不淨、直種々

違失、奉鎮御躰於本式、致御祈禱者、相應神慮子細事、

右去寬正三年當宮造替遷宮之時、依御裝束御神寶御金物等之違失、任先

例被行假殿遷宮、可被奉鎊替之由言上、其後古宮所之心御柱顛倒、是又天

下重事也、可被急假殿遷宮之由、度々雖令注進、御沙汰及停滯之條、依神慮

不快歟、同五年九月十七日、於神嘗祭庭喧嘩出來、及双傷不淨及御殿相觸

文明九年十月是月

八〇五

文明九年十月是月

八〇六

禰宜等仍昇殿不叶之間、官幣禰宜等之奉備織御衣、宮司所進之荷前等不及奉納、御祈禱退轉神鑑、叵測者哉、殊御躰不淨之中御坐、其恐不少、被造進假殿之條、雖爲先例、且大營、且逗留不可然、奉遷東寶殿、不日被成遷御、造清御殿不淨所々、可奉直條々違失之由、頗依令言上、且被下行用意御材木仕之間、營作雖不可廻月日、御沙汰及停帶忝御神躰御坐不淨中之間、擁護緩御坐歟、天下念劇出來、御朝敵令蜂起、洛中之條、前代未聞仔細也、仍近年別而勵御祈禱懇誠之處、朝御敵令退散之條、所神威之耀也、然早被下行御修理之用脚於大宮司則長、被下行御裝束以下之用脚於神宮、不日遂假殿遷御節、造清御殿不淨之所々、葺直御表葺破損立心御柱、奉飭替屋形文御被御幌等、無違例事、奉鎮御躰於本式者、天下奉平政何事過之乎、嚴密蒙御裁許、天下泰平聖運長久御祈禱、彌抽丹誠矣、仍注進如件、以解、

文明九年十月日

禰宜從三位荒木田神主氏經 十八 同前

○豐受大神宮神主等、造替遷宮ヲ請フコト、便宜左ニ合致ス、

〔內宮引付〕

造替遲ル
ハニ依リ
天下亂ル

見來問注之
一 豐受太神宮神主

注進可早經次第上御沙汰奏、外宮造替遷宮、不日被遂行其節子細狀、

右外宮御假殿經多年星霜損失事、不及是非子細也、然御正殿遷宮御假殿之年序、令先度注進畢、既御敵沒落、天下靜謐之併當宮造宮之時節到來、神宮披喜悅之眉處也、特任御立願之旨、早速被成行造替遷宮者、彌聖運長久武國家安全御祈禱不可過之、仍注進言上如件、以解、

文明九年十二月日

禰宜權禰宜歟正六位上度會神主康高

禰宜正四位下度會神主常香

五 朝敦

康久

從五位上 常貫

清久

常忠

貞知

具久

文明九年十月是月

八〇七

是久
貞守

伊勢木造親方、其部下ノ爲ニ殺サル、弟政宗嗣グ、

〔歷名土代〕 從五位上源親方 (文明) 同九十二、月日卒、

〔尋尊大僧正記〕 八 十二月廿四日、

一北畠親方、於伊勢國被致害、披官人沙汰云々、

〔尊卑分脈〕 北畠 村上源氏上

教親

親方 侍從、從五下、橫死、

政宗 從三、參木、

〔北畠系圖〕

教親 參議、右中將、權

親方 侍從、從五下、

政宗 參議、右中

〔歷名土代〕 從五位下源親方 (舊正) 同六四十六、

十一月 乙丑 朔 盡

三日、卯、御不豫、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十一月三日、夕々々不とより御むし、(丹波重長) ちけあ

うめす、御みやくとらせらるゝ、悉しやう院くすりせ、りのふとよ入る

いらるゝ、

四日、なふの御むつうしく、御し侍まりあり、石んせん寺とのある、くせし

兩人ゐいる、

五日、ひる程より御きんしてめてさし、御くせし兩人あうらゐいる、

八日、なふ御くせしゐいる、御とやくよたよし申めてさし、

〔親長卿記〕 八 十一月五日、晴、參内、自一昨日御不例之由有共聞之故也、自

昨夕御減氣也、祇候尤神妙之由有仰暫可祇候云々、及晚有供御、元長同可參

之由有仰、遣召了、事終入夜退出、

八日、晴、參内、番也、御不例、悉無御本復云々、今日冬至也、

久我通博、五條爲親ト山城東久世莊ノ地ヲ争フ、是日、幕府、爲親ニ安堵ノ

勅裁ヲ賜ハラシコトヲ請フ、

文明九年十一月三日

細川政元
廣橋兼顯
ニ使ヲ遣
ス
爲親知行
ス

高山某
所爲ト傳
フ

古市胤榮
越智岸田
等ト相談
番條郡山
ヲ攻ム
胤榮番條
ヲ援ク

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十一月三日、丁卯晴、細川有使者、内藤藏人、藥師、掃部、助、兩人也。

五條知行東久世庄、(通傳)久我相論事、五條家當知行之上者、先任當知行、被仰付樣可申沙汰由也、何樣可致奏聞由返答、

六日、庚午晴、午天、(西坊城)大藏卿顯長卿入來、五條少納言與久我前右府相論東久世事條々有談合之旨、自久我前右府同有使者、同事也、

十日、甲戌晴、大府卿入來、五條少納言知行分西岡東久世庄事被相談、大和高山ニ馬借起リ、所々ニ放火ス、

〔尋尊大僧正記〕

八 十一月三日、

一 近日、北郷馬借蜂起、夜々放火、以外次第也云々、雜說高山所爲歟云々、

四日、小雨

一 馬借以外也、(風榮)古市方より筑前守在南、越智岸田申合云々、

八日、曉雨

一 昨日於藥師寺唐院馬借事成敗寂中、就此事自番條押寄郡山辰巳之所、及合戰畢云々、馬借防禦之、古市自奈良馳向于彼在所云々、番條方也、

〔大乘院日記目錄〕

三 十一月五日、高山邊戌亥郷馬借蜂起、日々夜々放火、

以外儀也、(六脱方)仍方學侶同心寺住衆、古市以下、稱名寺、北方□□出陣、仍無殊儀、五
六日陣也、

七日、辛未義尙、方忌ヲ小河第二避ク、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏 十一月七日、辛未晴、入夜時雨降、及晚宰相中將殿渡御小河殿、今夜御逗留、御方違故也、

十日、甲戌是ヨリ先、第二皇子尊敦親王御不例、是日、癒工給フ、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十一月十日、なさより御を井ある、二宮の御方御ぬるけの、ち御ゆるけ御さゝあり、うさくの御さゝり月ある、庭田入さう御さるゝいらゝゝ、

十五日、なけさよ二宮の御さゝの御やく代五百疋つういさるゝ、
興福寺、神供用段錢ヲ、奈良ニ課ス、

〔大乘院日記目錄〕 三 十一月十日、神供用奈良反段、

〔尋尊大僧正記〕 八 十一月十一日、

一 昨日自唐院申給、御神供用奈良反錢、公文衆下知云々、新見神殿事申入之、御返事ニハ、新見事得其意云々、神殿ハ非奈良田故也、但自岩井川北分成

之、奈良田舎之堺限此川故也、

〔尋尊大僧正記〕

八 十月十七日、

一奈良中檢斷事、古市一人致其沙汰者可請取云々、然而豐田高山以下又成望云々、仍諸篇儀不一定、萬一除古市而餘人致檢斷者、奈良中事者、每事不可有正體事也、返々世上様あふなし無心元、

十一月廿日、

一自衆中、奈良中料足懸之云々、相撲錢云々、

十一日、乙亥西軍諸將大内政弘等、各其分國ニ歸ル、土岐成賴、畠山義統等、發途ニ際シ、其第ヲ火キ、仙洞御所ニ條邸等類燒ス、足利義視、成賴ニ賴リ美濃ニ下ル、是ニ至リテ、應仁以來京都ノ亂略平グ、

〔御湯との、上乃日記〕

一 十一月十一日、ふよひてきともおちうせ、ちん

ん、いら井ともびる、(政弘)ちうちうし、いこあさへ、いるよしきこゆる、○水牛コト、四年、年未雜載ニ見ユ、院の御所もる井火のよしきこしめして、おとろき御不しめす、御るすの御所無爲りてめあさし、宰相中將殿より、てれちんの日井さう御きもつふしのよし御申あり、

奈良中檢斷

相撲錢

政弘水牛進獻

仙洞御所

火ク

裏無爲

義尙天氣

ヲ奉伺ス

水牛御覽

義統其第ヲ火ク

戰亂十一ヶ年、土御門御所無事

甘露寺親見、長等燒跡、親見、裏拜見

二條邸燒ク

十七日、ずおきうるいりて御らんせらふ、まんきう寺殿ならしませ、日んろしの御うさより、御すりのふさよきぬりつき此ま、入るるい、

廿二日、す殿、あういし、はち御うとの御所ニるいらる、

〔親長卿記〕

八 十一月十一日、晴、入夜有召參内、○中爰亥剋許敵陣有火事、

驚見之處、畠山修理大夫自燒云々、自去九月比大内左京大夫政弘、去月任左京大夫、紋四品云々、○政弘、從四位下ニ紋セラル、コト、十月三日ノ條ニ見ユ、可參御方之由頻申之、有御間、今夜已俄引退、仍土岐美濃守、畠山修理大夫等令自燒、全没落、仍諸陣皆同炎上、□□物念已及十一ヶ年、洛中自敵並陣隔堀之處、適及如此之儀、珍重々々、舊院御所炎上、禁裏御留守御所相殘、珍重々々、

十二日、晴、自早旦諸人物念、罷敵陣燒跡亂妨云々、見物之輩經廻之由風聞之間、罷出見物之、内裏之外悉燒失、但禁裏有名無實也、不及巨細記錄、即參内、御留守御所拜見之由粗言上了、

十三日、晴、人々招引之間、又見廻敵陣之跡、予舊跡地見廻了、

〔實隆公記〕

四 十一月十一日、乙亥晴、早旦浴湯、戌刻計敵陣有回祿、今日大

内多々、水牛今夜進此方云々、政弘朝臣以下陣拂云々、子刻許參内、大略終夜炎上、故院仙洞二條

亭等燒失云々、土御門皇居無爲無事、先以珍重々々、土岐以下悉沒落云々、今出川殿同御沒落云々、

十七日、辛巳、霽、今日於入江殿、大内牛一見之、

廿二日、丙戌、晴、略○中今日土御門皇居可一覽之由、各被誘引之間、罷向歷覽之、

所々荒廢過法、諷黍離之篇、空傷吟心者也、

仙洞又作灰燼、隨身所一字相殘計也、嘆嗟無極而已、歸路於讚岐陣地藏堂有

盃酌、大納言典侍、勾當内侍局等、源丞相、兵部卿、戶部卿、正親町、四辻兩相公羽

林、下官、藏人將監等引率、及歌舞之興、秉松明各歸宅、

〔兼顯卿記〕○岩崎文 庫所藏 十一月十一日、乙亥、晴、大内水牛入來當陣、及黄昏引

進上小河殿、諸人□動門前成市者也、此間大内退散、仍敵陣之輩、土岐、畠山左

衛門佐以下悉以沒落、今出河前大納言殿同御沒落、仍諸陣或自燒、或放火、悉

以燒拂了、天下泰平之基、洛中已靜謐之儀、所致聖運武運也、尤可悅々々、珍重

々々、

〔長興宿禰記〕上 十一月十一日、敵陣所々燒亡、二條殿御所燒失云々、當陣

足輕等發向放火云々、

内裏ノ廢
仙洞御所ノ
隨身所ノ
ミ殘ル

水牛ヲ義
政ノ許ニ
牽ク

義視沒落

東陣足輕
等西陣放
火

義視美濃
ニ下ル

姉小路神
明社燒ク

正親町三
條公射聖
護院道興
等

山城下狛
路開ク

十二日、今夜敵陣群勢悉沒落、大内左京大夫降參、今夜令下向西國、仍今出川
(義親) 大納言殿室町殿 令落下美濃國給、土岐美濃守同道申云々、畠山左衛門佐(義能)
守分國落下、仍所□陣所放火燒失、仙洞同燒亡、隨身所 内裏不燒失無爲、

〔歷代殘闕日記〕七十八 重胤記 十一月十一日、

一大内方より水牛を上、やうて土岐陣屋より火出し、(左平司シ) 右衛門佐殿陣屋火出

了、次大内陣屋火事、畠山大夫殿陣屋皆々燒候也、おちられ候也、

一下京放火、姉小路神明、二條殿今日燒候也、

〔歷代殘闕日記〕八十四 見開雜記 十一月十一日、今出川殿、(公時) 三條殿、(聖護院) 土岐、大

内、畠山左衛門佐下國了、

〔東寺長者補任〕五 同(文明)九年 西十一月十一日、大内介、畠山右衛門佐殿、土揆

同在國也、依之京中目出度人々申之、

〔大乘院日記目錄〕三 十一月十日、水牛進上東陣云々、二條殿燒失、仙洞燒

失了、各足輕沙汰也、

十一月、大内歸國、下狛以下開之、

〔尋尊大僧正記〕

八 十月晦日、

一色義直
鞍馬退

一京都一色ハ鞍馬邊ニ近日引退歟之由雜說也、且如何、

十一月八日、曉雨

杉次郎左
衛門下國
大北城難
義

一松殿難波自京都下向、大内左京大夫歸國事必定々々、四五日比女中先以下向云々、就其土岐又可在國云々、同女中衆下向、西方以外作法也、今出川殿御進退者、如今者御生涯必定々々云々、若君兩所姫君兩所御座云々、京中雜說無是非、下狛大將杉次郎左衛門可下向之間、大北城古市持分大將井上九郎也、迷惑難義之由申云々、

十二日、

大内屬城
自燒沒落
義視叡山
ニ赴クト
ノ説

一下狛以下、山城之大内方、今朝自燒沒落了、仍大北城衆古市ニ引退云々、昨日大内歸國歟云々、今出川前大納言殿ハ、山門ニ沒落云々、土岐方与公方合戰在之云々、所詮路次不通之間、不聞實否者也、

十四日、

成頼東軍
ト汁谷ニ
戰フ
細川政元

一松林院より申給、大内ハ十一日下向、同土岐ハシル谷ニテ合戰在之、七十人計打死云々、今出川殿ハ當國高山ニ御座云々、細川之安富猛勢よて幡

ノ兵播磨
室津ニ著
ス

州室津ニ付之由申云々、筒井ハ四五日之内ニ奈良ニ可入云々、

十八日、

一去十日仙洞御所、二條家門爲足輕燒失了、内裏ハ侍所赤松手馳向不燒之云々、水牛十日夜公方ニ進之、其夜大内土岐下國云々、

廿日、

一京都事色々雜說等在之、珍事々々、

廿八日、

一略○上 今日落人方足輕少々、今在家邊寄來、無殊儀、比興次第也、

廿九日、

一御敵十一日退散、珍重々々、

十二月二日、小雨

一昨日自殿(九條政基)下御書到來、氏院右官別當職事、難波常弘不可有子細、此旨以中御門中納言可被申禪問云々、殿下此間東坂本邊ニ御座云々、近日敵陣退散之間、九條邊ニ御座云々、於御所者大亂以前より破損成廣野了、不(毘)毘大亂者也、

九條政基
東坂本ニ
居ル
九條ニ徙
ル

赤松政則
内裏ヲ守
ル
災ヲ免

燒失所々
諸家

諸門跡諸
寺燒失

戰亂ハ義
政ノ近臣
等ガ路ニ
ヨリ政事
ヲ一ニシ
タルニ
因ル

文明九年十一月十一日

八一八

抑今度大亂中燒拂御所之事、陽明御所、鷹司御所、一條御所、二條御所、以上殿下、西園寺、菊亭、洞院、德大寺、三條兩三所、花山院、大炊御門、以上青御久我、日野一門、數輩、廣橋等、四條、鷲尾等一門、勸修寺、坊城等一門、山階、以上松木以下、持明院等一門、平松、楊梅等、坊城、五條以下、菅家一門、橘家一門、和氣、丹家、賀茂、安部、以上西洞院以下、平氏一門、江家、仙洞御所、伏見殿御所、常葉井殿御所、以上糺寺宮以下、竹園所々、諸姬宮御在所、

諸門跡ニハ、仁和寺御室、相應院、大覺寺、上乘院、真光院以下、廣澤流院々坊々、剩本寺諸堂悉以失了、三寶院、地藏院、報恩院、理性院以下、小野流院々坊々、剩本寺諸堂悉以失了、勸修寺同前、妙法院、青蓮院、梶井、淨土寺、毗沙門堂、上乘院、岡崎以下、山門三門跡門徒等坊、聖護院、如意寺、花頂實相院、若王寺、住心院以下、寺門流諸院諸坊、

清水寺、六波御清間寺、東北院、南禪寺、天龍寺、相國寺以下、禪院僧尼寺々、凡京中、嵯峨、梅津、桂等、西山、東山、北山爲一所無燒殘所者也、希有之天魔之所行也、初所題目子細更以無之、只將軍准三后之近臣共、以當座之折紙禮物、毎々申沙汰故、我々々々ト申沙汰故、昨日成敗ハ今日被改之、今朝御下知

ハ今夕又相替故、諸人無安堵思云々、此等之面々東西ニ相分、今日ハ成西方、明日ハ可成東方之由云々、能々子細猶相尋之、於題目者更以無之、御成敗之不届故也、

十三日、

一石左衛門宗弘、自三乃國昨夜罷歸、（宿務院）持是院返事到來、巨細令申子細在之、今出川殿ハ赤野部ニ御座、東大寺寺務領也、

〔多聞院日記〕一 文明十年二月廿九日、於東室五師會合在之子細者、天下之事雖非和談之儀、先以京都西方之事令退散、今出川殿者則被落御淡州邊、（邊）御敵沒落、東方之大慶也、（略）下

〔宗長手記〕大永七年二月十二日、十三日七條わたりの合戰、（略）中又應仁年中、諸國守御敵となり、京中三分二大堀をかまへ、東西十町、其半に大内左京大夫御敵にくみし上洛、終は降參有御免下國、されば國々の守も散々に下、さてしばらく靜謐、（略）下

〔松蔭吟稿〕丁酉十一月十一日、聞賊兵已退、喜而有作、
賊陣仆旗如瓦崩、官軍喜氣薄雲層、南來北去聞人說、海內昇平漢中興、

文明九年十一月十一日

八一九

義視東大
寺領美濃
苗部ニ居
ル

和解セズ
シテ退散

京中三分
ナレ陣地ト

景趣解陣
ヲ詠ズ

〔點雲詩稿〕

四 試筆 文明丁酉

白頭要見太平時，十載青春亂裏移。臘雪定應農事早，好銷兵器作鋤犁。

〔松蔭吟稿〕

酬業叔詩 并序

業叔余同志也，才識全而詩禪熟，信可貴矣。頃者自但入洛，而訪余龍阜南澗，々々之陰無塵亭下，清泉茂樹冥藏之景一眇之頃，而頗有稱意之色，輒賦小詩見示，蓋詩之意，下築未久而殆風烟栖老者，且恠之且美之，其語出乎自然，思有餘焉。余於是誇說曰：某江人也，初從駕篠驂之日，出則吸湖光，食山秀，入則風帆沙鳥，雨奇晴好，几案間之物，雖曰吳儂解水，亦豈多讓耶？絲是思之，泉石之爲膏肓，則某所稟者也。爰泊中年，移居靈岩，蕉堅祖甘棠之地，官娃宮畔，水澗雲多，如坐趙渭南佳語中，其北有若王，南有永觀，櫻花開而映乎春山，楓葉墜而漂秋水，四時幽賞，目相謀者不一矣。斯復非益吾烟霞痼疾乎？應仁丁亥，賊之兵起于洛，而龍阜諸院悉罹狼烟，一霎時間，變麋鹿場，向之所目謀曠蕩而靡一存焉。勝地不常，盛筵難再，其斯之謂乎？遂退居乎江之舊澗，償江山債有年矣，不圖迨丁酉歲，逢得兩京收復，固知天之未喪矣，故輦下東西群衲，各願歸舊業，如鳥之戀本枝，可怡乎哉！余就今之南澗，借隙地一區，以營堵室，且復借山借水借烟雲，花時借

各地ニ在
リシ僧徒
ム歸京ヲ望

宗純亂中
ノ慘狀ヲ
詠ズ

花雪時借雪，以爲我有，々々者咸造物者之無盡藏也。然則今我所借者猶是伯夷之隘乎？管仲之小乎？不如借天下之勝，略○下

〔狂雲集〕

詩 文明年中亂

咸陽一火眼前原，金殿幾多珠玉門。廢址日墮似秋興，春風桃李易黃昏。士卒重論蓋代功，從前汗馬屢英雄。万方一槩角聲徹，愁淚斷腸吾道窮。

〔和漢合符〕

十 文明九丁酉十一月十一日，西軍潰矣，今出川殿走濃州，々々大

守土岐益賴爲後殿，大內走宇治，遂赴筑紫，洛中皆入東軍之手，自丁亥至丁酉一十一年，而洛中已歸一，雖然諸州未降，四海之安危未及歸華山之馬。

〔皇年代略記〕

文明九年十一月十一日，大內左京大夫政弘下向西國，畠山左

衛門佐，土岐美濃守等，燒陣座各沒落分國，洛中化荒野，○皇年代私記同

〔密宗年表〕

文明九年十一月，山名細川之援兵，悉離京歸己之分國，大納言義

躬公趣美濃，於是洛中靜謐，應仁年中兩陣相挑以來，至此十一年而退京師，從此天下爲領國領郡割據之形勢，將軍家武威大衰，仍天下不服朝命，諸山寺社各失衣食之助，案上方門跡，院家兼職，東寺長者竝高野座主事，自延喜十九年，大抵相續到此節，自然成檢校之有，上方衆不克綺之，却阿于檢校乞饒寒之助

檢校ノ勢

文明九年十一月十一日

成山史

〔武家年代記〕

裏書

同九年九廿二

京都御敵大名没落大内降參土岐美濃守成

賴、畠山左衛門佐義統等也

〔如是院年代記〕

西丁九

天下大亂及當年十一年了太平也霜月十一二日御敵

下國帳、曆仁以來年代記等異事ナシ、

十

文明八年丙申冬十一月、京都者東西軍旅分散而引退其

〔歷代鎮西志〕

十

國、自應仁至茲春秋十一年、國弊民勞、爾後諸國之侯伯各蟠其分國、而不能朝

天皇事相將云々、

九年丁酉、大内政弘下向于山口、

〔黑岡帶刀所藏文書〕

今度下向、併世上無爲之基神妙候、既幡州室津邊到著之由風聞、可然候、早々
令下國、都鄙彌勵忠節者尤可感悅也、

十一月十五日

御判

大内左京大夫とのへ

〔陶弘護肖像贊〕

防○周

泉福院殿前尾州太守建忠孝勳禪定門肖像

義政弘
ノ下國ヲ
褒ス
政弘播磨
室津ニ到
ル

陶弘護
弘ヲ楊井
津ニ迎フ
政弘富
田ノ第ニ
饗ス

山名政豐
ノ歸國

初ハ西軍
ノ勝

尾州刺史多多良弘護者防之著族也、○中丁酉之冬、天下狼烟靖、而太守歸國

矣、弘護迎于楊井津、且宴于富田私宅、太守曰、吾國全而安者、寔弘護之力也、遂
託魚水之深期、定金蘭之密契、盟以兄弟、

〔但馬山名家譜〕

三

政豐彈正少弼、從五位下、左衛門佐、從四位下、右衛門督、正四位下、○中略

同九年丁酉

十一月、山名細川兩家、徒黨せし諸大將、京都を立て、各本國ふかへる、今
出川義視卿父子をハ、土岐美濃守成頼供奉して、濃州よかへる、時ハ政豊家
人等に軍兵を差添へて、義視卿を土岐の館に送て、後ハ、政豊も家人被官
をえしめ、軍勢等を引具し、領國に歸る、

○畠山義就、河内ニ下ルコト、九月二十二日ノ條ニ、義視、美濃ヨリ京都
ニ歸ルコト、延徳元年四月十四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔重編應仁記〕

後記上

應仁亂後諸將京都退散事

○上 抑應仁元年ヨリ今茲文明九年迄、十一年ノ亂中ニ、主上ハ公方家ト御
一所ニマシタヤ、武士ハ東西ノ二陣ニ分レ、每度ノ合戰ニ悉精力屈シ、數年
ノ對陣ニ財用皆盡果タリ、初メハ山名方勝利ヲ得ル事多カリシニ、斯波義
文明九年十一月十一日

西軍ノ衰

六角高頼
西軍ノ首
領タリ

文明九年十一月十一日

八二四

廉土岐一色等分國ニ騷亂出來テ、各下國セシメシ後、越前ノ朝倉能州ノ畠山、周防ノ大内介等、皆公方家ノ味方ト成リ、細川方ヘ加リケレバ、西陣日微々ナレ共、流石名將勇士等ニテ、故宗全入道ノ跡ヲ守リ、數年支ヘテ居マリシ處ニ、西陣宗徒ト頼レケル畠山右衛門佐義就、今年没落シタリケリ、然レバ山名氏族ノ外、他家ノ大名ニハ、宗全入道ノ掣六角四郎高頼只一人、西陣ノ味方トシテ、京都ニ陣ヲ張居ケレバ、山名方ノ人々、永ク在京叶難ク、士卒多分ハ拔々ニ落下リ、残り留ル者共モ、日日危キヲ蹈テ、退散ノ時節ヲ待ツ處ニ、同キ十一月十一日、誠ノ天災カ、又放火カ、或ハ自燒ヤシタリケン、西陣悉ク燒亡ス、是ヲ時節トシタリケル歟、同十二日ノ夜ニ入テ、山名一家ノ輩同縁者ノ六角等、落殘リタル諸軍勢、悉ク陣ヲ拂テ、皆分國ヘ落行ケレバ、今ハ洛中ノ兵亂盡果テ、京都自然ト靜謐ス、誠ニ時節到來哉トテ、貴賤悅限無シ、主上モ内裏ヘ還幸成テ、○土御門殿還幸ノコト、十一月七日ノ條ニ見ユ、一目出度事トハ賀シケレ共、是ヨリ天下ノ大名小名公儀在京ヲ不相勸、諸國ノ騷動、諸所ノ戰亂、凡ソ日本六十餘州前代未聞ノ戰國ト成ケレバ、諸人一日モ安堵ノ思ヲナス者無シ、公方家深ク歎カセ給ヒ、餘ノ哀ニ御歌有リ、

義政ノ述
懷

愚ニモ尙治レト思フ哉、角亂レタル世ヲハ厭ハデ

〔備前文明亂記〕

土岐佐々木ハ、今出川殿ヲ相具シ奉リ、美濃近江ニ下向シ、

大内新介ハ山名修理大夫、河野伊豫守ヲ伴ヒ西國ニ下、畠山兩人河内國ニ馳下、國靜トツ成ニケル、帝都ハ無爲ニ成テケリ、然リト云ヘ、東八ヶ國ハ、重代上杉主從ノ合戰廿餘ヶ年也、筑紫ハ少貳ト大内カ諍、北ハ隱岐、出雲、因幡、伯耆、南ハ四國、中國、五畿内ノ合戰共、何飯伏スヘキトモ見ヘサリケリ、
十二日、丙子義政、戰亂鎮定ニ依リ、廷臣ヲシテ、土御門内裏ニ宿セシメ、將士ヲシテ之ヲ衛ラシメ、コトヲ奏シ、勸修寺教秀、甘露寺親長等ヲシテ、御物ヲ檢セシム、

〔御湯との、上乃日記〕

十一月十一日、御るすの御所よ、こよひよりけ

いこあるよしきこゆる、

十二日、むろまち殿より無爲のめてささ、(書後巻)右大辨御つり并よて御申、うれよつきて、御るすの御所よ、さいこさいめ井ともよ、御湯をつららふ、御てうつららの事よ、はよて、くけの人々あくるへきよし、御申、御湯をつけらふ、とも、あらくとしこうをへき事あるましきふより、(おん)ちんいさせらるへ

大名ヲシ
テ警固セ
シム
義政公卿
ヲシテ候
セシメ
コトヲ奏
ス

文明九年十一月十二日

八二五

立樞戸ナ

幕府大内
政弘ト約
シテ土御
門殿ヲ燒
カシメズ

公卿參仕
スル能ハ
ズル能ハ
物品ヲ檢
知セシム

義政再宿
公卿ノ宿
仕ヲ請フ

文明九年十一月十二日

八二六

き、と、一ううふくハカリヨリ、その分よて兩てん
そう庭田、うんろしつろえさる、大うさハ無爲なれとも、さてくるとあき
よし申さる、きとくよ無爲、めてとせえうく、より申さる、松木よりク
んゐいる、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十一月十二日、丙子、晴、早旦、依召參小河殿御臺御方

被仰下云、昨夜之儀、天下泰平之初、尤珍重候、殊土御門皇居無爲之儀、自最初
被仰合大内間、不及燒失條々、一段之大慶也、叡心定而前候歟、仍内裏驚固
事、被仰付諸大名者也、雖然堂上輩兩三人可被召置之由、參禁裏可申入由奉
仰、參内申入民部卿處、當時堂上輩參祇之事、難叶間被檢知、被渡驚固武士候
者、可然由御申也、仍勸修寺大納言、源大納言、予三人、依室町殿之仰、爲檢知參
土御門殿、自禁裏按察卿同被相副、大外記、前官務以下同參祇、御帳以下少々
令檢知及晚歸參室町殿、申入事之由、後歸家、同參内、
十三日、丁丑、晴、自室町殿、爲御使布施彈正大夫、飯尾大和守兩人入來、内裏御
留守事、重而警固武士申請之間、可被召置由、御執奏之分、可申入由也、此段昨
日已事舊了、定而同篇之一、勸答勿論也、雖然致奏聞、重而可申入由申入者也、

諸殿ヲ閉
鎖シ雜人
ノ出入ヲ
禁ズ

經費ナキ
ハ依リ行
ハレズ

檢知ノ目
録ヲ武士
ニ渡ス

仍參内奏聞之處、昨日之勸答同篇也、以使者申遣兩奉行許者也、參小河殿小
時歸家、

十一月十五日、己卯、晴、土御門殿、紫宸殿、以下殿々雜人出入不可然間、被遣修
理職、被閉殿々間、大外記師富朝臣、前官務長興宿禰、官務雅久宿禰、予、青侍童
形、勸修寺青侍等、各召進土御門殿者也、

〔親長卿記〕

八

十一月十二日、晴、○中次今日自武家内裏相殘之間、被仰武

士、被警固、同公家之輩可祇候之由、可被仰付之由、被申間、勸修寺大納言、源大
納言、雅行、予等可談合之由、被仰、今朝雖有召、他行之由、申之間、於時宜者更以
難被仰公家之輩、其謂者及爲計會之間、此間番等猶以申難治之由、况可參御
留守御所事、中々不可叶之由、可被申之由、勸答云々、又重然者、被立檢使、御物
等可被色目云々、勸修寺大納言、源大納言、予、頭辨等被仰定、可存知云々、不知
定、申尅許可參内之由、自頭辨許有使、即參内、下姿、葉室前大納言示云、勸修寺
大納言已下參御留守者可參云々、即走向之處、已越堀人々參入、一人難治雖
然、□難參仕、少々相殘御物等、□紫宸殿之内、取目錄、師富朝臣書之、渡武士了、昨朝
自拜見之時、障子已下紛失了、存内之事歟、

文明九年十一月十二日

八二七

文明九年十一月十四日

八二八

十四日、寅興福寺維摩會、經費ナキニ依リ、行ハレズ、

〔尋尊大僧正記〕

七

四月廿七日、雨下、

維摩會講師

一維摩會講師事、空覺得業可沙汰條、大略下必定云々、松林院僧正被相語、仍内々他寺探題并權別當出仕用裝束共借用由仰遣之、一乘院殿辻子坊等則領狀、西南院ハ先日仰置之了、得其意云々、

廿八日、

一太政大臣得業申給、維摩會講師事、可有勲仕云々、就其先年東林院遂講之時、蒙仰候從僧一人力者二人事可申請云々、其餘自然儀可蒙御扶持云々、返事珍重候、何も得其意之由仰了、

五月十四日、

圓堂五蔭也

一維摩會寺分豎義事、慶英法師、以寺務奉行訓英法師所望申、不可有子細旨被領狀畢、圓堂一鴈定寛法師、以出世奉行淳快得業、自兼日致所望了、但不能披露之間、寺家ニハ不存知、而慶英ニ領狀畢、定寛申赴者、既以出世奉行申入上者、理運由云々、淳快得業モ居出世奉行上者、不披露段者さる様ニ候へ共、以内々申入方、御領狀不得其意云々、慶英方ハ自元申定上者不能

寺分豎義

是非云々、寺務難義間、此子細兩方儀且如何、可申意見由、被披露學侶集會、色々及沙汰歟、所詮自兼日雖申入、不能披露上者、定寛之不運也、慶英可遂業旨一決、云定寛云淳快、失面目云々、今一口豎義ハ、成業六鴈高專得業所望之間、自元被治定畢云々、高專ハ先年之研學得請躰也、

六月十四日、

一他寺探題長者宣到來先日申入故也、兩門ハ不及寺務之舉、直ニ申入之、又舉事取進事も有之、隨意也、

應永十七年分長者宣

應永十七年分維摩會、他寺探題可令奉仕給者、長者宣如此、仍言上如件、

政顯誠恐謹言、

六月一日

右中辨政顯 奉

進上 大乘院法印大僧都御房 政所

〔大乘院寺社雜事記〕

六十

七月六日、雨下、

一松林院僧正申維摩會東大寺精義役事、近來兩門豎義之外者、不渡僧綱精義且如何旨談合、於先例者、及度々可爲彼寺之所存由仰、引勘三會定一之間、數々度例在之、則此子細申遣藏照坊方云々、

東大寺精義役

文明九年十一月十四日

八二九

文明九年十一月十四日

八三〇

心加行

廿六日、

一當講空覺得業、自今日心加行始之、大會式日通、云當講云寺家、被加下知云々、

八月六日、雨下、

一他寺探題方權僧正御房裝束事、職事注進分、

香法服 三丈五尺、靈タテワキ、師香分十七貫五百、二百五切、香甲袈六尺三寸、文ホタン唐草、黃地、十貫七百五十、二百五表袴丸白、藤一丈五尺、三貫、

二丈六尺、四寸文同白、二百香綾ケサ文同、浮一丈、三貫切、三百

合三十四貫二百五十文云々、

七日、雨下、

一初夜研學乘英加行始之、

廿日、

一去十八日より第二夜研學加行始之、夜前後夜入堂云々、

九月二日、

一自當講使者來、探題方出立事、可爲式日之由、先日蒙仰畏入候、可爲如何哉

他寺探題方權僧正裝束

初夜加行

第二夜加行

段錢到來セザルニ依リ式日ヲ定ムルヲ得ズ

世上物念寺領反錢集ラズ

云々、返事、其事式日分堅諸庄以下加下知候處、近日就世上儀、未運上候、仍御裝束以下一向不及手懸之由、念比ニ仰付之了、重而使者申、假令何比可有御成立哉云々、何共不及覺悟、更以不可有等閑題目也、此子細可申云々、

廿二日、地振、至土用今日、

一大會事、反錢等未到來之間、式一日事者不可得也、其子細申遣當講方畢、十一月十日より分、先以其覺悟也、若不叶子細在之者、其時可令申子細旨仰了、反錢可依到來事也、

廿三日、雨下、

一如此世上物念、五十日卅日ニ不可有靜謐事也、隨而維摩會始行事、今分ハ不可成立者也、其故ハ當門跡領反錢不可成之條、勿論事也、當講以下不便事也、

〔尋尊大僧正記〕

八 十月朔日、雨下、

一權中納言光臨、維摩會事被尋之間、定而當年中ニハ可有旨仰之了、加任之、豎者方相尋、大會不定之間、當講不及正加行之間、豎者方未定之由申之、巨細之書狀在之、申所尤歎、但可爲如何哉、寺分加任不始加行之間、東大寺豎

文明九年十一月十四日

八三一

文明九年十一月十四日

八三二

心加行第一夜研學
第二夜研學

者又不始加行云々、當講ハ自七月廿六日心加行始之、初夜研學ハ自八月七日始之、第二夜研學ハ同十八日始之、寺分加任ハ殊更今度色々學侶以下及其沙汰相論事也、予不始加行條不得其意者也、

十八日、

一自松林院申給、慶英明後日可得請云々、東大寺豎者木津之舍弟也沒落之間、次座又近日進退不可叶躰之間、東大寺分不可有云々、此旨當講書狀ニ見了、猶次座可有遂業歟、慈照房ニ可尋遣由ヲ返事ニ松林院ニ仰了、雖無所作、何ニ可有出仕由仰了、大方無所作探題ハ無念事也、無力次第也、

十九日、雨下、

精義者

一東大寺別當書狀到來、豎者ハ木津舍弟也、隱居了、其外ハ可遂業躰無之、精義者兩人ハ西室僧正公惠歸寺之間、各公事躰也、仍辭精義役隱居云々、云豎者云精義、各違亂由申、珍事、

廿日、

會米到來
セズ

一當講内々申給、大會事、丁衆ニ申合、會米以下、於于今者不可成之、當講方每事相違事出來、滿願寺仲川庄以下相違無力次第也、珍事云々、重而仰遣之、

大安寺分
得請加行

誠ニ當講儀不可成子細在之者早々有無ヲ可承也、門跡反錢以下事、近日出頭之面々ニ申合可催促也、万一其ニ不事行者、無益之事ヲ可仰條、不可然之由也、早々一途可承云々、其返事得意、學侶ニ披露可申合、重返事可申云々、

一大安寺分得請慶英參申、今日より加行云々、講師出立大會之有無ハ不知云々、

十一月十二日、

炬頭

一炬頭清賢法橋致其沙汰、黒木一荷六束、瓶子一、田樂唐布一鉢、白米汁等、

十三日、

粥頭

一粥頭專實寺主勸之、

十四日、

大供始行

一今日早朝大供始行、供目代實胤也、予并新僧正分各經二卷、下文三石宛也、令轉讀於經者、返送供目代坊了、此大亂中供料一向無之、近江國鯉江庄違亂故也、

十六日、雨下、

文明九年十一月十四日

八三三

文明九年十一月十四日

- 一 粥頭繼舜法橋懃之
- 一 十七日、雨下、
- 一 粥頭成舜勾當懃之
- 一 十九日、
- 一 粥頭柴舜寺主懃之
- 一 廿日、
- 一 粥頭顯秀懃之
- 一 廿一日、
- 一 粥頭專觀懃之
- 一 廿二日、
- 一 粥頭良祐懃之
- 一 廿三日、
- 一 粥頭觀舜
- 一 廿五日、夜雨下、
- 一 粥頭專祐懃之

大供

諸寺用錢
課役

- 廿八日、
- 一 粥頭成實懃之、禪閣入御
- 十二月二日、小雨下、
- 一 粥頭泰弘寺
- 三日、雨下、
- 一 粥頭光秀懃之、
- 十日、小雪、東山在、大寒也、
- 一 粥頭隨心院殿
- 十五日、
- 一 粥頭東林院懃之

〔大乘院日記目錄〕

三 十月廿日、大安寺分得請慶英則加行始之云々、

十一月十四日、大供始行之、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 八月三日、

一 他寺探題方諸山用錢事、仰付繼舜法橋今日可加下知旨仰了、康正二年予

文明九年十一月十四日

文明九年十一月十四日

八三六

奉仕例也

四日

一他寺探題方諸庄反錢百文宛如例今日加下知來廿五日以前可沙汰旨仰付

之了、奉行柴舜、泰弘兩人、

十三日

一探題方御用錢五十貫分、仰長谷寺公文參申、奉行清賢法橋

廿日

一昨日信貴山兩座參申、兩座分ニ八十貫用錢仰之、可披露云々、

一內山年預參申、色々歎申、如康正二年例、每事可沙汰之由仰了、同昨日仰了、

廿七日

一橘寺僧來、探題方用錢二千疋仰付之了、

九月三日

一學侶より書狀到來、返事以口狀仰承候、又得御上候、如此以口狀仰事每度儀也、其故ハ必シモ諸談義田事、非可闇事也、仍以口狀仰計也、於反錢者除之條隨分事也、奈良反錢事、自唐院案内之時ハ、必御返事有之、新免事ハ不

段錢下知

長谷寺五十貫

信貴山兩座八十貫

橘寺二千疋

諸談義屋下地分

菩提山報恩院

可有子細、於神殿者、非奈良田之由仰、是又每度儀也、

當年大會御探題反錢被懸催候哉、仍諸談義屋下地分事、任先例御故實可目出由、可有洩御披露旨、學侶集會評定候也、恐々謹言、

九月三日

供目代實胤

相模寺主御房

四日

一反錢事、歎沙汰人共烈參、奉行中々不及披露、勾田、曾我部、田井、長屋、九條上總六ヶ所分也、

十日

一井山報恩院來見參、反錢事畏入云々、世上迷惑云々、

十一日

一就反錢事、十市豐田方仰遣之、成身院方同、

廿二日、地振、至土用、今日

一內山禪德參申、御用錢事色々歎申入之、如康正二年例、可進之旨仰付了、先日學衆參申、此子細仰之了、依世之上方□□山寺も未進入者也、

文明九年十一月十四日

八三七

文明九年十一月十五日

八三八

幕府、紀伊小守護代平三郎左衛門尉ニ命ジテ、興福寺松林院領和田莊ニ、兵糧米ヲ課スルヲ停メシム、國人聽カズ、

〔尋尊大僧正記〕八 十一月十八日、

一松林院使自京都下向、紀州和田庄兵糧米停止事申入云々、

十四日書上奉行爲信英基、遵行ハ直秋、基高、小守護代ハ平三郎左衛門尉云々、

廿四日、

一松林院被相語、紀州和田庄事、先日御奉書付之、國人等不承引云々、

十五日、己卯、内藏頭山科言國ニ、其所領ノ山城、信濃ニ在ルモノヲ安堵セシム、

〔歷代殘闕日記〕七十八 重胤記 十一月十七日、

一中務少輔方下向、所々安堵勅裁三通持參也、

案、勸修寺政顯

山城國山科七鄉内知行分事、任武家下知之旨、當知行不可有相違之由、天氣所候也、仍執啓如件、

文明九年十一月十五日

左中辨判

山城山科七鄉内

同長岡莊等
西軍退散ニ依ル

謹上 内藏頭殿

山城國西岡長岡庄内名役九條散在田地六段半、樋口坊城下地并新西宮境内等事、任武家下知之旨、敵退散之上者、如元可令全領掌給之由、天氣所候也、仍執啓如件、

文明九年十一月十五日

左中辨判

謹上 内藏頭殿

信濃五箇莊
同住吉莊

信濃國五箇庄、同國住吉庄等事、當知行無相違之處、近年有名無實云々、太不可然、任武家下知之旨、早令停止方々、違亂、可令全領掌給之由、天氣所候也、仍執啓如件、

文明九年十一月十五日

左中辨判

謹上 内藏頭殿

幕府、上杉房定ニ、京都ノ邸地ヲ安堵セシム、

〔異本上杉家譜〕伊佐早謙氏所藏

文明九年十一月十五日

八三九

文明九年十一月十六日

八四〇

樋口以南高倉以東四町々、樋口以南万里小路以東四町々、六條坊門高倉東
□南角寺屋敷地之事、早任當知行之旨、可致全領知之由、所被仰下也、仍執達
如件、

文明九年十一月十五日

(所傳) 彈正忠
(原居) 大和守

上杉民部大輔殿

三澤貞綱、出雲神東村ノ地ヲ日御崎社ニ寄ス、

〔日御崎神社文書〕〇出雲

奉寄進御崎御神田事

合伍段者神東村
之内

右爲新寄進永代奉寄附者也、仍寄進之狀如件、

文明九年十一月十五日

(三傳) 源貞綱(花押)

御崎檢校殿

十六日、庚辰皇子勝仁御爪置、

〔御湯との、上乃日記〕一

十一月十六日、宮の御り、御はめれり、

源大納言御さちるいらせら
ふ、

侍従日野政資、上眉涅齒ノ儀ヲ小河第二行フ、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文
庫所藏

十一月十一日、乙亥、晴、依召參御臺御方、以北小路禪

尼被仰下云、侍従政資アケマユノ祝來十六日分也、於御臺御前、殊更致汰沙

度由、青侍等雖執申、予申入者可有御沙汰由仰也、不可告歟(若方)由御尋之間、此祝

内儀也、政資事不可比他人、旁可然由令言上之間、御治定也、

十五日、己卯、晴、松波三河入道入來、明日拾遺上眉祝事、依予計申、於御臺御方

御前、可被沙汰分、被仰下之間、祝著畏入由謝來、令對面、昨日御臺御方仰之旨

并町家領敷地事等仰舍者也、畏奉由返答、

十六日、庚辰、雨降、侍従政資上眉祝、於殿中事更被沙汰度由、先日家撲共望申

處、予執申者、不可有子細由、御臺御方依仰、予執申間、今日於御臺御方沙汰者

也、入夜、可急參由有召、參御臺御方、拾遺祝三獻被下之、御臺御酌以下拜領之、

准后御出座之間、拾遺祝著之儀、於御前被沙汰條、祝著畏申由令言上、仍進上

御太刀金者也、半更退出、

文明九年十一月十六日

八四一

廣橋兼顯
ノ請ニ依
ラントス
義政夫人
前日野氏
フニテ行

政資ノ家
人小河第
ニテ行ハ
シコトヲ
請フ

義政モ出
座ス

上眉祝ニ
一門ノ衆
ヲ招ク

政資參内

良篁房ノ
弟子トナ
ル己心寺光
圓ノ門流

文明九年十一月十七日

八四二

十八日、壬午、雪降、早朝拾遺亭有朝飯、一門衆悉、其外勸修寺大納言、民部卿、攝津修理大夫之親朝臣等也、自兼日予無指合者、各可申遣由、以江部中將(兼攝)被申送間、可罷向之由約束者也、飯後有一盃、頃之各歸、家撲共相談云、今度祝之後、事更參内可然歟、由申間、上眉祝事者内儀也、雖不可及祇候、何無祇候、尤可然由返答、然者三荷許持參云々、殊可然由返答者也、及晚拾遺被賀來、被隨身金劔、予先夜賀向故也、令對面謝之、朝衣也、參内次歟、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十一月十八日、日野の玄、う御えくろしき、
まこり、御まぬ三色、御さる三つある、御さる月とふ、

内大臣九條政忠ノ子某、大安寺ニ入ル、

〔尋尊大僧正記〕 八 十一月十六日、雨下、
一大安寺方丈良篁房爲弟子、九條内府御息、今日被入寺了、爲御共御童子二

八召進之、楠葉入道寬圓御共申了、己心寺開山光圓上人門流也、

十七日、庚辰、主殿頭壬生雅久ニ命ジテ、先規ノ如ク、御殿炭ヲ備進セシム、

〔宮内省圖書寮所藏文書〕 主殿察領
雜々三

(端裏書)
御教書案 御殿炭 文明九 十一 十八

晦日御殿及殿上侍寮役□事、近年過法不法之間、御殿炭大略及闕如之由、女官等訴申、任先例之寸法、慥可被備進之□、殊可被下知給之□、其沙汰候也、仍執達如件、

十一月十七日

親顯

主殿頭(元)

十九日、癸未、三條西實隆竝ニ善學院法印公助ニ勅シテ、法華懺法、例時作法等ヲ書寫セシメラル、

〔實隆公記〕 四 十一月廿一日、乙酉、晴、早旦行水、此事十九日之事也、自禁裏懺法御本去年御料
帶被調之、

來月聖忌之前可書進上之由、有女房奉書、去年再三雖辭申、重而勅定之間、不能左右畏之由申入了、例時作法、公助法印可書進上之由、同勅定可相傳之由候也、入夜依召參内候宿、

廿四日、戊子、例時遣善覺院了、懺法御本立筆、天隱來話、

十二月十一日、甲辰、晴、早朝行水、今日法花懺法御本書寫進上之公助法印例時同到來、則令進上之、

勸修寺教秀、廣橋兼顯等ニ命ジテ、泉涌寺領ノ年貢ヲ督促セシム、

文明九年十一月十九日

八四三

進獻

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十一月十九日癸未晴、民部卿廻文到來、可有勅問子

細有之、可參祇由也、勸修寺兩人也、加奉者也、參仕剋限、可存知由、被示送間、八時分可參由申入者也、仍未初參内、條々被仰下旨有之、泉涌寺領事、御領所共催促之間事以下也、勸修寺同祇候也、

○青蓮院門跡領山城花園田勅裁ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕

四

十一月廿二日丙戌晴、青蓮院門跡領花園田勅裁事、同書之

付戸部卿了、

二十日、^甲京都平定ニ依リ、劍ヲ義政ニ賜フ、義政モ亦劍ヲ獻ジテ之ヲ賀ス、公卿廷臣將士寺社等モ、禁裏幕府竝ニ小河第ニ參賀ス、

〔御湯との、上乃日記〕

一

十一月廿日、天下無爲のき此めてささとあむ

勅使勸修寺教秀
二條政嗣
聖護院道興
元應寺惠忍惠心ノ彌陀進獻

ろまちとのへ御さちるる、御つういくとあう寺あさよりも又あいる、二てうの前く日んえく御あこう、御さひめんあり、あやうこ院も御あいる、御下すうさよて御さひめんハあし、五いし三百あいらふ、うんまう院あんらく光おん、せんおう寺もめてささ申さる、御さひめんあり、せんおう寺あそんのあまさあいらる、うちの地ねん院御く日んし

二條持通
大覺寺性深
青蓮院尊應
九條政基
轉法輪三條公教

廬山寺卷數ヲ上ル

定法寺實助皇子及
王ニ拜親
飛鳥井雅康

幕府ノ太刀ヲ借ル

ゆもちあるる、あまこさよりめてささ申さる、小松よりも申さる、や日さの田中もあいる、御さちるいらせらね、山しれより御くり一こあいる、二てうの大あう、大うく寺との御せうさよあ御申あり、しやうれんおん殿も御申、御さひめんあり、ふとう院も申さる、かおかぬ、うままをも申、く日んえく御下せかさよあ、あり、内ふも申さる、廿一日、十さう院、うちおとのハ御く日んらくよて御つういよく、めてささ申さる、ろさんし御く日んしゆもちてあいらふ、御さひめんあり、廿二日、ちをん寺、ぬひあし御れい申さる、御さひめんなり、二そん院も申さる、お中よの御宮けとあ、御ちや、御つ、ら御く日んしゆあいらふ、ちやう不う寺も申さる、御さひめんあり、宮の御うさ、二のミヤ此御うさへも申さる、二のミヤの御うさ御さひめんあり、十二月五日、あそり井前大納言入さう、世のめてさた御まいよあこう、御うさよてくこんさふ、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十一月十九日癸未晴、明日御禮、可被進武家祿劍關

如之由、民部卿令申之間、武家御物一腰令借用、調阿令進上者也、明日自武家

公武義尙
ニ賀ス

義政ニ白
太刀ヲ賜
フ

二條持通
同政嗣幕
府ニ參賀
ス
公武日野
氏ニ參賀
ス

文明九年十一月二十日

八四六

可被進間、可返遣者也。直參宰相中將殿、頃之又參小河殿、條々披露。廿日、甲申、晴、早旦、先參宰相中將殿、天下靜謐、參賀也。公武悉群參日也。尤珍重々々、諸大名以下、武家悉參進之後、公家構見參、先東衆、次攝家以下、西衆也。直參小河殿、先之自禁裏被進、白太刀申出之持參者也。則御出座、御對面之儀、同前。攝家諸門跡御對面之時、祇候御眼路、如先々申次雲客、自一昨日方々雖相觸、各勸樂故障之由、申間、令闕如間、武家申次、畠山刑部少輔勸之、殿上人各緩怠、如何之、予内々伺時宜、申付刑部少輔者也。禁裏御太刀東衆參進後、予持參御前申入者也。二條大間、同前殿以下、遲參之間、重而又御出座、御對面之儀、同前也。次各參御臺御方。

廿一日、乙酉、晴、昨日今日公武面々多以被賀來、八幡田中賀來、一荷兩種隨身勸一盃、善法寺享清社務、東竹前社務、西竹等同賀來也。公方御番頭下京之衆八人來、召庭上對面、一荷以下持來之、實相院准后參賀、昨日不具之故也。可參申由有音信、但以申次被申、聊取亂子細有之、返答自宰相中將殿有御使、彌、木阿只今實相院被參、被亂御本結間、御對面御斟酌也。得其意可申由也。予申云、仰之旨定而可被畏申、但御結々々よて、御對面、定而被祝著申間、予押而申請

靜覺法親
王幕府ニ
參賀ス

興福寺東
大寺ノ上
洛ヲ妨グ

參賀ノ人
々々

西園寺實
遠上洛

分被仰、御對面可畏入由申入者也。仍御對面云々、入夜御室宮被參、予申入者也。於御臺御方被下御酒、數剋御雜談、條々又有被仰下旨、及半更歸家。十二月一日、甲午、天晴、自西園寺前槐有使者、近日上洛云々、仍自南都言傳之書狀被送之、以次鯉一被送之、芳志也。

十五日、戊申、晴、時々雪下、入夜月明々、東大寺就世上靜謐之儀、賀札事書到來之間、御楯五荷、唐布三合、蜜柑二籠進上、以春日局披露、仰景敦返狀調遣者也。可寺官上洛處、自興福寺依相支、且捧事書者也。

〔實隆公記〕

四

十一月廿日、甲申、晴、今日武家惣竝參賀也。午刻群參云々、旁

不具故障之間、及晚令出仕、先參大樹則御對面、黃昏之後參小河御亭、無御對面、仍參賀之輩、以一番書之、内々令進上、予書之、内大臣冷泉大納言、源大納言、花山院大納言、按察使、園前中納言、勸解、由小路前中納言、中御門中納言、兵部卿、日野中納言、菊第中納言、新藤宰相、正親町宰相、中將左大辨宰相、四辻宰相、中將貞隆朝臣、宣親、實澄、菅原在數源、富仲、清三位、長興、宿禰、定基朝臣、重長朝臣、景兼等也。歸路於不同軒有盃酌、深更回蓬屋。廿六日、庚寅、晴、略、西園寺此間上洛之間、金覆輪遣之。

文明九年十一月二十日

八四七

飛鳥井雅康親同上洛

文明九年十一月二十日

八四八

廿七日、辛卯、晴、飛鳥井大納言入道、武衛等此間上洛、稱禮罷向、都護卿、中將等同道了、

十二月八日、辛丑、晴、自西園寺有使者、金覆輪被送之

〔親長卿記〕八 十一月十九日、晴、今日中御門中納言自坂本出京、明日參賀

料云々、

廿日、晴、今日就天下靜謐之儀參賀也、室町殿御早旦依故障、及晚人々令同導

先參宰相中將殿、有御對面、次小川殿、室町殿無申次、以春日局進了、各進上一腰

〔長興宿禰記〕上 十一月廿日、公武上下參賀室町殿、敵陣沒落、世上無爲珍

重之儀也、予參賀了、

〔尋尊大僧正記〕八 十一月十九日、

一自袖留木法橋方書狀到來、大内以下御敵陣開之間、近日惣別御禮可有云

々、自傳奏可申旨云々、十五日書狀也、

廿二日、

一自袖留木書狀到來、十八日書狀也、京都御禮、京衆ハ廿日御禮被申、近國御

止住之諸門跡、僧俗、山門、三井寺御禮ハ、兩門跡諸院家先々御參賀之方々

京都住者ハ二十日近國止住僧俗ハ

參賀ノ人々ヲ注進セシム

可注進由、自傳奏被申云々、

廿三日、

一自一乘院書狀到來、京都御禮上洛事被申之之間、所存分巨細申遣了、近日

路次難義由、京都へ被申上云々、諸院家上洛以後、於當門者、可有上洛歟、

廿四日、

一京都御禮事、巨細以隨心院殿申合、一乘院了、

十二月八日、

一自儀綱入道方、東北院へ申下、公方御義上意ハ、東西之御敵有之上者、目出

子細無之、仍上洛無益之由申云々、此間御近所跡少退散計也、諸國尙々珍

事之由申下云々、雖然可有上洛云々、

九日、雨下、

一自訓英方申、寺官上洛事、自六方申子細在之、明日可有集會、春ニ可有延引

歟云々、

十日、小雪、東山在

一六方峰起、田樂事、惡黨方秋篠以下可有發向之由事云々、仍京都御禮參賀

文明九年十一月二十日

八四九

寺官上洛ニツキテ六方衆集會

義政ノ意見アルニ依リ上洛無益

一乘院大門
跡上洛ハ
寺官上洛
マデ延引

尋尊ノ意
見

參賀ノ理
ナシ
近國幕命
ニ應ゼズ

幕府下知
ノ國々モ
守護代以
テ命ヲ奉
ゼズ

松林院兼
親上洛ス

文明九年十一月二十日

八五〇

事、路次不通之間、寺官上洛申止之、隨而兩門跡上洛事、重而寺官上洛まで可延引、卒爾ニ上洛不可有由、集儀書狀^(儀平四少)到來了、東北院へハ昨日申遣云々、則今日此趣傳奏邊ニ申上云々、六方^(書狀)□□不可然、以外事也、但近日大和山城之堺、惡黨無□□之間、万一アヤマチ在之者、誠爲寺社、云當座云爲後代、可爲珍事也、又此御禮春ニ延引も更以無大事也、雜掌袖留木方々申勸、東北院又羽ヲノサル故、諸方思立者也、月迫難義ハ無是非物也、就中天下事更以目出度子細無之、於近國者、近江、三乃、尾張、遠江、三川、飛驒、能登、加賀、越前、大和、河内、此等ハ悉皆不應御下知、年貢等一向不進上國共也、其外ハ紀州、攝州、越中、和泉、此等ハ國中亂之間、年貢等事不及是非者也、サテ公方御下知、國々ハ、播磨、備前、美作、備中、備後、伊勢、伊賀、淡路、四國等也、一切不應御下知、守護躰、於別躰者、御下知畏入之由申入、遵行等雖成之、守護代以下在國者、中々不能承引事共也、仍日本國ハ悉以不應御下知也、

十一日、

一六方峰起、專當舜朝之在所進發了、^{福智院所也}昨日自六方、集儀狀以舜朝遣松林院之處、今日付之、仍今朝既兼親得業與東室同道上洛了、此事及糺明之

幕府ニハ
酒宴ノミ
行ハル

參賀進上
物

處、專當越度也云々、仍進發之云々、且松林院僧正越度也、六方集會ニ及其沙汰條ハ存知也、仍内々上洛事可有旨被計略之處、集儀一決之間、不及了簡旨、内々意見申云々、然而書狀未到來とて押上洛、大ニ不可然事也、所存様不審々々、近日事ハ早々上洛、更以不可感悅事也、可隨多分儀事也、仍東北院僧正も腹立、如此上洛事不同、爲自身難義云々、此子細内々申送六方歎云々、

十五日、

一松林院得業來、昨日自京都下向云々、京都儀無殊子細、大酒計也、於御方御所御前十度吞ニ令迷惑云々、御禮次第ハ先御方ニ申入、其後公方ニ參申、御世事御方御存知分儀也云々、東室ハ十三日ニ則下向畢、得業ハ件大酒ニより、昨日罷下云々、路次無殊子細云々、

十九日、^{雪下、八專入、}

一今度自松林院、公方御禮ハ、榼三荷、唐布一合、折一合、^{蜜柑}、榼三荷、唐布一合、若君、榼二荷、唐布一合、御糞、榼一荷、唐布一、□□榼一荷、唐布一合、^{伊勢}守云々、廿六日、

文明九年十一月二十日

八五一

文明九年十一月二十二日

一成就院ニ參申、一獻等在之、新僧正并東林院等申沙汰也、廿八日、各上洛必
定々々云々、

二十二日、丙戌勅題ヲ公卿廷臣ニ賜ヒ、攝津水無瀬廟法樂ノ名號五十首續
歌ヲ詠進セシメ、是日、之ヲ奉納セシメラル、

名號ノ續
歌

〔御湯との、上乃日記〕一 十一月廿二日、ミあきの御ゑいへ、ミヤウかう
の御つたうさ五十しゆ、御さちの代ゐいらせらるゝ、ミあきの□□□□
□めてさたよし申さるゝ、

〔實隆公記〕四 十一月十四日、戌寅、霽、水無瀬御廟御奉納題、遣所々了、

廿二日、丙戌、晴、早朝行水、水無瀬御廟御奉納短冊令清書進上之、

大乘院尋尊、書ヲ朝倉孝景ニ遺リ、興福寺領越前鶴丸名竝ニ三ヶ浦ノ年
貢ヲ督促センコトヲ求ム、

〔尋尊大僧正記〕八 十一月廿二日、

一越前國定使虎松丸方より注進狀到來、仍朝倉方ニ書狀遣之了、

鶴丸名去
年分年貢
到來

鶴丸名去年分年貢四十五貫五百文、自孫衛門方慥ニ南著候、無毘亂儀候、
次當年分鶴丸六十餘貫文事ハ、可被渡轉輕院候、其餘在々所々三ヶ浦等

年貢事、定使虎松ニ可渡給候、此由各可被成敗候ハ、可悅入候也、

十一月廿二日

花押

朝倉殿

十二月朔日、

一鶴丸名年貢六十餘貫文事、轉輕院ニ可取進之由、如先度仰、重而成奉書了、
三ヶ浦以下事ハ、如此間、御定使虎松丸ニ可沙汰之由、霜臺ニ可傳旨仰付
之了、奉書清賢成之、予袖判了、轉輕院へ之奉書也、明日日付也、下國使有之
云々、

朝倉孝景、牧田筑前守某ニ命シテ、越前神宮寺領節供田ノ年貢未進ヲ督
徴セシム、

〔足羽神社文書〕前〇越

社神宮寺節供田年貢米并油未進之儀、付て、神主方より如此注文出帶候、
封裏進之候、催促候て、嚴重可有社納候、但申子細候者、可有注進候、恐々謹言

文明九
十一月廿二日

孝景

牧田筑前守殿

文明九年十一月二十二日

文明九年十一月二十四日

八五四

二十四日、子、戊伊豫守佐竹義俊卒ス、子義治嗣グ、

〔佐竹家舊記〕

○羽後 佐竹歴世牌子記

故豫州刺史曜岳建晃

諱義俊、字五郎、竹堂之嫡長子也、文明九年丁酉十一月二十四日卒、

〔故佐竹諸家譜〕

義仁

義俊

伊与守、室小山大膳大夫女、法名花溪、妙榮、十八歳、イニハ四十八歳、十年、六年、六郎、二、年、在、位、

義治

〔寛政重修諸家譜〕

百二十九 清和源氏 義家流 佐竹

義八

義俊 初義從、五郎、伊豫守、右京大夫、

義治 左衛門佐、左馬頭、右京大夫、母は小山大膳大夫某が女、

義成 三郎、母は上におなじ、天神林を稱し、子孫家臣となる、

女子 母は上におなじ、

世系

略歴

女子 母は上におなじ、

某 天鳳、母は平元氏、はじめ僧となり、後還俗し、義舜が族臣、山入左京大夫

氏義 がために害せらる、子孫宇留野を稱し、家臣となる、

某 四郎、掃部助、宇留野を稱す、母は町田氏、

義易 八郎、母は上におなじ、族臣、戸村常陸介義俊が養子、

女子 母は上におなじ、

義俊 母は義盛が女、享徳元年、故ありて太田城を退去し、族臣大山因幡入

道常金が許にあり、このとき弟六郎實定、太田に在城し、兄弟不和となる、

一族義俊にしたがひ、しばしば戦争に及ぶ、應仁元年十一月、實定が男六

郎義實、太田城を去のち、嫡男義治とともに、彼城に歸る、文明九年十一

月二十四日卒す、年五十八、曜岳建晃 寛永系、と號す、室は小山大膳大夫某

が女、卒す、繼室は町田某が女、

〔佐竹系譜事蹟略〕

○羽後 十五代目、伊豫守義俊 初義從、

應永二十七年、庚子出生、土地并月、不相知候、幼名五郎、伊豫守、右京大夫等ニ被任

候、

文明九年十一月二十四日

八五五

文明九年十一月二十四日

八五六

一母ハ義盛女ニ御座候

一享徳元年壬申、故有之、常州太田城を立退致流離、一門大山因幡入道常金之館ニ罷在候、其内弟六郎實定太田在城仕、兄弟不和ニ相成、常金并一族之者共ハ、義俊ニ致味方、數度戰爭ニ相及候、

一寛正六年乙酉九月廿五日、六郎實定致病死、其嗣子義實太田城ニ罷在候、

一應仁元年丁亥十一月、義實太田城を立退、水戸ニ出奔仕候ニ付、義俊并義

治義俊之嫡子共ニ太田ニ致歸城候、

一文明九年丁酉十一月廿四日、五十八歳ニ至致死去、土地并葬地不相知候、法名曜岳

建晃と申候、

一妻ハ小山大膳大夫藤原某女ニ御座候、法名花溪妙榮と稱候、後又町田某之女を娶、法名陽源院昌隆と申候、

義俊之子

義治 下ニ相見候、

義成 三郎 母小山氏女、

子女

天神林氏

天神林氏ニ有、其氏族家臣ニ罷成子孫于今有之候、

女子 母同、

女子 母同、

存虎 母ハ妾平元氏、

初出家仕、天鳳存虎と號候、後還俗致、子共出生、宇留野氏を稱し、其後家臣ニ罷成、子孫于今有之候、一門山入氏義と申者、叛逆を企候節、被致殺害候、

某 四郎、掃部助、母町田氏女、

宇留野氏を稱候、

義易 八郎、母同、

一門戸村常陸介義倭之養子ニ罷成候、法名大林と申候、

女子母同、

〔佐竹系圖〕

○正宗寺本

一義俊 伊与守、法名曜岳建晃、五十八歳、又ハ四十八歳トモ云説アリ、文明

文明九年十一月二十四日

八五七

宇留野氏

文明九年十一月二十四日

八五八

九年霜月廿四日遠行、

室小山大膳大夫女、法名花溪榮公禪定尼、八十計ニテ御遠行、

一 曜岳ノ御時ノ御新造ハ町田ノ女也、宇留野酒掃ハ此ノ御腹也、自戸村被

取、後ノ事也、

一 花溪ノ御兄弟、

花溪ハ、結城落以後、當方へ御出、御袋モ馬場ニ御座候ヲ、花溪ハ曜岳ノ上

ニ被成、御妹兩人ヲハ竹道御親ニ被成テ、

中御妹ハ宮ノ正綱ノ上ニ被成、

末ノ妹ハ那須右衛門大夫伊与守資實ノ上ニ被成、

勝元寺ハ別腹ノ弟ニテ御座、此ノ御女ノ腹ニ、御小比丘尼御座アル、其ノ

腹大山ノ隼人殿ナリ、勝元寺ハ西半繩居住アル、

〔佐竹家舊記〕

○七羽 康應記録一

一 義俊若衆ニ、久賀谷彦三郎參也、十九之時鹽埦要害普請ニ石田与云人ニ

緩怠シテ召ウタル、是若者之爲ニ書置候、太田之久賀谷祖也、

義俊夫人ノ兄弟

義俊ノ若衆

義俊ノ右筆

一 義俊之御右筆河井俊悦与云者也、伊勢者共云、奥人与共云、是太田河井祖也、

〔佐竹家舊記〕

○五羽 義光 以往之紹圖并未ニ物語誌

一 南明山正法院、行義、弘安年中ニ御建立、同被鑄鐘、同那珂西阿波ノ郷六百

貫ノ所ヲ寄附、此内ニ除地粟殿五町五間、鎌倉圓覺寺領ノ寶歸庵ナリ、然

ニ曜岳十六年御窄籠被成、被復本意時、小場へ二名之地、太山へ一名被遣、

其儘于今寺家へ歸附無之、

○義俊、弟實定ト、屢兵ヲ構フルコト、享徳元年是歳ノ條ニ、實定卒シ、父

義人其子義實ヲ嗣トナサントス、族人部下義俊ヲ擁立スルコト、寶徳

六年九月二十五日ノ條ニ、義人卒シ、義俊家ヲ嗣グコト、應仁元年十二

月二十四日ノ條ニ、結城直朝ノ援ヲ乞ヒ、山入義知ヲ撃タントスルコ

ト、文明三年十一月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

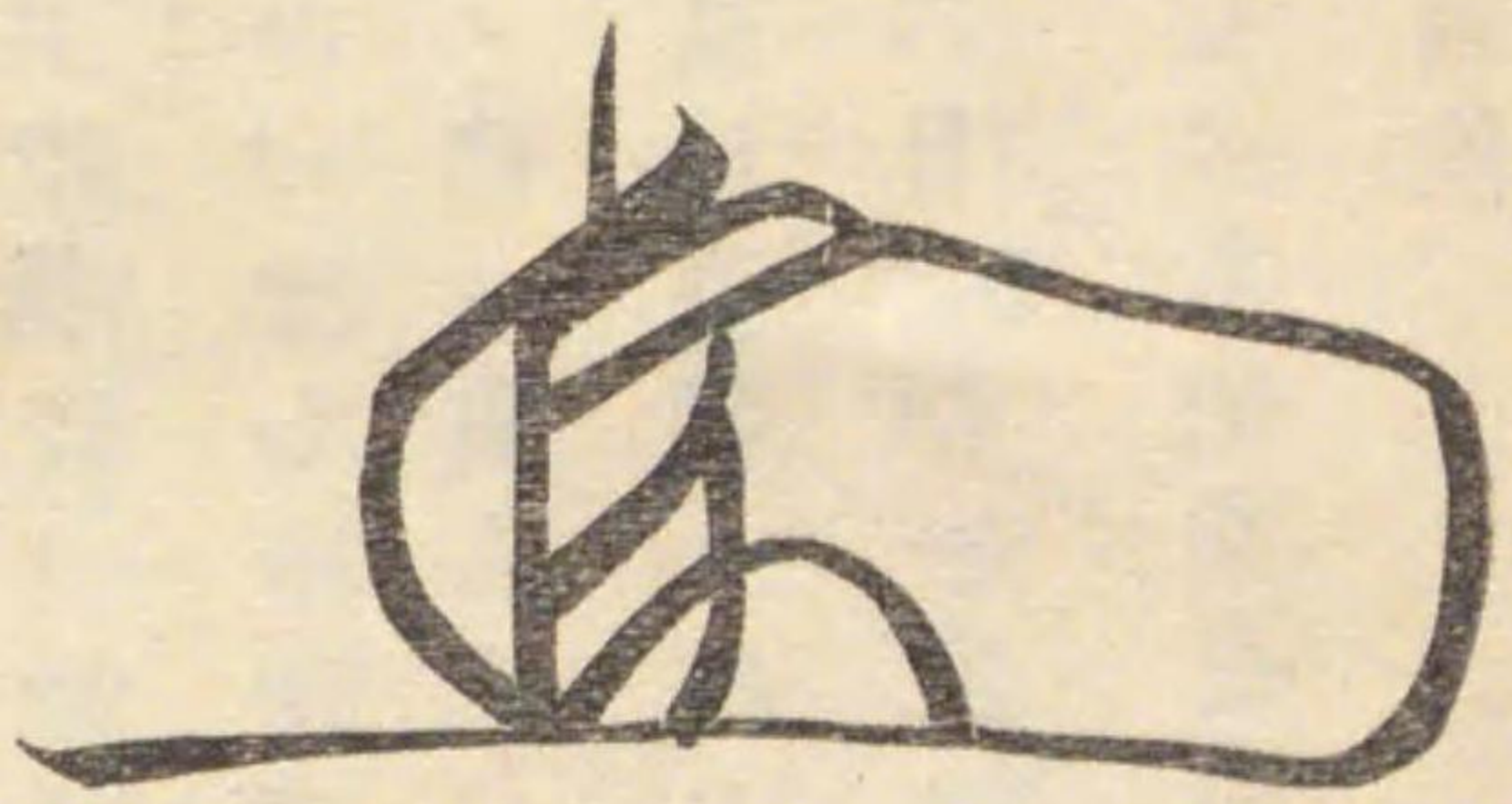
部サ之

佐竹義俊

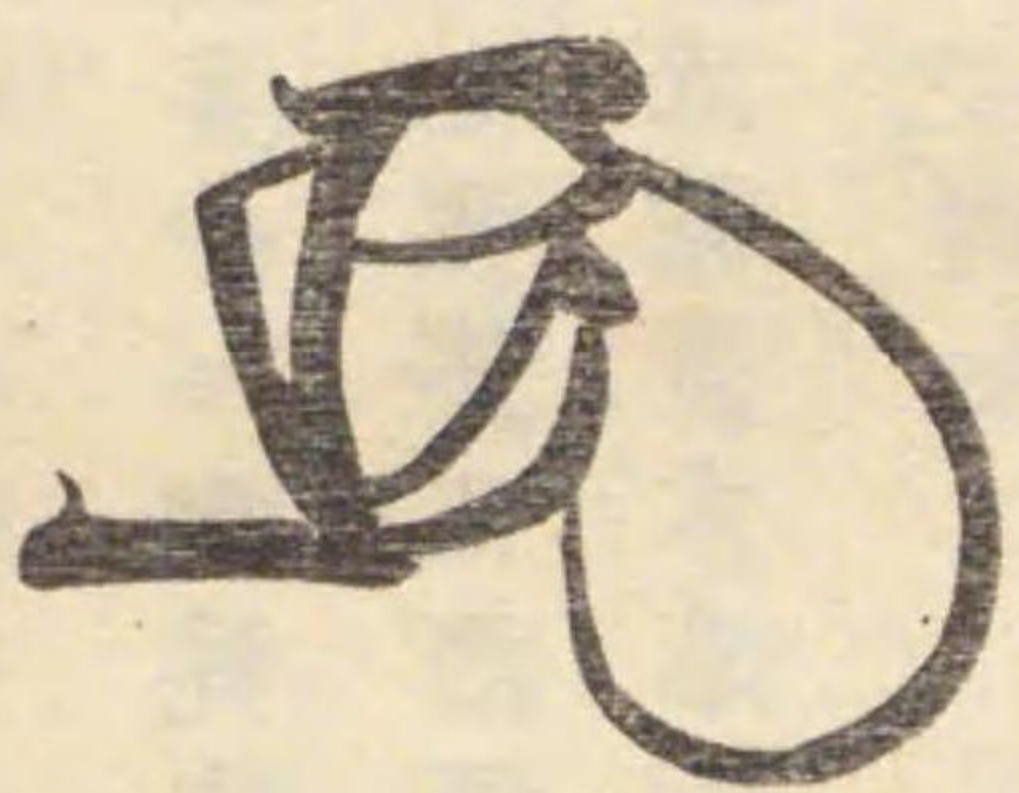
文明九年十一月二十四日

八五九

二十五日、己丑是ヨリ先、山城嵯峨清凉寺ノ釋迦像ヲ、五條淨教寺ニ遷シテ、兵燹ヲ避ク、是ニ至リ、舊ニ復ス、



○白川文書二(陸前)十一月六日書狀



○佐竹家判鑑三月廿三日

嵯峨ノ釋
迦像

〔大乘院日記目錄〕 三 十一月廿五日、嵯峨尺迦奉入本堂、一亂中御座五條淨教寺、

〔清凉寺緣起〕 文明二年庚寅の春、淨教寺の長老夢みらく、(聖)廣見走來曰、且當寺此本堂ノ瑞像を遷し奉らんと欲せ、御心中如何と問ひひ、長老不可及是非可奉遷なりと答とこれを亟之拂曉ノ門を扣し夢ハ覚ぬ、一色殿より使者をえつて、彼靈像を佛殿ニ安し給へしとあり、然間淨教寺ニ遷せまひて、八年の間あひしますなり、文明九年丁酉冬十一月、天下靜謐して、此靈像も又舊寺よありたまふ者なり、○上略

〔參考〕

〔山城志〕

佛四 葛野郡 清凉寺 號愛宕山、小右記曰、永延元年八月十八日、釋檀釋迦像、未遂、夙志、長和五年、逝、弟子盛、築重、奏、以、棲霞寺、內、釋、迦、堂、號、清、凉、寺、許、之、略、下

曇花院宮、開山忌ニ依リ、通源寺ニ移ラセラル、

〔親長卿記〕 八 十一月廿五日、晴、參通源寺、曇花院殿、今日依開山基有入御之故也、亂中無爲之御寺也、

〔御湯との、上乃日記〕一 十二月十四日、御日つし、せけ殿、とん花院殿御寺へうつらされえしませ、御いとるこ井よ御あり、御さく月ある、

○十二月十四日ノ條、便宜合致ス、

二十六日、^{庚寅}賀茂社々司勝平ノ遺領播磨安志莊神米割分竝ニ屋敷等ヲ、祝信平ニ安堵セシム、

〔親長卿記〕二三十

故勝平縣主遺跡知行分事、播磨國安志庄之内神米割分、小家屋敷等事、繼平縣主、去康正三年四月十一日繼平縣主書狀分明之上者、已被獻一跡之上者、知行不可相違之由、先度被成御下知了、可被存知之由候也、恐々謹言、

十一月廿六日

賀茂新宮祝殿

故勝平縣主遺跡事、先度被成御下知之處、猶及違亂云々、已被獻一跡之上者、何可及子細、太以無謂之次第也、安志庄割分并敷地等事、如元可止違亂、若於難澁者、可有沙汰之由候哉、恐々謹言、

十一月廿六日

賀茂市殿

去年度々被仰出候故勝平縣主割分請文事、被殘其跡之上者、難澁之條、太招罪科者歟、尤以不可然、不日可進請文之由、別可申旨候也、恐々謹言、

文明十

二月四日

市殿

親繼

〔親長卿記〕八

十一月廿八日、晴、故勝平縣主遺跡相續仁事、有猶子一兩年、在國、近日上洛之由申、

○勝平ノ遺領ヲ其寡婦ニ安堵セシムルコト、十月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十七日、^{辛卯}春日若宮祭、

〔大乘院日記目錄〕三

十月十五日、越智兩寺社參入堂、當年願主治定云々、十一月九日、越智壇正願主社參初也、

文明九年十一月二十七日

文明九年十一月二十七日

八六四

田樂頭

十日、兩門跡ニ參申、

廿七日、祭禮田樂頭專秀權律師、慶英權律師、

馬長頭 胤清法印 定清權大僧都 光明院 善秀得業

陽淵權少僧都

流鏑馬 平田 乾脇五騎 散在二騎

〔尋尊大僧正記〕

八 十月十五日、

一歸馬長用、自光明院大僧都方中童子裝束事申給之、不可有子細問仰返事了、

十七日、

田樂頭一方ハ彌陀院專秀

一祭禮田樂頭、一人ハ阿ミタ院兼觀禪院坊主圓蓮房律師專秀、散在之願主ハ越智壇正請取之、仍昨日此子細爲申、河内國へ罷越云々、

廿八日、

一方ハ慶英

一光秀申、田樂頭一方者、慶英得業可沙汰旨今日領狀之云々、然故歟屏風三双其外色々事共申入之、不可有子細之由仰返事了、

十一月八日、曉雨下、

專秀笛吹裝束ノ給與ヲ尋尊ニ請フ

一專秀律師申、田樂頭俄ニ懃仕之迷惑無申計候、笛吹裝束事、故清舜法印懃仕之時被下之間、□其例也、被仰付候者可畏入云々、内々堯善房ニ申入、中々不可得、不可成立旨仰了、等閑ハ雖無之、近日傳借方不叶旨仰了、自越智方榼百荷分八升榼也申之、九貫交代云々、是猶以不及了簡間、則使者春圓ニ、何共引違可進旨仰付了、

九日、朝雨下、

一越智霜臺、今日願主社參初也、於社頭館一獻等在之、宿觀禪院云々、

廿四日、

一慶英任權律師、爲田樂頭也云々、鈍色平ケサ四方輿也、

廿五日、夜雨下、

一越智以下願主人等奈良入如例、越智ハ自三條罷入、大宿所遍照院也、万歳

ハ三條堂、長谷□林院、

一田樂笛吹笠事、政覺新僧正御房ニ慶英律師所望申入之間、兼日より細工共ニ

被仰付之、昨日出來之間給之、畏入了、細工衆專祐、英建母重服者也、專實母重服者也、

花造衆忍舜房、圓善房、各堂衆也、手代衆良祐、懷賢、懷乘、實英、專重、玄壽丸等

文明九年十一月二十七日

八六五

家榮等奈良入

慶英權律師ニ任ズ

政覺笛吹笠ヲ慶英ニ給ス

細工衆

花造衆手代衆

行列次第

也

廿六日、

一頭屋裝束給之、圓蓮房律師於觀禪院也、香舜房、於珍藏院也、

一別會五師實心、行烈次第以中綱進之、

廿七日、天晴

一早旦兩座田樂參申、笠等見參之、於簾中見之、專實寺主申次之、

一今日祭禮、近頃大勢田舍人罷上、武者又濟々有之、如軍中云々、爲越智用心也、

警戒ノ武士

馬長頭

馬長頭 順禪房法印、顯舜房權大僧都、春淨房得業、

流鏑馬 平田乾勝、散在隨兵、二、八、散在、乾勝、

出仕躰 別會實心、新五師宗藝、通目、

出仕體

一十市遠相來、大口直垂也、流鏑馬之歸也云々、宿所鉢屋也云々、

一拜殿榼料足事一千貫 越智、三十貫 同辻、三百貫 万歳、百十貫 長谷、

拜殿榼料

廿八日、

一越智歸宅願主無爲祝著云々、

後日猿樂田樂

一後日猿樂田樂如例、

廿九日、

一祭禮行烈次第馬長頭名字相違子細有之間、依五師越度也、不可然、可書直進上之由、先日使者召中綱返遣之了、

幕府ニ勅シテ、土御門殿ヲ修理セシム、是日、工ヲ始ム、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十一月廿五日、己丑晴、自晚雨降、早旦有召、參御臺御

方、禁裏御修理御大工以下之事也、仍參內、終日祇候、入夜退出、

廿六日、庚寅晴、今日大辨轉任之拜賀日也、○中今夜奏事目六如此、

文明九年十一月 日兼顯奏 日二字、奏開以後仰、

土御門殿御修理事 當時修理時分、

仰、早可有申沙汰由、可申武家、○下、

始行 奉行

廿七日、辛卯晴、早旦參土御門殿、勸修寺大納言同參會、今日吉日之間、御修理事被取□□故也、武家奉行結城下野守、飯尾（元德）太和守、布施（英基）彈正大夫、松田九郎左衛門尉等同祇候、番匠以下諸公人御大工悉參進、昨日以布施彈正大夫、可參祇由依仰、兩人參者也、未剋許歸家退出之次、舊跡邊一覽、庭石等全有之、小

文明九年十一月二十八日 是月

八六八

時歸宅勸修寺參內可奏事之由、内々令入魂故也、予雖可參、爲休息直歸宅、山城守護山名政豐、伏見宮御領ニ遵行狀ヲ出ス、

〔實隆公記〕^四 十一月廿七日、辛卯、晴、入夜參伏見殿、山名當國巡行今日出之、

二十八日、壬辰、樂器等御物ヲ壬生晴富ニ預ケラル、是日、之ヲ返上ス、

〔親長卿記〕^八 十一月廿八日、晴、參内、晝間、實隆朝臣番代付著到了、自壬生晴富宿禰許樂器返上、被殘内裏御物、自今出河被預官庫、仍今日返上、御反古

辛横一合同進上、予注色目請取之由、民部卿與加判形可遣之由、仰之間、書遣了、

是月、幕府、畠山政近等ヲ申次ト爲ス、

〔長祿二年以來申次記〕 申次人數壹

一 畠山中務少輔政近 被召加之、文明九年十一月日、御供衆并四番之頭也、政光舍弟、又宮内少輔

少輔、死後爲舍兄、應仁亂之後、宮内、御方御所、少輔、死去以後、出仕也、任上野介、

一 申次始而被仰付人數事 文明九年十一月卅日、

大館治部少輔尙氏 御供衆也、教氏息、任兵庫頭、彈正少弼、左衛門傳、伊與守、以下於江州、鉤御陣、被召加評定衆云々、

大館尙氏

大和政邦

伊勢盛種

伊勢貞賴

大和兵部少輔政邦 大和守成親舍弟也、當時家督分云々、

伊勢八郎左衛門尉盛種 任代々、備前守、

伊勢次郎貞賴 貞扶息也、任次郎、左衛門并下總守、

神道長吉田兼俱、万雜一藝一役ヲ、京都ニ出入スル者ニ課シ、以テ神祇齋場ノ費ニ充テントコトヲ乞フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕 甲九十六 勅封第九拾五番ノ五、吉田社

神道長兼俱言上、

神祇齋場万雜一藝一役事

右當場者、爲日本家上之靈社、天神地神八百万神、六十餘州三千餘社、每日降臨之勝庭也、長日之神事、不退之勤行、異于他者哉、然文明五年被下勅裁、致神事興行之處、一廻中西陣忽令歸伏、去月廿一日、於内侍所令執行安鎮祭之處、日ノ十月二十一日、廿餘日、中皇都悉屬太平之條、併神慮之令、然故歟、爰當場神用事、万雜一藝一役、京中諸口事、任先度之御成敗之旨、爲被成下諸口之制札、粗言上如件、

文明九年十一月日

文明九年十一月是月

八六九

神事興行
ニ依リ西
陣歸伏ス
安鎮祭ニ
依リ京都
平和ニ屬
ス

文明九年十二月一日 二日

十二月 甲午朔 盡

八七〇

一日、甲午公卿、將士等、幕府ニ參賀ス、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十二月一日、甲午、天晴、月朔、每事中心多樂也、珍重々々、幸甚々々、早且先參賀小河殿、小時准后御出座、公武構見參之儀、如每朔、次參御臺御方、直參賀宰相中將殿、奉待還御、此間小河殿御座故也、頃之還御、則公武構見參儀同前、於常御所拜領御盃、拾遺同前、頃之祀候、直參內、以民部卿内々申入祝詞、於局有來樂興、公武面多以賀來、

廣橋兼顯
參内祝詞
ヲ述ブ

二日、乙未義尚、廣橋兼顯ヲ招キ、典籍ノ豫習ヲ爲ス、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十二月二日、乙未、雨降、自宰相中將殿有召參、御下讀事、可有御再興由仰也、昨日出仕之次、今日必可參由有仰、然而遲參故歟、重而有召間參者也、

五日、戊戌、晴、○中直參宰相中將殿、依召也、有御下讀、頃之則歸、

七日、庚子、自夜雪降、○中自宰相中將殿同有召、仍自禁裏直參宰相中將殿、民部卿局參候程也、仍有御酒、伊勢守父子祇候、頃之有御下讀、其後又被下數盃、十五日、戊申、晴時々雪下、入夜月明々、午天參御臺御方、頃之參宰相中將殿、依

召也、有御下讀終日祇候、幕府、山城守護山名政豐ノ、東寺境內年貢ヲ催促スルヲ停メ、寺家ヲシテ、舊ニ仍リ管掌セシム、

〔東寺百合文書〕 ○山城一之二十五

東寺境內水田并散在田畠等年貢事、先度御成敗之處、守護催促云々、太無謂、如先々寺家代官可致其沙汰、若寄事於左右、有難溢之族者、可被處罪科之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明九

十二月二日

(清和系)
貞秀(花押)
(松田主事)
數秀(花押)

當所名主沙汰人中

三日、丙申第二皇子尊敦親王御誕辰、

〔御湯との、上乃日記〕

十二月三日、二の宮の御方御さんやう日ふて、御さうつあゐる、

四日、丁酉京都清水寺、五條東洞院ヨリ東山ニ遷ル、

文明九年十二月三日 四日

八七一

文明九年十二月五日

八七二

〔尋尊大僧正記〕

八 十二月十三日、

一 清水寺自去四日東山ニ、自五條東洞院引遷也、如形令立之、可致次第勸進云々、

○清水寺兵燹ニカ、ルコト、元年七月十日ノ條ニ、再建勸進ノコト、十一年三月是月ノ條ニ見ユ、

五日、成皇子仁勝笙始、雅樂頭豐原緣秋授ケ奉ル、義政、劔馬ヲ獻ジテ之ヲ賀ス、

〔御湯どの、上乃日記〕

一 十二月五日、宮の御方御しやうをしせ、御しそ

(豐原)んよよりあきある、ふ行くらのうに、むろまぢ殿よりほろはし御つうひよて、宮此御うさへ御むるまろ、御さちある、やうてより秋よさふ、多しみ殿より御さちある、源大納言、くらの督、より秋のりあき、御さちあるいらる、御さう月三こんある、めてさし、

〔親長卿記〕

八 十二月五日、晴、今日若宮御方有御笙始、御師範雅樂頭豐原

緣秋朝臣也、舊院、當今奉行言國朝臣也、凡内々之儀云々、自室町殿被進御馬太刀、即被下緣秋云々、

奉行山料
言國
義政馬太
刀ヲ獻ズ
緣秋ニ賜
邦高親王
ヲ高親王
ゼラル

緣秋ハ後
花園土
皇御門
師範天

〔實隆公記〕

四 十二月五日、戊戌、晴、今日若宮御方御笙始、御師範緣秋朝臣

也、内藏頭言國朝臣奉行其儀云々、子細可尋記、入夜爲御禮參内、二更退出、
〔兼顯卿記〕○岩崎文 十二月四日、丁酉、晴、參小河殿、以左京大夫局、明日若

宮御方御笙始也、御馬御太刀被進之條先例也、可被進候哉、然者御馬事、可申伊勢守歟、白御太刀者調阿ニ御座之由、内々令申間申付彼歟、由伺申處、可被進御馬事、可申伊勢守、御太刀可申調阿ニ由仰也、仍各申付者也、御太刀則到來御馬事、以使者申遣伊勢守許者也、

五日、戊戌、晴、午天參内、若宮御方御笙始也、仍自室町殿御馬御太刀、白御進上、爲御使持參、以源大納言雅行申入事之由、以勾當内侍被仰下勅答、○中參小

河殿、以左京大夫局、申入勅答之旨、若宮御方依御笙始、御馬御太刀被進條、目出悅被思召之由也、

〔歷代殘闕日記〕

七十八 十二月五日、雨下、

一 今日午剋天晴、宮御方於禁裏御笙始、本所申沙汰也、御裝束衣冠、御供雜色一本、

〔長興宿禰記〕

上 十二月五日、内裡若宮皇子御笙始也、

文明九年十二月五日

八七三

廣橋兼願
義政ノ使
トシテ進
獻ズ

御生母大炊御門信子參内ス、

〔御湯との、上乃日記〕一 十二月五日、(大炊御門信子)ひんうし此とうおんとの御百い

り、御ミやけよ三色一うゐいる、御日しくと御しやうく日んあり、
十七日、(堀井宮堯)かち井殿御ゐいり、御さう月ゐいる、

○堯胤法親王御參内ノコト、便宜合致ス、

大内政弘、久芳盛清ニ、安藝久芳ノ地ヲ安堵セシム、

〔正任記〕 文明十年十月廿六日、甲寅、天陰、

一久芳助五郎仁御下文案文、去年於蒲刈被仰付之間、其日附也、

御判

下

久芳助五郎盛清

安藝國久芳内拾五石地兄孫次郎兼清事

右以人(所无行也者、早守先例、可全預知之狀如件)

文明九年十二月五日

爲御禮御太刀鳥目進上之、武宗披露之、

六日、己亥義政夫人日野氏、禁裏御替物ヲ調進ス、

堀井宮堯
胤法親王
參内

勸修寺
始御教
秀年
替物御服
沙汰
等ヲ申ス

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十二月六日、己亥、自夜雪降、早旦參御臺御方、略中御

臺御方被仰下云、禁裏御替物御簾事、於當年者、自御臺御方可被沙汰進之由也、先日注文可被御覽由、依仰今日持參之故也、注文被召置御前者也、

七日、庚子、自夜雪降、早旦以書狀禁裏御替物事、申遣勸修寺許、當年年始御替物以下御服方事等、彼卿申沙汰之故也、被沙汰進條、令存知候、珍重之由返答、昨日自禁裏雖有召、祇候御臺御方、御酒程也、仍不及參祇、今朝又有召、仍參内、條々被仰下事有之、

八日、辛丑、晴、早旦參小河殿、條々披露、同參御臺御方、頃之歸宅、入夜又參候、

義政、夫人日野氏ノ許ニ宴ス、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

十二月六日、己亥、自夜雪降、早旦參御臺御方、條々爲

伺申參候之處、准后御座、御酒程也、仍於御前被下御酒、聯輝軒、周全藏主等同祇候、伊勢守參之間、同被召御前、及晚歸家、

興福寺、一條兼良、近衛政家、鷹司政平等ニ金ヲ遺ル、

〔尋尊大僧正記〕

八 十二月六日、

一自學侶千疋進上禪閣之由、切符成之、則取進上了、千疋(近衛政家)陽明五百疋(政平)鷹司、五

學侶ヨリ
遺ル

文明九年十二月九日十日

百疋前内府(致意)九條三百疋 御妻

○政家、政平等上洛ノコト、本月十三日ノ條ニ、兼良上洛ノコト、同十七日ノ條ニ見ユ、

九日、壬寅幕府、東福寺ニ令シ、舊ニ仍リテ、境内ノ非違ヲ檢斷シ、寺家被官等ノ足輕ト號シテ暴行スルヲ禁シ、且西陣ノ徒ヲ庇護スルモノヲ處罰ス、

〔東福寺文書〕○山城

東福寺境内法性寺大路并宇賀迂等事、如先々爲寺家可致檢斷、次寺家被官同門前任人以下號足輕、近年致惡張行云々、太無謂於張本人者處其科、至自今以後者堅可被停止之、次御敵被官之族有許容之輩者、就注進可被處嚴科之由所被仰出也、仍執達如件、

文明九年十二月九日

(布美英基) 彈正忠 在判
(飯尾元連) 大和守 在判

當寺雜掌

十日、癸卯勅題ヲ近臣ニ賜ヒ、日吉社法樂和歌ヲ詠進セシメラル、

〔御湯との、上乃日記〕一 十一月廿九日、日よし此御不うらく此御さ

勅題支配

詠進歌ヲ重ネラル 寄書ヲ義政ニ遣サ 百舌鳥ノクサクキツキタル 梅枝ヲ賜フ 詠草ノ清書飛鳥井雅親

御くそりあり、ぬ出さし、あそり井□□人も御れ井よのりて、御さ井つら
えさふ、

十二月十日、日よし御海うらくの御さんしやくりさ手らる、

十四日、むろまちとのへ御不うらくのよさうきるいらる、御はめてよも
そのくさくたけきさる梅の枝るいらる、

〔實隆公記〕四 十一月廿九日、癸巳晴、今日猶候番、日吉御法樂題令支配了、

十二月八日、辛丑晴、小浴、日吉御法樂詠草遣飛鳥井大納言入道許、則令清書、
入夜參内、言國朝短册令持參之、今夜候宿、

幕府、以成九建仁寺住持トナス、

〔建仁寺住持位次簿〕城○山 不入寺 二百十世 九峯和尚 名以成、嗣續芳以孫、

〔五岳前住籍〕東山建仁禪寺 歷代住持位次 二百十世、不入院、九峰成禪師、文明九年十月

〔東山歷代〕城○山 九峯以成 嗣續芳以孫、嗣此山妙在、如是院、十如之開基、

養前住萬壽、後住天龍、九峯老漢云々、

十一日、甲辰義政、日野政資ノ第二之ク、

文明九年十二月十一日

八七七

八七六

〔尋尊大僧正記〕八 十二月十三日、

一九四郎左衛門秀永自京都罷下、略 中十一日、公方ハ日野亭ニ御成云々、

十二日、乙河野通春、禁勝ヲ伊豫三島社ニ掲グ、

〔三島文書〕坤

禁制

大祝宿傍示境内

右軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、堅所制止也、若有違犯之族者、可處嚴科之狀如件、

文明九

十二月十二日

(河野通春)
伊豫守(花押)

十三日、丙正四位下冷泉爲廣、姉小路基綱ヲ竝ニ從三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十 非參議從三位藤爲廣、廿八 十二月十三日敍、元左中將、

父正二位行權大納言爲富卿、母、享德元年十一月廿二日敍從五位下、同四

年後四月廿七日任侍從、康正三年正月五日敍從五位上、長祿三年三月廿一

日兼出雲權介、寬正五年六月三日任左近衛權少將、同五年十二月五日敍從

四位下、十五 同六年三月廿四日兼因幡介、應仁元年三月廿七日轉任權中將、

基綱位記
月二十年八
ヲ受ク

同二年正月十八日敍從四位上、文明三年正月廿五日敍正四位下、

〔公卿補任〕四十 非參議從三位藤基綱 八月日、賜去年十二月十三

日敍從三位々記、元左近中將、父故入道參議昌家卿、母、

〔實隆公記〕四 十二月卅日、癸亥晴、略 中 今日爲廣朝臣上階事御免云々、日

付今月中旬之分也云々、

〔親長卿記〕八 十二月卅日、晴、依召參内、就兩頭昇進事、有被尋下之子細、爲

廣朝臣上階事申之故也、略 中 爲廣朝臣敍三位、

〔親長卿記〕九 文明十年八月廿一日、晴、新中納言、量光、新三位、基綱、去十六

以源大納言被仰元長宣下了、等來、

〔歷名士代〕

正四位下源俊量 (文明) 同九十二二十三、

從四位上菅爲親、卅才、文明九十二二十三、

從四位下藤宣親 (中山) 同九十二二十三、

從五位上藤重種 同九十二二十三、

〔實隆公記〕四 十二月十三日、丙午、晴、抑今日俊量朝臣、位正、四 爲親朝臣、從

文明九年十二月十三日

八七九

綾小路俊
量
五條爲親
中山宣親

四位重種、位上、俊量、重種等予宣下之、

○白川富秀以下ノ敍位、便宜左ニ合敍ス、

〔歷名土代〕

從五位下忠實男、實管在治男、(文明)源富秀 同九十二十八、

從四位上(白川)兼照 同九十二廿四、

正五位下(政平)兼永 同九十二廿四、

近衛政家、鷹司政平等、奈良ヨリ抵リ、京都平定ヲ賀ス、尋デ歸ル、

〔大乘院日記目錄〕三 十二月十三日、陽明(政家)御方御上洛、次、年正月十日、御下向、

十五日、鷹司殿御上洛、

〔尋尊大僧正記〕八 十二月十三日、

一 陽明右(政平)符今日御上洛、權中納言(勸修寺)經茂、卿同道申云々、爲今度御禮并御領事

勸修寺經
茂上洛
所領ノ事
ヲ申請ス

十五日、

一 鷹司右符御上洛、御共諸大夫越前守云々、岡崎若君御同道、自彼門跡御迎

衆參申、

廿一日、

政平奈良
ニ下ル

一 鷹司殿御下向云々、

〔尋尊大僧正記〕九 文明十年正月十四日、

一 昨日陽明御方御妻武者小路西洞院下向云々、

〔御湯との、上乃日記〕一 十二月十五日、つねもちの卿ならよりの不り

て御れいよしこう、御さ井めん有り、

十七日、まうりうさとの御れいよ御るいり、御下すうさよ御さいめんハ

なし、こんゑ此右ぬも御るいり、御たいめん有り、御宮けよ二色二うゐる、

なんとのそうしよほろをしゑこう、御さヶ月さふ、

〔實隆公記〕四 十二月十三日、丙午、晴、今日右府上洛云々、

十四日、丁未、晴、今日猶候番、經茂卿上洛、有御對面、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文、
庫所藏 十二月十五日、戊申、晴、時々雪下、入夜月明々、秉燭程

參賀右府、御靈也、一昨日御上洛之故也、有盃酌興、藤大納言、新藤宰相、勸修寺中

納言等祇候於宰相中將殿有先盃、仍沈醉之外無他及半更歸家、

赤松政則ノ兵、山名政豐ノ兵ト京都ニ鬪フ、

政家御靈
社ニ宿ス

政平參内
政家參内

勸修寺經
茂

政豐ノ部
下黨ヲ成
シ相争フ

文明九年十二月十五日

八八二

〔尋尊大僧正記〕 八 十二月十三日

一九四郎左衛門秀永自京都罷下、略中赤松ト山名足輕事ハ落居、但就此事
山名之内物共、引分可確執様ニ成下云々、

○争鬪ノ日詳ナラズ、姑ク本文ニ據リテ掲書ス、

十五日、戊申月食、

〔實隆公記〕 四 十二月十五日、戊申、晴、今夜月蝕、子丑但不現歟、御所叟事極

薦存知之、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十二月十五日、こよひのあよく縁うしの時、い

つものことく御所つゝ、みるいらする、

〔兼顯卿記〕 庫○岩崎文 十二月十五日、戊申、晴、時々雪下、入夜月明々、月蝕十

五分之六半弱、虧初子七刻四七分半、加時丑三刻、復未丑六刻六十四分半、

〔本朝統曆〕 十一 癸丑十二大朔甲午、西十五夜望、丑月蝕六分強、子八、丑七、

九條政忠ノ子某、岡崎蓮華光院ニ入室ス、

〔大乘院日記目錄〕 三 十二月十五日同日、岡崎若君入室、九歳、九條前内府御息、鷹司殿御

猶子也、

現レズ

鷹司政平
ノ猶子ト
ナル

〔尋尊大僧正記〕 八 十二月十四日、

一九條前内府若君九歳、爲鷹司左大臣殿御猶子、夜前自古市奉入王寺坊左
府亭、爲岡崎門主也、一昨日より御迎侍從并福阿ミ下向了、侍從ハ故兵部
卿法眼子也云々、

十五日、

一○中略、鷹司政平上洛ノコト、岡崎若君御同道、自彼門跡御迎衆參申、

十六日、己酉幕府、寺社ニ命ジテ、祈禱ヲ行ハシム、

〔兼顯卿記〕 庫○岩崎文 十二月十六日、己酉、晴、午天參小河殿、御祈事披露、參

御臺御方、條々披露、目六注公務、

十七日、庚戌一條兼良、奈良ヨリ京都ニ抵ル、尋デ、冬良モ亦抵ル、

〔大乘院日記目錄〕 三 十二月十七日、禪閣御上洛、

廿七日、二條文今御所以下御上洛了、

〔尋尊大僧正記〕 八 十二月十三日、

一來十四日可有御上洛傳馬三疋、人夫三人分、自禪閣以判官被仰下之、畏入
了、隨心院殿隨心院殿同一疋一人事承、可被仰清賢之由、各申入之了、御大儀也成立

隨心院殿
寶ヲ伴フ

文明九年十二月十六日 十七日

八八三

文明九年十二月十七日

八八四

兼良上洛
松殿忠顯
等屬從

十七日、

一 禪閣御上洛、御板輿御共隨心院殿、(松殿)各馬、慶弘、常弘、秀永、自一乘院殿木

津ニ被仰付歟、般若寺邊ニ御迎參申云々、北面衆以下至般若寺參申馬大

市庄一疋、服庄一疋、人夫倉庄一人、院入一人、十座二人、河合夫

廿日、雪、

一 隨心院殿下向、昨日至宇治下向云々、

廿二日、

一 自禪閣御書被下之、自武家御申子細在之間、於京都有御越年云々、珍重

事也、畏入了、

廿七日、

一 成就院ニ參申、明日御上洛也、

廿八日、今曉雷

一 今御所、三條殿、姫君兩所、左衛門督殿、兵衛佐殿、有官別當所松殿女房、小女房、以上御輿六丁、

今御所御輿昇、自一乘院殿被進之云々、

冬良上洛

兼良京都
ニテ越年
セントス

殿寶下向

馬ヲ出シ
タル所々

判官所同息、老女也
女房、女房、下女、松殿、以上馬、

石左衛門御共申、荷共宰領二、百文下行百文下行慶万、菊松、□召進之、

馬事各夜歸

一疋 口付、古市進之、

一疋 小吉田傳馬、

一疋 高田傳馬、

一疋 代物四百文下行、駄賃方、

人夫事各夜歸

一人 淨土寺下部、

一人 極樂坊下部、

一人 小塔院下部、

一人 竹内下部、

一人 北坊下部、

三人 辰市御師召進之、

一人 唐笠持申、

一人 作手中、

一人 代二百下行、

一人 代二百五十下行、

一人 自松林院下部、

一人 吉田方松殿ニ進之、

三人 古市方松殿ニ進之、

一人 御宿御ヤトに云々、

北面衆以下、至木津邊ニ參申、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十二月十八日、一條のきんろう御下すうさよ

文明九年十二月十七日

八八五

兼良殿寶
參内

兼良妙觀
院ニ宿ス
公武共ニ
兼良ヲ留

文明九年十二月十九日

八八六

て御あり、御ひさしよて御さいめんあり、すいしん院も御あり、これも
下をのよて御さいめんなし、

〔長興宿禰記〕

上

十二月廿日、今日予參一條殿御宿、妙觀禪閣一亂中南都
御座、近日御上洛之間爲公武被留申之、可有御在京也、御家領之事可被仰付
由、自室町殿被申入之、御對面、遙不被仰下、積鬱之間有仰、暫申上了、

〔尋尊大僧正記〕

九

文明十年正月九日裏文書

京都之儀無爲無事、御家門様御上洛目出度存候、尤以參賀可申入候處、懃行
以下惣別不得隙候間、先捧賀札候、一段以參仕御禮可申入候由、可有御披露
候、恐々謹言、

十二月廿九日

實盈

御番衆御中

十九日、壬幕府、山城守護山名政豐ニ命シテ、同國ニ散在セル主殿寮領ヲ
壬生晴富ニ還付セシム、

〔宮内省圖書寮所藏文書〕

主殿寮領
雜々三

官長者雜掌申、主殿寮領山城國乙訓郡内散在田畠等事、早任去年十二月十

九日御奉書之旨、如元可被沙汰付下地於雜掌之由候也、仍執達如件、

文明十

十月廿一日

基守(花押)

直秋(花押)

神保與三殿

官長者雜掌申、主殿寮領山城久世郡内散在田畠等事、早任去年十二月十九
日御奉書之旨、如元可被沙汰付下地於雜掌之由候也、仍執達如件、

文明十

十月廿一日

基守(花押)

直秋(花押)

遊佐彈正忠殿

二十一日、甲内侍所恆例竝ニ臨時御神樂、

〔御湯との、上乃日記〕

一

十二月廿一日、こよひの御(御方)□□(三條西實隆)奉行頭中將(三條西實隆)は
んしやうゐる、いつよりあはれうあり、雪とた〜ぬる、めちとし、

〔實隆公記〕

四

十二月七日、庚子、雪降、今日頭右大辨送一通、
内侍所御神樂、可令申沙汰給、仍執達如件、

奉行三條
西實隆

文明九年十二月二十一日

八八七

文明九年十二月二十一日

十二月五日

謹上 頭中將殿

右大辨兼顯

八八八

神樂風記

御教書ヲ
頒ツ
神樂所作
人訪料

散狀ヲ義
政ニ進ズ
吉田兼俱
ヲシテ内

旁難治之間、故障之由、内々遣消息了、

八日、辛丑、晴、廣橋送使者、御神樂事可申沙汰之由、重而頒責伏之間、且領狀了、

十日、癸卯、晴、御神樂風記召進上之、十六日、廿一日、廿九日、此分也、十六日不可

事歟之間、廿一日之定可相催成之由、勅答有之、

十二日、乙巳、晴、小浴、多久時來、御神樂之事等申含了、

十五日、戊申、晴、御神樂御教書、付、付、今朝所々遣之了、

十七日、庚戌、晴、御神樂所作人御訪事等、少々申遣勸修寺許、久時和琴所作之

間、百五十疋可賜之云々、

十八日、辛亥、晴、景益來、笛御訪事申之、

廿日、癸丑、雪降、及晚參御所、内侍所前雪令拂之、明日御神樂事等申入之、退出

之次、向勸修寺亭、被勸一盞、入夜歸宅、始神事者也、

廿一日、甲寅、晴、早且行水、及晚御神樂散狀付勸修寺大納言許、進上武家、黄昏

著束帶參内、雜色一人、召具之、先仰兼俱卿召神祇官、被令清内侍所、本儀不然、當時御所

侍所ヲ祓
ハシム
出御ナシ

中汚穢不淨等混亂之間、密々刻限開大門、門役無之、合座事等仰付了、今日無出御、
相語戸部卿加此沙汰之者也、
典侍内侍又不及參向、先臨時、
事始、本拍子季經卿、末俊量朝臣、付歌忠英、忠久、笛景益、景康朝、筆築安倍季繼、
和琴久時、今度初、人長安倍季音也、早歌了予仰星、其朝時分雪甚降、點人長舞
袖柳枝等催興者也、臨時了始恒例、拍子本俊量朝、付歌忠久、自餘所作同前、早
歌了、予又仰星、丑下刻事終、今日無一事違亂之條、珍重々々、

〔長興宿禰記〕上 十二月廿一日、内侍所御神樂也、

義政、天龍寺ニ、其寺領ノ諸國ニアルモノヲ安堵セシム、

〔天龍寺文書〕

○山城

天龍寺并雲居菴領諸國所々別錄、在事、所返付也、如元可被全領知之狀、如件、

文明九年十二月廿一日

准三宮(花押)

臨川寺

臨川寺領諸國所々別錄、在事、所返付也、早如元寺家可全領知狀、如件、

文明九年十二月廿八日

准三宮(花押)

文明九年十二月二十一日

八八九

文明九年十二月二十一日

八九〇

○臨川寺領安堵ノコト、是日ノ事ニアラザレドモ、便宜合致ス、幕府、石見ノ益田兼堯、出羽太祐ニ書ヲ與ヘテ、畠山政長ト共ニ、同義就ヲ伐タシム、

〔益田家什書〕 七五

右衛門佐義就對治事、駈催軍勢、令進發河内國、相談左金吾手、可被抽戰功之由、所被仰下也、(傳説)執達如件、

文明九年十二月廿一日

(布施英基) 彈正大夫忠判
(飯尾爲信) 加賀守判

益田越中守殿

〔萩藩閥録〕 三四

右衛門佐義就對治事、駈催軍勢、令進發河内國、相談左金吾手、可被抽戰功由、所被仰下也、仍執達如件、

文明九年十二月廿一日

彈正大夫忠判
加賀守判

出羽孫次郎殿

筒井順尊等、大和下高畠ヲ襲ヒテ、之ヲ燒ク、越智家榮ノ兵、邀ヘ撃チテ之ヲ破ル、

〔大乘院日記目錄〕 三 十二月廿一日、自筒井方夜打吉田之在所、

〔尋尊大僧正記〕 八 十二月廿二日、

一同夜自佐川之没落人方、押寄下高畠、而在家四五間燒之、吉田坊門戶燒之、越智之手者共、高畠并藥師院辻子等ニ陣取在之間、及合戰、寄手散々事也、五六人被打斃了、馬以下取之、中坊長圓房之馬也云々、被斃之内、藤井細名主也三日谷之中、共隨一ナリ、三藏院之芝ニ三人、上總之辻子般若等大路等也、筒井成身院以下佐川ヲ相憑隱居、彼面々沙汰也、仍夜前ハ祝著内也、如此惡行且如何、不吉事也、佐川所存不審々々、惣而十三人被斃云々、越智方隨分者共半死半生云々、

廿三日、

一佐川之成身院方ニ榼三荷、料足五百疋給之、同筒井方ニ榼五荷、折一合五百疋給之、兩所ニ巨細仰遣了并舜行方、中坊方同巨細仰遣了、

廿四日、

文明九年十二月二十一日

八九一

吉田坊ノ門ヲ燒ク

筒井順尊等佐川ヲ憑ミ隠ル

一筒井成身院返事到來、畏入之由也、中坊先夜負手而笠置ニ在之云々、
二十三日、丙辰皇子、勝箏曲ヲ權大納言四辻季春ニ受ケ給フ、

〔御湯どの、上乃日記〕 一 十二月廿三日、宮の御々、そう御てんしゆ、御

うさよてうと三こん御いせいあり、やぬ(四辻季春)の新大納言よあろ御さち御むる
さぬ、かしこまり申さるゝ、新大納言も御さちるいらるゝ、ぬしゝ殿よりも
御めささとして、御さちるいらるゝ、源大納言るいらるゝ、あなゝこねさより御
めてささ御申あり、めささしく、

〔京都御所東山御文庫記録〕 丙五

蘇合香

蘇合香
皇帝破陣
樂

〔皇帝破陣樂〕

第四帖 樂拍子
說之

右曲、所奉授宮御方也、

文明九年十二月廿三日

權大納言藤原季春花押

文明九年十二月廿三日、若宮御方箏曲蘇合御傳授、奉行家司内藏頭言國朝

言國
奉行山科

傳受次第

傳受典書

臣兼而來示此由、爲後證可給一通之由申之間、廿二日送之、當時御同宿之故也當日辰巳刻參内

著衣冠、重大帷、雜色一人召具之、宰相中將同祇候之、參宮御方、北方疊上ニ御
座ヲ重儀、舊院御位之時御傳授、不就於東方御座敷長押下、伺御目後、上長押

著、自前次言國朝臣予目進テ進御器兼而立御柱、退、次極薦菅原在敷進、予目
取器與予、立柱置予器音取、次御器被取上、次序、次三帖、次四帖、次五帖、次破急

二反、授申入了、本役者取箏退出之後下座、從懷中取出與書進上退出、進御太
刀、言國朝臣同之、源大納言同進之、次御所様參御前、申入祝著之由了、於宮御

方有三獻、今日御精進之由存之、公方御座御傳受之時、每度御傳受已前計御
精進之由、源大納言物語ス、然間同此儀了、退出已後言國朝臣使者來、尤雖可

持參、爲當番以使者申候き、祿被下白御劔御馬等、但御馬代後日自長橋送之、
是日爲御參内之間、今日内々下マテ參ノ申入了、四辻季春

〔實隆公記〕 四 十二月廿三日、丙辰、晴、今日若宮御方蘇香御傳受、季春卿參

入云々、言國朝臣奉行之、御器彼朝臣置之、御師範器菅原在敷置之云々、晝間
令祇候、珍重之由申入之、

〔親長卿記〕 八 十二月廿二日、晴、今朝宮御方箏曲御傳受云々、新大納言季春、

奉授也

〔長興宿禰記〕

上

十二月廿三日、近日若宮大曲御相傳也云々、

○邦高親王兩曲傳受ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯との、上乃日記〕

一

十二月廿一日、ふしと殿をやうきよくの御て

んしゆとて、この御所御さちまろ御むる代りいる、ふしこまり御申あり、宮の御うさよりも御さちりいる、とん部卿くら之物御さるゐらせらるゝ、

〔實隆公記〕

四

十二月廿二日、乙卯、晴、參竹園、昨日四絃兩曲皇帝團亂轉御傳受、

今出川持季傳受前内大臣被參云々、兼日俊量朝臣申沙汰之、當日重治朝臣存知之云々、珍重

之由申入之、黄昏參内、

義政父子及ビ夫人日野氏參内シテ、歳暮ヲ賀シ、宴ニ侍ス、一條兼良モ亦、

召ニ依リテ侍ス、

〔御湯との、上乃日記〕

一

十二月廿三日、御さんたい八とた、宰相中將殿

御さいも御ゐり、三こんゐる、めてさし、御さ井より女をうさちのあうへ、御宮けとて万疋ゐらせらるゝ、めてささとて、御うはら孝のもの十色三々□□あとも此なりよりゐらるゝ、三こんえて、御はしくとゐい

邦高親王
ヲ賜フ

今出川持
季傳受

日野氏女
房ニ萬疋
ヲ贈ル

一條兼良
祇候

るのちよ一てうの前ううふえう御しこう、御下をうさよて御ひさしよ御しこう、くしうさひなと御はしくとめてさしく、

〔實隆公記〕

四

十二月廿三日、丙辰、晴、今日室町殿、大樹等歳暮御禮御參内

也、爲參會令祇候、申刻御參、勸修寺大納言、源大納言、兵部卿、民部卿、頭辨、予、日野侍從等參會、准后御共言國朝臣、大樹御供永康也、三獻之時各參入、武家御酌如例、頃之依召禪閣一條被參入、下姿被候庇、及數獻、八獻御酌予取之、推參鬪也、退出已五更也、無爲無事、珍重々々、

〔親長卿記〕

八

十二月廿三日、晴、今日室町殿、歳末御參賀御參内也、依不具

〔長興宿禰記〕

上

十二月廿三日、室町殿御參内、御臺、一品、同御參、有御一獻、

一條禪閣依召御參内、有御會合、

〔尋尊大僧正記〕

八

十二月廿八日、今曉、雷、

一自禪閣御書被下、略中廿三日於禁裏御連歌、

野も山も雪ふ平の都哉 桃
草木も風のまはるあり時 准后

連歌

文明九年十二月二十三日

八九六

御製
義政料足
ヲ獻ズ

料足五十貫文、自公方被進之云々、
足利成氏、上野瀧ヨリ移リテ、同國觀音寺原ニ陣ス、上杉顯定、同定正モ亦、
漆原ニ陣シテ之ニ備フ、

〔太田道灌狀〕前○肥

略○上

太田道灌
參陣

一十二月廿七日、漆原へ被出天子御旗、徒被送日數候之間、親候（太田道灌）入道大將陣

成氏和田
ニ至ル

へ參、若干申談候間、保戸田被相遣候、然而十二月廿三日、公方様瀧御陣ヲ

御立、和田へ被差寄、翌日ハ觀音寺邊ヲ被打上候時モ、就御馬被立所等様
々儀共候し、御存知之前候間、不及申候、

一廣馬場御陣時、如存者國分へ打廻、自御敵陣後被懸候者、御勝利不可有疑

旨申候處、越後衆如令申者、白井ヲ成後御合戰尤候、不然者不可有御同心

旨候間、其分相定候處、略○中

（宋書）文明十一年十一月廿八日

道灌判

謹上 高瀨民部少輔殿

太田道灌
國分ヲ迂
廻シ敵陣
後ニ出ツ
ルヲ説ク

〔松陰私語〕

一

略○上

其後公方御旗府中觀音寺原ニ被進、十二月廿三日也、上

岩松長純
先陣ス

梶兩家同時ニ打立、水澤白岩之麓、打下、公方、御旗ニ打向、而張陣、其勢五千餘騎、公
方之御勢者八千餘騎、當方五百餘騎、今日御合戰ニ初合戰ヲ申請處也、公方之御
旗者、其手崎敵陣方（先下向シ）俄而吹塵、實吉之占相也、御方之可勝事者決定也、公官兩

陣其間二里計也、隔切所打向、兩陣之形勢打廻見渡、本朝無双之囂陣也、其爲
躰誠刀劔動銀山、牟盾論鐵壁、往昔源平兩家戰場不可過之、與各思勇計也、大

軍之備當國廣馬場之原也、其原狹、與打詰而、初合戰、當手申定處也、於諸家各
羨之計也、御前御馬者、自諸家弓杖十杖計進過、然於愚僧公方様、言上、御旗

進過故下立可仕、前後之儀狹而不自由、間此地有御扣、初合戰當手之動可有
高覽之由言上、依之役人被立直御旗、然間當手五百餘人同時下立、公方御前

之下立愚僧松陰、左之手崎之下立横瀨成繁、々々上打輪者、五百餘同時下立、
楯一面ニ突竝而、楯一帖之兩方、一方、大太刀、一方、弓、々々未活裏、一方、太刀、踏左足

待懸而兵通、與切放キ、楯面、大太刀計也、左右之構同前也、不然、楯之面、透間計
也、爰元之古實兵略無双之構也、奉始公方様、諸家之褒美不尋常、御（略）方中一

之構、與各見物之、如此時刻移間、大雪俄而降及夜陰間、無合戰、○下略、築田持
助調停ヲナシ、

大雪ニテ
戰ナシ

文明九年十二月二十三日

八九七

文明九年十二月二十五日

九〇〇

旨、無不法懈怠之儀者、不可有相違之由、被成勅裁候、珍重候、彌可然之樣可有
執沙汰也、謹言、

文明九

十二月廿五日

布施新四郎

〔京都御所東山御文庫記錄〕 十乙三

校正訛、

契約申 代官職并永代契約分等事、
鴨太神宮御領美濃國梅原庄

日供料所
社家ノ衆
議ニ依ル
社納三百
五十貫文
五分ノ一
代官得分
社家申合
退クベシ

一 彼庄者爲日供料所異于他神領也、然今度御神忠無比類之間、以社家一同
之衆儀、對布施新四郎貞清方、未代彼庄契約之上者、被帶綸旨并御判等御
下知、子々孫々御知行不可有相違者也、

一定社納分參百五拾貫文也、此內五分壹可爲代官得分、運賃在社納內、并直進物、諸
公事人夫以下、目録在別紙、任此契狀之旨嚴密可被執沙汰者也、

一 或守護方、或國代官并名主百姓等、任雅意年貢諸公事以下有押妨之儀者、
更不可爲代官無沙汰者也、自今以後社家相共申合可退押妨者也、次運送

之時、於路次年貢有相違者、代官相共可申届、万一代官奸謀令露顯者、可有
其科者也、

一 閣代官、相語國代官、直彼年貢諸公事以下令社納族在之者、被訴申公武、可
被處一段之科者也、

一 爲神用每々有社家借錢之儀者、可爲五文、子利乎、然雖爲天下一同之德政、不可有
其煩、於彼秘計者、對當任社務、遂算用可被引取之、於彼庄者不可成他引懸
之上者、彌不可有相違者也、

一 相定社納之年貢諸公事之外、未代契約分事、

次夫錢 社家夫拾七口除之、 次御神服 餘錢

次房七錢 次佃米、

次閏月段錢 次闕所檢斷、

次公用參百九拾餘貫文、內四拾貫文等事、定社納公用參百五拾貫文并直
進物等、仁不相拘之上者、万一縱雖有代官職相違、於彼庄者未代契約分等、
依有神忠、子々孫々可被全御知行者也、定公用之外爲社家、於彼庄者不可
致其綺者也、

文明九年十二月二十五日

九〇一

代官ノ閣
キ年貢ヲ
直納スル
モノヲ罰
ス、
神用トシ
テノ借シ
ハテノ子
利ノ算
文ノ任
社務ノ算
外諸納
ノ公事以
分納契
納

文明九年十二月二十六日

九〇二

右條々雖爲一事有違亂族者爲公武可被處罪科之旨以社家一同衆議堅取申定也仍爲後證之狀如件

文明九年十二月十三日

鴨社務

祐躬 在判

幕府、畠山政長ヲ以テ、復管領ト爲ス、

三ヶ度

〔執事補任次第〕畠山左衛門督 政長朝臣 文明九年十二月廿五日補任、已上三个度、同十八年十个年、

〔武家年代記〕中 文明九十二廿五、左衛門督政長任職、再三ヶ度、

〔鎌倉大日記〕 文明九、政長三任、

〔異本塔寺長帳〕原題長帳 續年日記 四 文明十年、戊戌、畠山政長再任管領

○政長、管領ニ任ゼラル、コト、寛正五年十一月二十三日ノ條ニ、罷メラル、コト、應仁元年正月八日ノ條ニ、再任シ、尋デ罷メラル、コト、文明五年十二月十九日ノ條ニ、コノ後罷メラル、コト、同十八年七月十九日ノ條ニ見ユ、

二十六日、己未土御門有宣ニ命ジテ、皇子勝仁ノ除厄祈禱ノ日時ヲ勘進セシ

ム、

〔親長卿記〕 二三十

就宮御方明年御重厄事、可被行御祈、正月寂前吉曜可捧給候、

十二月廿六日

三位殿

一昨日雖被仰下候、依物忌令忘却、

二十七日、庚申後花園天皇聖忌、二尊院善空ニ命ジテ、往生講ヲ安禪寺ニ修セシメ、冥福ニ資ス、

〔御湯との、上乃日記〕 一 十二月廿七日、石んせん寺殿よて、二そん院よりわうしやうかうおこあはせらるゝ、つけ物御ウしあり、

〔親長卿記〕 八 十二月廿四日、晴、晝間參内、番也、宿菅原在數祇候、今日仰ニ、

廿七日可被行往生講之由被思食、可申沙汰、先召二尊院僧可談合云々、即召寄統惠房談仰之趣、申合長老可申左右云々、立歸申之云、寒中躰之上、式等旁難治、雖然仰之上者可參勤云々、此旨然者樂人等可仰、仍於御前書御人數、

四社新大納言、季春綾小路中納言入道、若者園前中納言、松本兵部卿、宗綱四辻宰相中將、

文明九年十二月二十七日

九〇三

參仕樂人
人數
殿上輩

文明九年十二月二十七日

言國朝臣、俊量朝臣、元長、

地下輩

地下輩

(置原)緣秋朝臣、景益、太神、景俊等也、

今日豐房、統秋、自坂本上洛、曲御傳受御禮申之、可被召加之、由申之、可召加云々、

々、

樂人等以折紙觸之、兵部卿輕服之間故障云々、

廿七日、晴、景益申、景俊下八幡了、未上洛、景康朝臣被召加者可畏入云々、仍奏

聞、可召加云々、

酒肴分百疋被付之、

長老御布施二百疋、

僧衆六人布施二百疋、

同食料百疋、

以上佛性燈油等事、雖尋寺家、無殊事、不可被下行之、由申之、仍無下行、

參仕之輩、時料被進安禪寺殿、於御寺有時、人數新大納言季春、綾小路中納言

入道、予、園前中納言、四辻宰相中將季經、言國、俊量等朝臣、元長等也、

安禪寺ニ
於テ齋ア
リ

樂目錄

午下剋許僧衆參堂、堂莊殿一向、寺家沙汰也、

堂上人々有東簾中、地下輩有正面、

樂目錄予書之、樂數事新大納言、綾小路前中納言入道等談之、

往生講

盤涉調

採桑老只拍子

蘇合三帖

同急

白柱

輪臺青海波

竹林樂

千秋樂

事了退出、參內、今日事等種々有御尋、樂目錄已下參仕人注之、入見參了、

〔實隆公記〕四

十二月廿七日、庚申、晴、於安禪寺殿、爲勅願二尊院往生講被行之、新大納言等、園前中納言比巴、四辻宰相中將等、俊量朝臣綾小路、元長等、各候簾

文明九年十二月二十七日

中、地下縁秋朝臣、統秋、篁景康朝臣景兼、篁景益、太鼓僧衆六口也、式師長老、伽
陀統惠樂採桑老蘇合三帖、同急輪臺青海波、白羽竹林樂、千秋樂等也、事終少
々歳暮之儀等申入之、退出了、曉天雷鳴甚、
幕府、伊勢盛種ノ押妨ヲ退ケ、光明峯寺領山城小鹽莊ヲ一條兼良ニ安堵
セシム、

一條家ノ
所領ヲ守
護押領ス

〔長興宿禰記〕上 十二月廿七日、今日當國小塩庄光明峯寺領寺家造營之間、可
爲一條殿御知行之由被仰出、被進支證云々、禪閣御堪忍之儀也、御家領處々
守護押領、不及沙汰故也、

〔尋尊大僧正記〕八 十二月廿八日、今曉雷、

一自禪閣御書被下、小塩庄事被退伊勢八郎、悉以御安堵奉書昨日廿七日到
來云々、

越後守護上杉房定、毛利重廣ニ、越後小國保ノ地ヲ給ス、

〔毛利安田文書〕前〇羽

魚沼郡小國保瓦山分并當知行人之分事、爲御恩、知行不可有相違由、被仰出候、恐々謹言、
文明九
十二月廿七日
對馬守定高花押

毛利越中守殿

三河守輔景花押

諏訪二郎
右衛門知
行分

魚沼郡小國保之内諏方二郎右衛門知行分、事、爲御恩、知行不可有相違之由、被仰出候、
恐々謹言、

文明九
十二月廿九日

對馬守定高花押

三河守輔景花押

毛利越中守殿

二十九日、壬戌春日祭延引、

〔御湯との、上乃日記〕一 十二月廿八日、ウズクまつりふく、御神事あり、

廿九日、春日まつりゑんぬんのよし申、

正二位轉法輪三條公敦ヲ從一位ニ敘ス、

〔公卿補任〕四十 內大臣正二位藤公敦、卅九左近衛大將十二月廿九日敘
從一位、

〔實隆公記〕四

十二月廿八日、辛酉屬晴、早旦著束帶參内、自今日當番也、滋

文明九年十二月二十九日

文明九年十二月三十日

九〇八

野井令同導之、抑内府極位事所望、昨日令奏聞、今日又驚申入之、勅許無相違、則書宣旨付冷泉大納言、昨日之日付也、

幕府、山城長福寺ニ、其寺領ノ諸國ニアルモノヲ安堵セシム、

〔宮内省圖書寮所藏文書〕

當局所領雜々

當寺領諸國所々別紙在、事被返付訖、早如元可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明九年十二月廿九日

五條良房 下野守 在判
藤原元經 大和守 在判

五辻長福寺雜掌

三十日、癸亥、參議高倉永繼ヲ罷メ、參議柳原量光ヲ權中納言ニ、藏人頭廣橋兼顯、同三條西實隆ヲ參議ニ任ズ、

〔公卿補任〕

四十

權中納言從三位藤原量光、卅十二月卅日任、元第五參議、左大辨

參議從二位藤原永繼、五十十二月卅日辭、未拜賀、

正四位上藤原兼顯、廿九十二月卅日任、元藏人頭、右大辨如元、父故

從一位儀同三司綱光公、贈内大臣、母 享德四年正月五日敍從五位下、寬正四年十二月日任治部大輔、同日敍從五位上、今日元服、同五年四月廿八日任右兵衛佐、同十一月三日正五位下、交正文元年九月廿四日任左衛門權佐、蒙使宣旨、同十二月廿九日補藏人、同二年正月五日正五位上、同月卅日任右少辨、權佐、應仁元年、元年月日轉左少辨、文明元年十一月二日轉權右中辨、同三年八月廿八日轉任右中辨、同六年正月廿六日敍從四位下、夕郎、九、同二月四日敍從四位上、同四月廿日敍正四位下、年中三ケ度加階例、同七年正月廿八日轉任左中辨、爲修理左宮城使、同日補藏人頭、同八年正月六日敍正四位上、同九年後正月十八日被仰敷奏、辨官敷奏例、同二月十四日喪父、同八月十五日轉任右大辨、

參議正四位上藤原實隆、廿四十二月卅日任、元藏人頭、右中將如元、父故入道内大臣公保公二男、母故前藏人頭右大辨藤原房長朝臣女、長祿二年十二月廿六日敍爵、四歲、子時公世、同月廿八日任侍從、子時公延、同三年三月廿八日兼備中權介、寬正六年正月五日從五位上、文明元年六月廿三日任右少將、十六歲、今日元服、同日聽禁色、同九月十八日正五位下、子時改、實隆、同二年三月十八日從四位下、少將、同元、同四年十月十四日喪母、同十二月廿六日除服、同五年正月廿五日從四位上、

文明九年十二月三十日

九〇九

文明九年十二月三十日

九一〇

同六年四月廿二日、轉任右中將、同月廿九日正四位下、同七年正月廿八日補藏人頭、廿二同八年正月五日敍正四位上、

〔歷名土代〕從四位下藤原親中山 同十二月卅、藏人頭左中將、

〔官內省圖書寮所藏文書〕大中納言參議 宣旨

中山宣親
口宣

口宣一枚

參議左大辨藤原朝臣

宜任權中納言

右大辨藤原兼顯朝臣

右近衛中將藤原實隆朝臣

以上宜兼任參議

左近衛少將藤原宣親朝臣

宜轉任中將事

右職事仰詞內々奉入如件

十二月卅日

大外記局

權大納言花押

請文

〔跪〕
〔宣〕

〔宣〕
〔宣〕

參議左大辨 藤原量光朝臣方

宜任 權中納言方

右大辨藤原 顯朝臣

右近衛中將藤原實隆朝臣

以上宜兼任參議

左近衛少將藤原宣親朝臣

宜轉任中將事

右宣旨、早可令下知之狀、跪所請如件

十二月卅日

大外記中原師富 請文

參議左大辨藤原朝臣量光

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣奉勅、件人宜令任權中納言者、

文明九年十二月三十日

九一一

文明九年十二月三十日

文明九年十二月卅日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

九一二

右大辨藤原朝臣兼顯

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣奉勅件人宜令兼任參議者

文明九年十二月卅日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

右近衛權中將藤原朝臣實隆

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣奉勅件人宜令兼任參議者

文明九年十二月卅日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

左近衛少將藤原朝臣宣親

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣奉勅件人宜令轉任權中將者

文明九年十二月卅日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

〔實隆公記〕

四

十二月廿九日壬戌晴今日兩頭昇進事申入之及種々御沙

汰未及勅許

實隆任官ノ禮廻リ

甘露寺親長冷泉爲廣ノ上階ヲ執進ス

卅日癸亥晴入夜昇進事勅許先以祝著々々右大辨宰相量光卿任中納言永繼卿參議辭退兩頭昇進正親町三條實興朝臣宣親等可補貫首云々畏入之由内々申入之今夜當番令相博戶部卿退出參室町殿大樹等向北小路殿室町殿昇進之御禮金覆輪進上之佳例美物拜領同畏入之由申入了昇進以下事藏人辨政顯各可宣下也

〔實隆公記〕

五

文明十年二月廿一日甲寅晴行水如例中抑今日大外（處方）

持來宣旨舊冬十二月卅日

拜任對面了

〔親長卿記〕

八

十二月廿五日雪下入夜實興朝臣來近日頭辨可昇進予可被補貫首云々公事等可商量云々云老蒙（云々）雖無文書旁難治之由返答然者可辭職云々無謂早可被申領狀之由返答歸了

卅日晴依召參内就兩頭昇進事有被尋下之子細（冷泉）爲廣朝臣上階事申之故也申次有聞誤事被仰下也四位雲客雖申上階貫首不可申所存事歟勅許不可苦之由申入了被尋仰勸修寺大納言之處無覺悟可被尋下予也無參議闕之由有仰第一藤宰相永繼先可被備召於昇進者有不定之仁父卿始而任納言之故也左大辨宰相量光當其仁可被任納言之由申入了正親町

文明九年十二月三十日

九一三

文明九年十二月三十日

九一四

宰相中將望申云々、自量光卿上首指置大辨參議宰相中將昇納言之事雖有例、多分之儀大辨昇進之由申入了、

後聞藤宰相永繼辭退、左大辨宰相量光任納言、藏人頭右大辨兼顯朝臣任參議兼大辨藏人頭、右中將實隆朝臣任參議兼中將、

〔兼顯卿記〕庫所藏 文明十年二月廿一日、甲寅晴、大外記晴富朝臣入來、予八座宣旨持來、則披見、自愛無他、仍太刀糸卷馬代百正遣之、

〔藏人補任〕後土御門院藏人頭

右近中將正四位下藤實隆(文明)同九十二卅任參議、右中將如元、正四位上、

同實興 文明九十二卅補、

右近中將正四位下同宣親 文明九十二卅補、今日四品轉中將、

○園基數侍從ニ任ズルコト、便宜左ニ合致ス、

〔宮内省圖書寮所藏文書〕文武諸官宣旨

跪請

宣旨

從五位下藤原基數(圖)

請文

文明九年十二月三十日

九一五

宣任侍從事

右宣旨早可令下知之狀、跪所請如件、

十二月廿九日

大外記中原師富請文

從五位下藤原朝臣基數

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣、奉勅、件人宣令任侍從者、

文明九年十二月廿九日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

○中山宣親等奏慶ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十御湯殿上日記 文明十年二月廿八日、中あ

りやゑ、くじん、ゆの巻い、淡そうを、御さいめんあり、

〔親長卿記〕九 文明十年二月廿五日、晴、中朝間頭左中將宣親朝臣來、廿

八日拜賀爲習禮也、予如形加諷諫了、

廿六日晴、雨時々下、頭左中將宣親朝臣來、明後日拜賀習禮沙汰之、互細之間加諷諫、公事進退每事請予命之故也、自初冠予取立分也、

廿八日陰、今日頭左中將宣親朝臣拜賀也、依音信罷向了、入夜細雨下、冷泉大

納言源大納言、花山院大納言、予園前中納言、兵部卿侍從宰相、政爲、冷泉三位、爲富、以量富就等在此席、雖細雨下、舞蹈爲晴儀、

〔實隆公記〕

五 文明十年二月廿七日、庚申、東風吹霽、餘寒又相侵、中抑左

頭中將宣親朝臣明日可奏慶云々、仍袍蒔繪細劍馬腦石帶沓、借之、付使者、則遣之了、

行粧

廿八日、辛酉、陰、中抑左頭中將宣親朝臣申拜賀、申次卜部兼致也、舞蹈以下不及見、殿上之儀如例無殊、事方、行粧侍一人、隨身三人、如木雜色一人、小雜色兩

實隆拜賀

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記 四月八日、ふし三てうの宰相

中將は井の、のちよ御さいめんありて、御さる月さふ、

〔實隆公記〕

五 文明十年四月五日、酉、晴、晚頭向內府亭、舞蹈習、談拜賀

進退ノ賀
法ヲ轉作
輪三條公
敦ニ受ク

事等

〔七〕日、己亥、天顔快晴、略、歸路又向內府亭、舞蹈習、禮方、略、中入夜又向內府、舞

事綿密諷諫、雜事等相談了、

〔八〕日、庚子、陰、晴不定、今日可奏慶也、兼日日時、覽之、晝間御藏小舍人國弘、

長途ノ爲
幕府ニ赴
カズ

常燈料注、略、雖然今夜殿上之儀、不可叶之條々有之、當時之作方、法歎而有餘、不及覃筆、舌唯卷而懷之而已、仍彼料又不及下行也、自貫首羽林亭可出立、家內門前等少々令掃除之、陣家步儀也、當時惣別不及車等之沙汰、辨、室町殿參拜之儀、長途難治之間、其趣付右大辨、宰相申入了、

一就裝束事

紫綵平緒借請內府、有文巡方帶借用左大、

蒔繪螺鈿劍、頭中將、文冠木

笏 申請內府、是八條殿相國御奏慶、持給之物也云々、已及四百餘歲、

其形嚴然、誠光明末代之鴻寶者也、珍重々々、

一前駭事、參議之問、任制府號、攝副召具之者也

種在國之間、可爲如何樣哉、且者大納言入道殿、實、被召具之由、見御

記、然者可省略哉之由、雖相存、辨、相府頗可召具、然者長氏可送給之由、入

魂、裝束等令奔波、召具之、抑從五位下源長氏、申任兵部少輔、藏人左少

辨則宣下了、

一僮僕事

前駭

源長氏兵
部少輔ニ
任ズ

僮僕

文明九年十二月三十日

九一八

隨身三人、一人頭中將送之、一人雁都護、一人鷹屋子、鶴若也、二年云、以、兩、三日、譜代之雜、男也、尤可垂哀憐哉、抑德治八條殿御拜賀、且、四人也、然而當時裝束司三具之、不所持云々、有所見、
如木二人、一人頭中將送之、孫右衛門男也、
小雜色三人、一人四辻被送之、

抑今度侍可召具之歟之由雖相存、度々之儀別、不及其沙汰歟、其上應安後八條殿相尋申後、河內府處當家之存分昇卿位之後、長途之、強、召具、是善說之由被勸付之狀有之、仍今日略之、

白丁一人、持笠、

拜賀、儀

酉剋著束帶、浮線綾、表袴、紅引陪木、半比、出座、可被見訪人々、或故障、或不及啓、
案內、滋野井前宰相、頭中將、藏人左少辨元長等在座、故、令祝著之、秉燭、
時分出門、下庭上、長氏獻香、雜色男獻隨身、上如木發前聲、路、行列、先雜色二人、次隨身三人、各取松明、但一人鶴、次如木二人、各二行、左為上首、步儀之間、如此、
次、步、次小雜色、次笠持、次搔副諸大夫、笠持、雜、也、到北小路皇居門前、
如木兩人同取松明發聲、經床子座前、進立無名門代前、人神祇權少副、
卜部兼致出逢、予小揖、兼致歸、帶劔笏歸出相揖、予深揖、藏人歸入、次一兩步

進出拜舞、々々了、聊拂砂刷表袴以下、入無名門代、聊斜步寄北方、是出神仙、懸、

膝於、先右膝、也、下、左、膝、次立、右膝前出、堂上、參御前、於常御所御對、引直、天盃頂戴之、

也、侍酌、退去、參若宮御方、有御對面、則自高遣戶下殿、齊如出、門、不、殿下、

直退出、路次行列等如前歸宅、今日無一事之違亂、無為遂其節、天氣、細雨已、

雖濕衣、臨期無其難、殊更每、德治、八條內府相公御賀、德治二、四十七、

與、歟、自、佳躡之條、誠不知手足之舞蹈者也、珍重々々、抑今日、府賜檯、祝著無、

比類者也、歸宅之、府過門前給之間、奉誘引、盃酌及晚、今日之儀悉彼公御、

扶持也、下具以下送賜、舞蹈以下進退神妙之由、再三令褒美給問、是又自愛、

之專一也、彌可勵稽古哉、
九日、辛丑、陰、自晝雨降、自方々賀札等到來、昨日借用之裝束共返遣之了、左頭中將、太刀來、勸一盞之處、源大納言、民部卿等携一樽、來、盃酌及黃昏、今日遣太刀於申次兼致、

十日、壬寅、雨不休、晚頭參內府、一荷兩種持參之、幕下小倉中將、勘解由小路、

正顯、座、沈醉之間、早速歸宅、遣太刀於長氏、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

文明九年十二月三十日

御湯殿上日記

文明十年六月四日、略、中三七

實興拜賀
實興拜賀
進退ノ親長
法ヲ受ク

うの頭中將えい、はの御所よて御さいぬんありて、御さり月さふ、
〔親長卿記〕九 文明十年三月十七日、晴、頭中將實興朝臣來、近日可申拜賀、
進退事尋之、去年昇進之後、連々來、可請予諷諫之由、頻懇望、雖示斟酌之旨、及
再往之間、無力令領狀、依舊好歎、所存不審々々、不相應也、
答所存之旨、書送極薦、并出納御教書案等注遣了、

實興義政
實興義政
ノニ慶ヲ述

〔兼顯卿記〕庫○岩崎文 文明十年六月四日、甲午、晴、今日頭中將實興朝臣奏
貫首慶、小河殿御門事、得其意可申入由、有使者、則可申入旨返答、以春日局致
披露、可開門由、觸仰番衆者也、亥剋許參小河殿、自閑所密見物、小雜色二人、取
松明先行、次隨身三人、同取松明、次如木雜色一人、小雜色一人、侍一人等也、
正四位下鴨秀顯ヲ從三位ニ敍ス、

〔親長卿記〕二三十

正四位下鴨秀顯縣主宜敍從三位、可被宣下給之由、被仰下候也、謹言、

十二月卅日

親長

藏人辨殿

雖爲拜賀已前、有先例者、可勸社役之由、可被下知給也、

〔親長卿記〕八

十二月卅日、晴、及晚奏鴨秀顯申上階事、勅許、

〔兼顯卿記〕庫○岩崎文

十月廿四日、戊午、晴、○次向新兵衛督局里、可談子
細有之、有音信問、罷向者也、祝秀顯上階事、并神領等有談合、被勸一盃、

〔鴨縣主家傳〕祝三

秀顯光教男、同九年十二月卅日敍從三位、

○上下賀茂社々人氏人敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔鴨縣主家傳〕二

梨木祐宣祐香男、同九年十月晦日敍四品中二年、

〔鴨縣主家傳〕后改光祐男

同九年十月卅日敍正五位下中二年、

〔鴨縣主家傳〕福宜家氏人

南大路長久長國男、同九年十二月廿九日敍從

〔親長卿記〕二三十

四位下七十四才、中四年、

〔親長卿記〕二三十

賀茂重崇宜敍從五位下、々々々々賀茂重崇宜爲澤田祝、可被宣下給之由、被

仰下候也、謹言、

後正月廿五日

藏人辨殿

藏人辨殿

梨木祐宣
泉亭信祐
南大路長久
賀茂重崇
澤田祝